

序

2019 年は、沖縄戦が終結して 74 年目となります。その間、時が経つにつれて、沖縄県では戦争体験者の方々が少なくなり、戦後生まれが人口の約 9 割を占めるようになりました。そのため、沖縄戦の実相や戦争体験者の声・思いをどのように次世代へ伝えていくのかが、課題となっております。

一方、私達が暮らす世界はグローバル化が進み、ヒト・モノ・カネ・情報が国境を越えて行き交う時代へと大きく変容を遂げております。政治・経済・人的交流の深化に伴い、やがて人種、宗教、国籍の違いを超えて互いに理解し合う、平和な時代を実現できるかと思われました。

しかし、残念なことに、2015 年 11 月 13 日にはパリ同時多発テロ、2019 年 3 月 15 日には、ニュージーランドのクライストチャーチにある 2 つのモスクで銃乱射事件が発生するなど、多くの市民が犠牲となる事件が後を絶ちません。その他、飢えや貧困、経済格差など、以前から指摘される国際的な課題も山積したままとなっています。

これらの課題は、平和な社会の実現に脅威となるものであり、1 国のみの努力で解決できるものではなく、人類が互いに協力しながら粘り強く解決すべき課題と言えます。その際、課題解決に向けた力の基礎となるのは、人と人の信頼関係です。

このような考え方にに基づき、沖縄県平和祈念資料館は、共通の歴史体験を有する近隣諸国とのネットワークの構築及び平和な社会の実現に貢献できる国際的な視野と平和を愛する心を持つ人材の育成を図るため、『「平和への思い（ウムイ）」発信・交流・継承事業』を実施いたしました。本事業は、沖縄県をはじめ多くの住民が犠牲となった戦争などの共通体験を有する韓国、台湾、ベトナム、カンボジアなど、アジア地域の学生 25 名が沖縄に集い、自国のみならず近隣諸国の歴史や経験を学び、戦争の悲惨さや命と平和の尊さについてあらためて思いを馳せ、史実とそこから得られる教訓を次世代に継承していく方法について考えることを目的としています。

本報告書は、『「平和への思い（ウムイ）」発信・交流・継承事業』の取り組みをまとめたものになります。沖縄県とアジアの学生がとらわれのない心で交流し、互いの理解を深め、平和への思いを共有するまでの経験を記録しています。本報告書を通じて、本事業の成果を理解していただくとともに、学校など教育の場において、平和教育や国際理解教育等に活用されれば幸いに存じます。また、参加学生が国籍や言葉、文化の違いを超え、本研修を通じて培った「平和への思い（ウムイ）」を基に、人的ネットワーク＝『平和の架け橋』を構築し、アジアだけでなく世界全体で平和な社会が実現できるよう活躍することを希望します。

最後に、本事業の実施にあたり、参加学生の募集・選考、事前研修の実施にご協力をいただいた参加国・地域の大学や博物館をはじめ、講義を担当していただきました高良倉吉琉球大学名誉教授、沖縄県平和祈念資料館友の会の仲村真様、研修やシンポジウムでディスカッションのコーディネーターを引き受けていただきました新垣誠沖縄キリスト教学院大学教授、そして参加学生を温かく歓迎していただいた伊江島の民泊家庭の皆様へ、心から御礼申し上げます。

2020 年 2 月

沖縄県平和祈念資料館

館長 外間 裕朋

目次

序

第1部 事業総括

第1章 事業概要

1. 目的	2
2. 実施主体	2
3. 事業内容	2
4. 実施期間	3
5. 実施体制	3
6. 参加国・地域における実施事業	
(1) 参加者選考	5
(2) 事前学習	8
7. 沖縄県における実施事業	
(1) 沖縄合同宿泊研修	
①研修日程	10
②研修内容	11

第2章 事業評価

1. はじめに	14
2. 評価結果	14
3. 研修終了後のアンケート結果について	17
4. 総括評価	18

第2部 「平和への思い（ウムイ）」発信・交流・継承事業 成果報告

第1章 沖縄合同宿泊研修参加国

1. 参加者紹介	20
2. 研修参加国・地域の地図	25

第2章 沖縄合同宿泊研修の実施

1. 研修前半	
(1) 講義 沖縄の歴史・文化	28
(2) 講義 沖縄戦について 沖縄県平和祈念資料館友の会の役割	29
(3) 講義・視察 ひめゆり平和祈念資料館の継承活動	30
(4) 視察 沖縄県平和祈念資料館及び平和の礎	32
(5) 振り返り これまでの研修を通して感じたこと	33
(6) 講義 沖縄の基地問題を知る（嘉数高台から見る普天間飛行場）	36
(7) 講義・視察 ヌチドゥタカラの家（伊江島から発信する非暴力と反戦）	37
2. 研修後半	
(1) ディスカッション 相互理解と若者の可能性	39
(2) ディスカッション 「発信・継承」についての課題	42
(3) 共同宣言の策定	47

第3章 シンポジウム

1. はじめに	56
2. 成果発表	58
3. パネルディスカッション	89
4. 共同宣言	96

第4章 研修後の平和発信活動への取り組み

1. 韓国	98
2. 台湾	99
3. ベトナム	101

第5章 まとめ

	104
--	-----

資料編

1. 副知事表敬	106
2. 研修の様子	108
3. 報道記事	112

第1部
事業総括

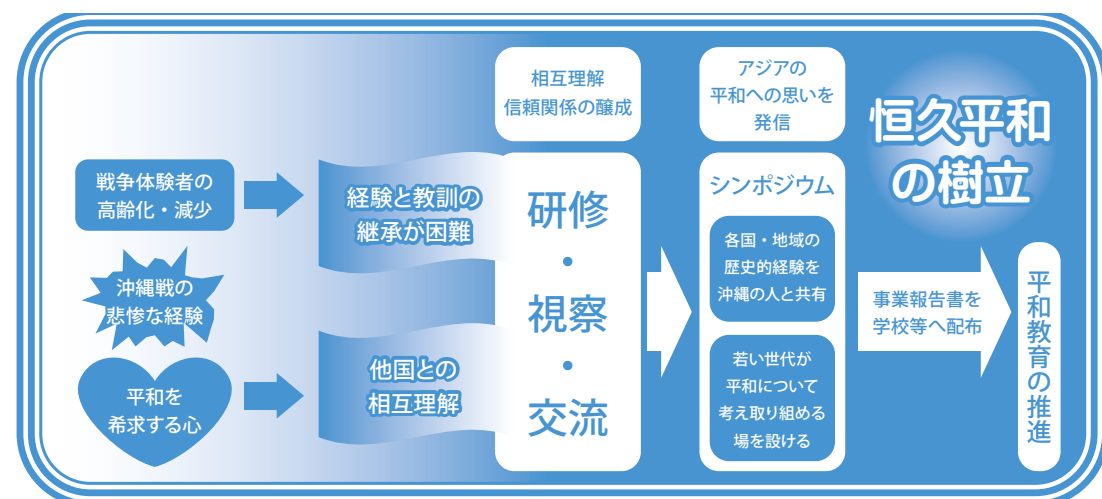
第1章
事業概要

1 目的

沖縄県民は74年前に沖縄戦という悲惨な戦争を経験し、多くの方が犠牲になった。しかし、その悲しい沖縄戦を経験した人々の高齢化により当時の実状を伝え残すことが難しくなっており、二度と悲劇を繰り返さないために若者の平和を愛する心を育むことが急務となっている。

他方で、平和は一国のみで成り立つものではない。近年はグローバル化により近隣諸国との関わり方を考える重要性が高まっている。アジア全体の平和と発展を目指すためにも、お互いの国の歴史を正しく認識し、相互理解を深めて友好関係を構築・維持することも重要である。

こうした状況を踏まえ沖縄県平和祈念資料館では、沖縄と同様に悲惨な戦争体験などを持ち、その記憶の継承と平和構築に取り組むアジア諸国の若者と沖縄の若者が共に学びつつ相互理解を深め、平和について考える機会を提供する。それにより各国・地域の平和教育・平和活動に資するとともに、本事業で培った絆を通して平和構築のためのネットワークの形成と広く平和のために活動する人材を育成し、本事業の成果を平和教育などに継続的に活用できるよう目指す。



2 実施主体

主催 沖縄県（主管 沖縄県平和祈念資料館）
受託事業者 特定非営利活動法人 沖縄平和協力センター（OPAC）

3 事業内容

今年度実施する「平和への思い（ウムイ）」発信・交流・継承事業は、沖縄県平和祈念資料館が海外の学生を招いて沖縄の学生との交流を行う初めての試みとなる事業である。

対象となる国・地域は、沖縄県と同様に多くの住民が犠牲となった悲惨な戦争体験等を有するカンボジア（カンボジア大虐殺（ポル・ポト政権下の大虐殺））、韓国（済州島4.3事件）、台湾（2.28事件）、ベトナム（ベトナム戦争）である。

事業では、海外からの参加者に沖縄県内在住の大学生5名を加え、沖縄県において2019年10月に9泊10日の合同宿泊研修を実施した。研修を通して、アジア諸国と沖縄の学生が互いの歴史を学習することで戦争等の実相や悲惨な経験を通して得た教訓を学び、戦争等の体験の継承と平和構築に取り組むために若い世代ができることを考えてもらった。さらに、交流を通して培った絆により平和構築のためのネットワークを形成し、研修終了後も沖縄県を含むアジア地域において、国際的な視野を持ちつつ平和教育活動等に取り組んでいくことを確認した。研修最終日には、研修成果を幅広く県民に周知するためシンポジウムを開催し、共同宣言を発表した。

4 実施期間

事業は来沖前の令和元年（2019年）8月中旬に各国における事前の学習の他、同年10月11日から10月20日までの9泊10日間の日程で沖縄合同宿泊研修を行った。
（うち10月11日と10月20日は参加者の移動日として設定）

5 実施体制

事業責任者		
沖縄県平和祈念資料館	主査	金城 篤
沖縄平和協力センター	理事長	仲泊 和枝

沖縄平和協力センター(OPAC)	沖縄県平和祈念資料館	(株)国際旅行社
理事長 仲泊 和枝	学芸班長 上原 恵二	営業次長 諸見里 一壽
事務局長 樋口 洋平	主査 金城 篤	営業部第二課 平良 和己
主任研究員 大濱 勤子	主査 長島 誠	
スタッフ 小田 俊希		

(1) 実施団体の人員配置

総括責任者（事業総括・運営）

仲泊和枝（沖縄平和協力センター理事長）

- 2009年～2014年まで沖縄県平和祈念資料館及び沖縄県立博物館・美術館が実施した、JICA 草の根技術協力事業「沖縄・カンボジア平和博物館づくり」にて、プロジェクトマネージャー補佐として従事。
- 2016年～2017年に JICA 草の根技術協力事業「沖縄・カンボジア博物館から発信する平和教育普及プロジェクト」のプロジェクトマネージャーとして事業を運営。

担当者①（事業運営補佐）

樋口洋平（沖縄平和協力センター 事務局長）

- 2010年～2015年まで JICA 草の根技術協力事業「沖縄・東ティモール紛争予防協力」の現地業務調整員として事業運営を担当。
- 2016年～2019年まで専門調整員として在東ティモール日本大使館勤務。

担当者②（資料翻訳・研修講義）

大濱勤子（沖縄平和協力センター 主任研究員）

- 2008年から沖縄平和協力センターにて安全保障分野の研究員として従事。沖縄県内の平和教育実態調査を担当。

担当者③（写真・記録）

小田俊希（沖縄平和協力センター スタッフ）

- 2017年～2018年まで早稲田大学 CAMPUS Asia ENGAGE プログラムにティーチングアシスタントとして参加。岩手スタディートリップの実施を担当。

(2) フログラムの構成

①視察先

沖縄戦の概要及び、沖縄の文化や現状を理解してもらう構成とした。沖縄戦については、沖縄県平和祈念資料館をはじめ、嘉数高台や伊江島「ヌチドッタカラの家」資料館の見学も組み込んだ。また、沖縄の文化や生活を理解してもらうために、高良倉吉琉球大学名誉教授による講義や民泊等による生活体験を行った。その他、国営沖縄記念公園を訪れ、沖縄の観光業の現状を理解してもらった。

②ディスカッション

フログラムの後半はディスカッションを含む参加者間の意見交換の場を多く設けることで、相互理解の促進とネットワークづくりを目指した。

③多言語利用のための対策

日本語がフログラム実施中の共通言語であることから、円滑なコミュニケーションのため通訳の配置と参加者にパナガイドを配布した。特に視察先では、各国・地域からの参加者が通訳の周りに集まることが困難なこともあり、パナガイドの導入は効果的なフログラム運営に貢献した。

(3) 安全管理

①体調管理

各国参加者の引率・通訳と密に連絡をとり、事前研修中及び沖縄への渡航、帰国に関し問題がないか把握に努めるとともに、参加者全員に保険を適応した。県内でのフログラム中は、移動に用いるバスに加えて常備車を積んだ車両を1台手配した。また、緊急時を想定し英語を話すことのできる人員を2名配置し、参加者の急な体調不良などに備えた。更に、毎朝ペットボトル入りの水を配布する等、個々の参加者の体調管理に努めた。

②添乗員の配置

研修期間中、上述の渡航業務を連携し進める旅行社から添乗員を1名配置し、緊急車両の運転担当者とした。同添乗員は、車両に乗務する以外の時間は研修に帯同し、昼食を含む食事の際の補助や飲料水などの手配、参加者の体調不良の際の救急対応を担当した。

6 参加国・地域における実施事業

(1) 参加者選考

参加者の選考については、資格要件を以下の通りとし、各国・地域からそれぞれ5名を選考した。

- 原則として各募集国・地域に在住する大学生であること。
- 事業の主旨を理解し、将来自国での平和教育・平和活動に携わる意思のある者で、事業参加国の若者と連携して平和発信に寄与する意思があること。
- 事前学習と沖縄で行われる合同宿泊研修について基本的に全日程参加できること。

【各参加国・地域における学生の応募・選考窓口機関への委託】

委託先の選定については、これまでに沖縄県平和祈念資料館が業務上協力関係にある当該国の資料館や大学の教授等を通して学生の応募・選考の業務を担う機関等の紹介を受け、委託先として依頼した。

また、沖縄については、本事業受託者である沖縄平和協力センターにて大学関係者へ個別に学生の募集を依頼した。

* カンボジア *



委 託 先：トゥール・スレン虐殺博物館（選考会場とも同じ）
選 考 日：2019年8月20日
選 考 者：トゥール・スレン虐殺博物館館長、同館教育普及チームスタッフ3名
応募人数：30名
選考内容：筆記試験・面接
選考結果

	氏名	所属	年次	性別
1	SEREY VICHHEKA	王立スノンペン大学 国際関係	2	女性
2	OUT SREYPICH	王立スノンペン大学 近代史	3	女性
3	CHEN SOKLIM	王立スノンペン大学 国際関係	3	女性
4	LONG SOVITOU	王立スノンペン大学 国際関係	3	男性
5	MOEUY MONTHAY	王立スノンペン大学 近代史	2	男性



カンボジアでの選考会の様子

* 韓国 *



委 託 先：国立済州大学校 人文大学（選考会場とも同じ）
選 考 日：2019年8月2日
選 考 者：同上大学 人文大学 社会学科助教授 他 計3名
応募人数：10名以上
選考内容：書類選考及び面接
選考結果

	氏名	所属	年次	性別
1	MOON BOMI	国立済州大学校 国際文学科（修士課程）	1	女性
2	RYU JIN OK	国立済州大学校 人文大学（博士課程）	—	女性
3	SHIN SO YEOUN	国立済州大学校 人文大学（博士課程）	2	女性
4	YEOM HYEONJU	国立済州大学校 社会学科（修士課程）	—	女性
5	MATSUI AIRI	国立済州大学校 人文大学 史学科（学部）	4	女性

* ベトナム *



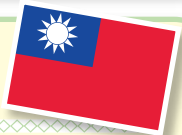
委 託 先：ベトナム国家大学ハノイ人文社会科学大学 観光学部（選考会場とも同じ）
選 考 日：2019年8月16日
選 考 者：同上大学 観光学部長、学生生活政策課補佐、渉外課補佐
応募人数：10名以上
選考内容：書類選考及び面接
選考結果

	氏名	所属	年次	性別
1	DUONG THI MINH NGUYET	ハノイ人文社会科学大学 観光学部	3	女性
2	NGUYEN THI MAI	ハノイ人文社会科学大学 観光学部	3	女性
3	NGUYEN VIET TRINH	ハノイ人文社会科学大学 観光学部	4	女性
4	NGUYEN MINH HIEN	ハノイ人文社会科学大学 観光学部	3	女性
5	NGUYEN TRONG TUNG	ハノイ人文社会科学大学 観光学部	4	男性



ベトナムでの選考会の様子

* 台湾 *



委 託 先：国立政治大学（選考会場とも同じ）
選 考 日：2019年8月9日
選 考 者：同上大学 日本研究プログラム教授、中国文化大学政治学科教授、
開南大学国際ビジネス学科教授
応募人数：22名
選考内容：書類選考及び面接
選考結果

	氏名	所属	年次	性別
1	SUN LEI	国立政治大学 日本語教育プログラム（博士課程）	2	男性
2	HSING CHIA-YIN	国立政治大学 日本語教育プログラム（修士課程）	2	女性
3	CHEN YU-KUAN	国立政治大学 日本語教育プログラム（学部）	3	男性
4	LIN YI-CHEN	国立政治大学 日本語教育プログラム（修士課程）	2	男性
5	WANG HSU-HSING	国立政治大学 日本語教育プログラム（修士課程）	1	女性

* 沖縄 *



実 施 者：特定非営利活動法人沖縄平和協力センター
選 考 日：2019年8月30日
選 考 者：沖縄国際大学 経済学部教授、沖縄平和協力センター理事長
応募人数：6名
選考内容：書類選考
選考結果

	氏名	所属	年次	性別
1	新 垣 響 己	沖縄国際大学 英米言語文化学科	2	男性
2	平 良 真 美	沖縄国際大学 英米言語文化学科	2	女性
3	飛 田 ほのか	名桜大学 国際学群	1	女性
4	堀之内 裕 一	名桜大学 国際学群	3	男性
5	喜屋武 彩 花	沖縄キリスト教学院大学 英語コミュニケーション学科	4	女性

(2) 事前学習

沖縄県内で実施する合同宿泊研修の前に、募集・選考を担った機関に対し選考された学生を対象に、自国・地域で起った戦争や虐殺をテーマとして、事前学習の実施を依頼した。

事前学習では、参加者は担当教官指導の下、歴史的な学習のみならず、そこから得られた教訓、継承の必要性やその方法、平和への思いなどをまとめ、沖縄において研修で発表できるよう、それぞれの国の概要説明を加えた内容のパワーポイント資料を現地語で作成した。

国・地域によっては、設定された重点テーマのみならず、自主学習として他参加国のテーマも事前に学習した。

参加国・地域	事前学習テーマ
沖 縄	第二次世界大戦・沖縄戦
韓 国	済州島 4.3 事件
台 湾	2.28 事件
ベトナム	ベトナム戦争
カンボジア	カンボジア大虐殺（ポル・ポト政権による大虐殺）



◆カンボジア

場 所：トゥール・スレン虐殺博物館 会議室
実施日：2019 年 9 月 3 日
担当者：Kry MengAng（参加者の引率・通訳）



◆韓国

場 所：国立済州大学校 人文大学
実施日：2019 年 8 月 5 日～9 月 10 日（4 回実施）
担当者：高 誠晩（同大学社会学科 助教授 参加者の引率・通訳）



◆台湾

場 所：国立政治大学 総合院館
実施日：2019 年 9 月～10 月 週 1 回 6 回実施
担当者：李 世暉（同大学日本研究プログラム 教授 参加者の引率・通訳）



◆ベトナム

場 所：ベトナム国家大学ハノイ人文社会科学大学 観光学部
実施日：2019 年 10 月 1 日
担当者：Pham Hong Long（同学部部長 参加者の引率）



◆沖縄

場 所：沖縄国際大学 経済学部教室
実施日：2019 年 9 月 22 日、9 月 29 日（沖縄県平和祈念資料館視察）
担当者：仲泊和枝（沖縄平和協力センター理事長）、金城篤（沖縄県平和祈念資料館主査）



7 沖縄県における実施事業

(1) 沖縄合同宿泊研修

①研修日程

沖縄合同宿泊研修日程 2019年10月11日(金)～20日(日)

(敬称略)

	日付	時間	内容	講師／担当	場所	宿泊先
1日目	10月11日(金)	夕方～夜	沖縄到着	沖縄県平和祈念資料館、OPAC	ユインチホテル南城	ユインチホテル南城
2日目	10月12日(土)	8:15-9:00	移動 ホテル→沖縄県平和祈念資料館		沖縄県平和祈念資料館 大会議室	ユインチホテル南城
		9:00-10:30	オリエンテーション(日程確認、研修中の注意点など)	OPAC/ITS		
		10:30-12:00	開講式 自己紹介セッション：各出身地概要と重点テーマの発表	OPAC/ 沖縄県平和祈念資料館		
		12:00-13:00	昼食	OPAC		
		13:00-15:00	講義：沖縄の歴史、文化	琉球大学名誉教授 高良倉吉		
		15:10-17:10	講義：沖縄戦について、沖縄県平和祈念資料館友の会の役割	沖縄県平和祈念資料館友の会 事務局長 仲村真		
		17:30-18:00	移動 資料館→ホテル			
3日目	10月13日(日)	8:00-20:00	歓迎セミナー		ユインチホテル南城 未来の間	ユインチホテル南城
		9:00-9:30	移動 ホテル→ひめゆり平和祈念資料館		糸満市内	
		9:30-12:00	講義・視察：ひめゆり平和祈念資料館の継承活動	ひめゆり平和祈念資料館 学芸課長 古賀徳子		
		12:00-12:40	昼食			
		12:40-13:00	移動 レストラン→沖縄県平和祈念資料館			
		13:00-15:00	講義・視察：沖縄県平和祈念資料館、平和の礎			
		15:30-17:30	研修振り返り：これまでの研修を通して感じたこと	沖縄県平和祈念資料館	沖縄県平和祈念資料館 大会議室	
4日目	10月14日(月)	17:30-18:00	移動 資料館→ホテル			伊江島民泊 大学生以外は別ホテルで宿泊
		9:00-10:00	移動 ホテル→嘉数の高台			
		10:00-11:30	視察：沖縄の基地問題を考える(嘉数高台から見る普天間飛行場)	OPAC	宜野湾市	
		11:30-14:30	移動 宜野湾市→本部港			
		15:00-15:30	移動 本部港→伊江島(フェリー)			
5日目	10月15日(火)	16:00-17:00	講義・視察：反戦資料館「ヌチドゥタカラの家」	ヌチドゥタカラの家 館長 謝花悦子	伊江村	ユインチホテル南城
		17:00	伊江村内で民泊			
		9:30	民泊先と行動		伊江村	
		10:00-10:30	移動 伊江島→本部港(フェリー)			
		11:00-11:30	本部港→海洋博記念公園	OPAC	本部町	
6日目	10月16日(水)	11:30-15:00	視察：美ら海水族館			ユインチホテル南城
		15:00-17:30	移動 本部町→南城市			
		8:15-9:00	移動 ホテル→沖縄県庁			
		9:15-9:45	副知事表敬		沖縄県庁	
7日目	10月17日(木)		自主学习			ユインチホテル南城
		9:00-9:30	移動 ホテル→資料館	OPAC		
		9:30-12:00	ディスカッション 相互理解と若者の可能性	沖縄キリスト教学院大学教授 新垣誠	沖縄県平和祈念資料館 大会議室	
		12:00-13:00	昼食			
		13:00-17:30	・ディスカッション 帰国後の「発信・継承」についての課題、解決策 ・シンポジウム(成果報告会)準備 発表用資料の作成、発表準備	OPAC		
8日目	10月18日(金)	17:30-18:00				ユインチホテル南城
		9:00-9:30	移動 ホテル→資料館			
		9:30-12:00	シンポジウム(成果報告会)準備 各参加チームの発表についての確認、意見交換		沖縄県平和祈念資料館 大会議室	
		12:00-13:00	昼食	OPAC		
		13:00-17:00	シンポジウム(成果報告会) 「平和への思い」発信・継承の共同宣言の策定			
9日目	10月19日(土)	17:30-18:00	移動 資料館→ホテル			ユインチホテル南城
		10:00-10:30	移動 ホテル→那覇市(シンポジウム会場)		那覇市内	
		10:30-11:30	昼食			
		11:30-13:30	シンポジウム準備		沖縄県立博物館・美術館	
		14:00-17:00	シンポジウム	OPAC 沖縄県平和祈念資料館		
		17:30-19:30	お別れセミナー		厚生会館	
10日目	10月20日(日)	19:30-20:30	移動 那覇市→ホテル			
		8:00-9:00	移動 ホテル→空港(全員移動)	OPAC/ITS		
			帰国			

OPAC：沖縄平和協力センター ITS：国際旅行社

②研修内容

内容	目的	講師／担当	場所
講義：沖縄の歴史、文化	沖縄の歴史、文化を理解する。	高良倉吉(琉球大学名誉教授)	沖縄県平和祈念資料館
講義：沖縄戦について、沖縄県平和祈念資料館友の会について	沖縄戦の概要及び沖縄県平和祈念資料館友の会の役割を理解する。	仲村真 久保田暁 上原美智子	
講義・視察：ひめゆり平和祈念資料館の継承活動	ひめゆり学徒隊について学び、ひめゆり平和祈念資料館設立の経緯を理解する。	古賀徳子(ひめゆり平和祈念資料館学芸課長)	ひめゆり平和祈念資料館
視察：沖縄県平和祈念資料館、平和の礎	資料館の役割と資料館の展示から、戦前、戦中、戦後における沖縄のおかれた環境を理解する。平和の礎の設立理念を理解する。	沖縄県平和祈念資料館	沖縄県平和祈念資料館
振り返り：これまでの研修を通して学んだこと	それまでの講義・視察を通して学んだこと、感じたことを参加者同士で整理し、理解の共有を図る。	沖縄県平和祈念資料館	
視察：沖縄の基地問題を考える(嘉数高台から見る普天間飛行場)	沖縄戦の経緯及び沖縄の基地問題を学ぶ。	OPAC	嘉数高台
視察：ヌチドゥタカラの家 講義：伊江島から発信する非暴力と反戦	伊江島での土地闘争、平和運動の歴史について学ぶ。	謝花悦子(ヌチドゥタカラの家館長)	伊江島 ヌチドゥタカラの家
民泊体験	沖縄の現状や文化、伊江島について学ぶ。	OPAC	伊江島
視察：美ら海水族館	沖縄の観光産業について触れる。	OPAC	本部町 海洋博公園
ディスカッション：相互理解と若者の可能性	参加者の相互理解を増進する。	新垣誠(沖縄キリスト教学院大学教授)	沖縄県平和祈念資料館
ディスカッション：発信・継承についての課題	各参加国・地域の平和教育の現状を理解する。	OPAC	沖縄県平和祈念資料館
共同宣言の策定	参加者が合同宿泊研修を通して得た学びや平和発信のための共同宣言を策定する。	OPAC	沖縄県平和祈念資料館
シンポジウム	合同宿泊研修の成果を報告する。	沖縄県平和祈念資料館・OPAC	沖縄県立博物館・美術館

第 1 部
事業総括

第 2 章
事業評価

1 はじめに

事業の成果を測るため、参加者全員を対象として事業終了後にアンケートを実施した。アンケートは、数値化した評価ではなく、各参加者の意見や感想、要望等を記述式で回答してもらう形式とし、それを基に事業評価を行った。

2 評価結果

(1) 各研修プログラムに関する参加者アンケート結果

各研修プログラムに関する主なアンケート回答は、下記の通りである。

①「沖縄の歴史、文化」「沖縄戦と沖縄県平和祈念資料館友の会について」

- 沖縄の色濃い文化と太平洋戦争を総合的に知ることができた（カンボジア）
- 沖縄戦の凄惨さは、十分に伝わった（ベトナム）
- 独特の文化を持つ沖縄のことを知る良い機会になった（韓国）
- 直接沖縄戦を経験した方々との出会いは、意義深かった（韓国）
- 沖縄が芸能をソフトパワーとして古くから活用していたというお話が興味深かった（沖縄県）
- 講義から過去の沖縄住民の苦しみについて学んだ（台湾）
- 講師との会話やディスカッションで生徒の興味を保つほうが良い（カンボジア）
- もっと視聴覚資料を利用すれば良かったと思う（韓国）

②「ひめゆり平和祈念資料館視察」

- 一般の沖縄住民が経験した悲惨な現実を捉えていて考えさせられた（カンボジア）
- ひめゆりの生徒達への戦争の影響を学び、興味深い資料館の作り方も知ることが出来た（ベトナム）
- 現場性、場所性がいかに重要かを感じることができた。祈念館内の展示では、女子学生を集団ではなく、一人一人の顔としてみることができて良かったし、生存者達が心と力を合わせて作った空間だという事実も感動的だった（韓国）
- 当時の痛みを今日に伝えるために、絶え間なく努力していることがうかがえた。その努力のおかげで記憶はとどめられ、継承されていくのだろう（韓国）
- 本プログラムの中でも特に胸を打たれたフィールドワーク先だった（沖縄県）
- 戦争が何もかもを深淵に巻き込むという事実を思い知らされ、平和の尊さを改めて実感した（台湾）

③「嘉数高台 普天間飛行場見学」

- 米軍が沖縄に与えた影響が興味深かった（カンボジア）
- 米軍基地の稼働状況、立地を見た。基地の影響で住民が心配だ（ベトナム）
- 「基地とともに生きること」が言葉や想像ではなく、それが光景として目の前で広がっていた。頭ではなく心で基地問題を感じるのに大きく役立った（韓国）
- 普天間基地が地元の人々の生活に多くの不便をもたらしていることを知り、地元の人が通常の生活を取り戻せることを心から祈っている（台湾）

④「ヌチドゥタカラの家視察」

- 歴史について意見や真実を知った。過去は変えられなくても私達の行動が未来を変える（ベトナム）
- 沖縄の人々の本当の声を聞いたようだった。寂しく平和のために戦った館長の自負心を感じることができ、その決意の固さが良く伝わった（韓国）
- 伊江島における戦闘だけでなく、ベトナム戦争や朝鮮戦争といった世界で起こっている他の戦争にも

焦点を当てた展示を行っていることに驚いた。なぜ、「非暴力」にこだわったのか、ということを経験しそこねたのが悔しい（沖縄県）

- 戦争の痛みを再び「ヌチドゥタカラの家」で感じました。これからも戦争と平和の大切さを考えて、反省したいと思う（台湾）

⑤ディスカッション：「相互理解と若者の可能性」

- 他の国の人と平和などに関して意見交換し、協働できたので楽しかった。（ベトナム）
- どうしたら平和になるのか、という方法論に重点を置きすぎている気がした。平和とは何か、平和をどう考えるのか、というところからディスカッションするともっと良いディスカッションになったと思う（韓国）
- ディスカッションの前に、他の参加者ともうちょっと交流があったら良かったと思う。グループ別の討論が円滑に行われるには、多少難しさがあった（韓国）
- 「世界からなくしたいもの」を他国の参加学生と英語で議論することは、とても刺激的で面白かった。1つの問題をいろいろな視点から考えなくてはならず、周りの学生に助けてもらい、何とか発表することができた（沖縄県）
- 違う視点で平和の重要性を教えていただき、楽しかった（台湾）

⑥ディスカッション：帰国後の「発信・継承」についての課題、解決策

- ポスターの作成が皆のクリエイティビティを引き出して興味深かった（カンボジア）
- 持続的な世界平和のために必要なことを理解した（ベトナム）
- 易しくないテーマなうえに、言葉の限界もある中で、それにもかかわらず、各国の青年達が語り合った有意義な時間だった（韓国）
- 各国の平和教育の現状を絵で表現するという内容は新鮮に感じた。国によって平和教育の行われ方や過去の事件の認知度が全く異なるということが分かり、勉強になった（沖縄県）

(2) シンポジウム来場者アンケート結果

開催日時：2019年10月19日（土）14:00～16:30

開催場所：沖縄県立博物館・美術館 講堂

来場者数：約100名

アンケート集計：回答数37名

【集計結果】

①年齢別構成及び属性

シンポジウム来場者の年齢構成をみると、20代が最も多く、次いで40代・50代、となっている。10代の参加者も多かった。来場者の属性をみると、一般が多く、次いで大学生、高校生となっている。

表1 アンケート回答者年齢別構成及び属性

単位（人、％）			単位（人、％）		
年代別	人数	構成比	属性	人数	構成比
10代	6	16.2％	小学校	0	0.0％
20代	10	27.0％	中学校	0	0.0％
30代	3	8.1％	高校	6	16.2％
40代	7	18.9％	大学	8	21.6％
50代	7	18.9％	一般	23	62.2％
60代	2	5.4％	計	37	100.0％
70代	2	5.4％			
80代	0	0.0％			
計	37	100.0％			

②シンポジウム開催情報の入手先

シンポジウム開催情報の入手先については、「知人・友人の紹介」が46.2%と最も多く、次いでチラシで開催を知った、という回答が多かった。一方で、新聞、テレビ、ラジオで開催を知ったという回答は少なかった。

表2 開催情報入手先一覧（複数回答）

入手先区分	人数	単位（人、％）	
		構成比	
新聞	4	7.7%	
ポスター	5	9.6%	
チラシ	12	23.1%	
知人・友人の紹介	24	46.2%	
本館HP	2	3.8%	
テレビ	2	3.8%	
ラジオ	1	1.9%	
その他	2	3.8%	
計	52	100.0%	

③来場者感想

シンポジウム来場者からの感想は、下記の通りである。

- 台湾の報告はすごく分かりやすかった。学生なりの「学びの成果」を全体に広がってほしい。県内大学生の調査活動をもとにした「平和サミット」等企画してほしい。
- 各国で起きた戦争の経緯に関して学生の方々が問題提起し、解決策を考えていることにすごく感心した。
- 戦争＝国同士の争いだと思っていたが、政府から国民にという国内での虐殺ほど苦しいものはないなと感じた。
- ムービーの最後にあった「これから私たちは平和の架け橋になります」という文、私もそうなりたいと思った。
- 沖縄戦は地元なので報道や親などから知っている。ベトナム戦争も沖縄の基地から米軍が行っているなど知っているけど、カンボジアの虐殺、4.3事件、2.28事件はあった事は知っていても、くわしいことは全く知らなかった。
- 若者にどうやって関心を持たせることができるのか、簡単な答えはないと思うが、参加者同士が知恵を出し合う姿を見ることができた。
- 同じアジアで、しかも沖縄戦以後に、こんなにも過酷な事実があったことが、とても驚きだった。ベトナム戦争しかわからなかった。ポル・ポト政権のことは知っていたが、これほどとは。今回のことがきっかけでネットで調べてみたが、ショックでした。人間の所業ではない。
- それぞれの国の悲惨な歴史を知ることが出来たことと、学生達が短期間でまとめた内容ではあるが、平和について出来ることをしっかり考えていたことに感心した。
- それぞれの国で悲惨な戦争があり、それについてそれぞれの国の学生が真剣に考えているということが伝わってきて、自分も第三者という目線ではなく、一個人として考えたいと思った。
- 各国それぞれが今までの戦争を通じて、「平和」であるためにはどうしていくべきなのか、どうやって今後も伝えていくのかといった共通のテーマを様々な視点から捉えていて、とても勉強になった。
- 平和交流拠点として沖縄が世界に強く発信できるきっかけの1つになる場になったかと思う。

3 研修終了後のアンケート結果について

沖縄合同宿泊研修を終えた各参加者の意見、感想、要望は、下記の通りである。

【意見・感想】

- とても良いプログラムだった（カンボジア）
- 平和関係の事業は初参加で、有意義・効果的・成功裏だったと思う（ベトナム）
- 平和について学ばせてもらい、感謝している。自分の中で変化があった。平和や生命への感謝、平和理念の拡散について、多くのことを学んだ（ベトナム）
- 平和事業では相互理解が大事。少人数同士から国家、民族へと広がっていけると思う（ベトナム）
- よい参加者達ばかりで、積極性とポジティブさが合同研修を建設的で楽しいものにしてくれた。また近い将来、みんなと会える機会があることを望む（韓国）
- 東アジアの若者、そして虐殺の歴史を共有する者たちが、それぞれの歴史を共有するために集まり、語り合い、そして平和を訴えること自体に大きな歴史的意義があることに気づいた。この機会をくれたことを再度感謝する。沖縄県での成果発表を超えて、それぞれの国で沖縄からの平和宣言を東アジアの若者たちという名義で発信できるようになると期待される（韓国）
- 一日一日が濃くて、充実した楽しい研修だった。「平和」というものを考えていくというのは、生半可なことではない、と感じた。この研修を通して物事を批判的に捉え、自分の言葉で意見をいう力が鍛えられたと思う。大変なこともあったが、たくさんの素敵な人達と出会え、自分を成長させることができた研修だった（沖縄県）

【要望】

- 講義の代わりにディスカッションの時間を増やしてほしい（※ディスカッションは英語で）（カンボジア）
- プログラム序盤で、ゲームなどのアクティビティを通して参加者同士が交流し、互いに知る計画があれば良いと思う（ベトナム）
- 事業では、英語を共通言語とすべきだと思う（ベトナム）
- 初日にアイスブレイクをして、お互いにコミュニケーションを取る時間がもっとたくさんあれば、いろいろな国から学生が集まった意味が深まったのではないかと思います（韓国）
- 沖縄戦に触れる時間と他国のチームの内容に触れる時間とのバランスの見直し（沖縄県）
- シンポジウムについて、県平和祈念資料館と受託業者のニーズがバラバラで、まとめるのが少し難しかった（沖縄県）
- おそらく参加者は、共同宣言のイメージが掴めないのも、ディスカッションの前に例をあげてもらえたらスムーズに進むことができたと思う（台湾）
- ディスカッションのファシリテーターは日本人が担当した方が、もっとうまくいくと思う（台湾）
- スケジュールの変更などは、事前に連絡してほしい（台湾）

4 総括評価

最後に、参加学生やシンポジウム来場者のアンケート集計結果を基に、総括評価をまとめる。

まず、アンケート調査からは、沖縄の歴史・文化や沖縄戦講座を通して、海外からの参加学生に沖縄の独自の歴史と文化的特徴を理解してもらうとともに、沖縄戦の実相を伝えることができたと判断できる。

また、ひめゆり平和祈念資料館の視察については、同資料館は、犠牲になった一人ひとりが身近に感じられる展示となっており、そこから戦争の悲惨さや恐ろしさを感じることができたようである。その他、歴史的史実と直接関係のある場所に資料館があることの重要性を理解した、ひめゆり平和祈念資料館がひめゆり学徒隊の経験を次代に伝えようと努めていることを理解することができた、といった感想も見受けられた。併せてヌチドゥタカラの家（伊江村）等も視察し、公的機関のみならず、民間レベルでも沖縄戦の実相を伝えようと様々な取り組みを行っていることを紹介したことで、平和発信拠点としての沖縄を、特に海外からの学生に伝えることができたことは大きな成果だといえる。

嘉数高台からの普天間飛行場視察については、沖縄の米軍基地をみる機会に乏しい参加学生に、戦後一貫して基地問題に直面している沖縄県の現状を伝えることができたといえよう。

研修期間中に2回あったディスカッションについては、テーマの難しさや言葉の壁を感じた参加学生もいたようである。しかし、そうした壁を克服する努力をしつつ、国籍の違う者同士で意見交換を行う、言わば“対話の中から真実を見いだす”過程を通して、互いへの関心を高め、相互理解を深めることができたといえる。アンケート記述には無かったが、参加国の中には徴兵制度を採用する国もある。また、学校教育でどのように史実を伝えているのかも、それぞれの国で状況が異なっている。今回の事業では、こうした教育・政治・社会制度や文化の違いを感じつつも、参加学生一人ひとりが研修を通して相互理解と友情を育むことがある程度達成できたと考ええる。この経験は、今後、人的ネットワークの構築を図るための大切な土台となるであろう。

研修成果報告となるシンポジウムについては、10代～20代を中心に、多くの県民の方々に参加していただいた。沖縄県では、学校教育や社会教育の場で沖縄戦を主題として平和学習をする機会が多い。そのため、海外学生の発表を通して他国の戦争や虐殺の歴史の詳細を知ったという回答も多く寄せられた。また、アンケートからは、来場者が沖縄県の学生と海外の学生がともに戦争の記憶の継承と平和な社会を実現するために何をすべきかを考える姿をみて、他国・地域の歴史に関心を高めるとともに、平和発信の活動を自分事として捉える心の変容を伺うことができた。

最後に、今後の課題として、研修前半にアイスフレイクを入れることで学生同士の交流をよりスムーズに行えるよう工夫する必要や、参加各国・地域の戦争等について互いに理解を深めるための十分な時間の確保、ディスカッション等の前に簡単な事前学習を行うことで、グループ内での意見交換や共同作業に取り組みやすくなるよう配慮すること、研修中の共通言語の検討、テレビや新聞等メディアを活用したシンポジウム開催の周知効果が当初の予想より低かったこと等があげられる。その他、今回の事業では、沖縄県からの参加学生が県内3大学に在籍する大学生で構成されているにもかかわらず、唯一、専任の指導教官が不在であったことから、学生の負担が大きくなるとともに、きめ細かい指導が行き届かなかったことも、今後改善が必要である。

第2部

「平和への思い（ウムイ）」 発信・交流・継承事業 成果報告

第1章

沖縄合同宿泊研修参加国

1 参加者紹介



カンボジア フノンペン王立大学



Chen Soklim
チェン・ソクリム

私がこの事業に参加したのは、参加各国の歴史について深く学べると思ったからと、そして平和学習があったからです。このプログラムを通して、各国が当時の事件の影響で現在も抱えている課題や、平和の発信の現状について意見交換や考え方の共有ができることを楽しみにしています。



Long Sovitou
ロン・ソウィトゥ

平和を理解することはとても大切なことだと思います。それは国内の特定の層の人だけが理解するものではなく、特に若い人も巻き込み平和を求める活動をしていかなければいけないと思います。そういった活動や取り組みについて勉強できる貴重な機会だと考え、このプログラムに参加しました。



Moeuy Monthay
ムエイ・モンタイ

自分の国の歴史を国際的な場で他国の人達に対して発信したいと思い、事業に参加しました。また、戦争の悲惨な面を直視することによって平和や協調の理念が人々の心の中に根付く様子を勉強したいと思いました。



Out Sreypich
オウ・スレイピ

このプログラムに参加している5か国はそれぞれ多種多様な歴史背景を持っています。また、各国の歴史は各国民の意識にも影響を与える、と私は考えています。参加5か国の人達のそれぞれのそういった意識を感じ取り、カンボジアに持ち帰り周りの人に歴史、そして平和への思いを広めたいと思います。



Serey Vichheka
セレイ・ウィチェカ

沖縄の人々はとても壮大な歴史を持っており、沖縄の文化はその歴史と相互に影響を与えてきました。今の沖縄の平和を求める姿勢はここから繋がっていると思います。沖縄の人々、文化、そして歴史を学ぶことによって、沖縄が考える平和について勉強したいと思いました。また、こういったプログラムに参加するのは初めてなので、自分にとって新しいことに挑戦し成長したいと考え参加しました。

引率・通訳



Kry Mengang
クリ・メンアン



韓国 済州大学校



松井愛理
Matsui Airi
マツイ・アイリ

私は、大阪府大正区の近くで生まれ育ち、幼少期から沖縄の人は身近な存在でしたが、それでも沖縄について学び考える機会がありませんでした。しかし、基地問題がニュースで取りざたされるようになって改めて沖縄が置かれている特殊な状況に疑問がわき、もっと知らなければいけないと考えるようになり参加しました。



文寶美
Moon Bomi
ムン・ボミ

このプログラムを通して東アジアでの虐殺や紛争の歴史をより深く知り、未来のために若者たちができる役割の方向性を考えたいと思います。済州と似た歴史のしがらみを持つ各国の参加者たちとともに現代の限界を克服する方法を模索し、東アジアに将来へのビジョンを示したいと考えています。



柳珍玉
Ryu Jin Ok
リュ・ジノック

私は、済州島の神話や儀礼について研究しています。その中で、民間信仰の上に成り立つ伝統的世界観を基礎に現在の問題に共同体として取り組む沖縄の姿勢を目取真俊の「水滴」等で知り、沖縄に関心を持ちました。同じ歴史に対しても異なる見方を持つ人たちと交流できることを楽しみにしています。



愼鈞妍
Shin So Yeoun
シン・ソヨン

私は、在日済州人の移住と定着、そして労働運動について関心があります。済州から大阪へ渡り働く人について研究するうち、同様に沖縄から大阪へ移住者たちについて知りました。このプログラムを通して移住の歴史、占領軍や国家権力による虐殺の主体と背景・理由を国際史的な観点から考える機会を期待しています。



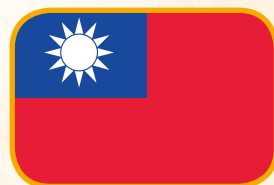
廉ヒョンジュ
Yeom Hyeonju
ヨン・ヒョンジュ

沖縄戦の研究について勉強する中で、済州島4.3事件の研究が見習わなければならない点が多くあると感じ、このプログラムに参加しました。この研修日程を通して、それぞれの国での研究を発展させ進めていく方向性の他にも、現実を変えられる種が生まれることを期待しています。

引率・通訳



高誠晩
Koh Sung Man
コ・ソンマン



台湾 国立政治大学



陳育寬
Chen Yu-Kuan
チェン・ユウクワン

他の国の学生と交流し、それぞれの文化や歴史について学びたいと思っています。この経験は、今後の研究に大いに役立つと思います。



邢佳茵
Hsing Chia-Yin
ケイ・カイン

戦争や暴政が引き起こした悲劇の歴史は世界中にあり、それは現在においても人々の記憶として残っています。今回の研修で各国の事件を正しく知り、これからの平和構築に私たちがどう取り組むべきかを考え直す機会にしたいと思っています。



林奕辰
Lin Yi-Chen
リン・イチェン

私は、日本の政治・外交を研究しており、アジア各国の歴史・政治について考えるこのプログラムは特に興味があります。戦争が起こる原因は様々ですが、平和への思いは皆同じだと思います。各民族が共存し持続的な社会について考えることで、民主国そして平和希求国としての台湾に将来貢献していきたいと考えています。



孫雷
Sun Lei
ソン・レイ

学部と大学院で歴史を専攻し、19世紀の日本の軍事発展を研究している身として、今回沖縄へ行く機会を得たことは自分にとって特別な意味を持ちます。沖縄にある戦いの碑や米軍・自衛隊基地を見て、そこから感じたことを他の学生達と共有することを楽しみにしています。



王紱馨
Wang Hsu-Hsin
オウ・ジョシン

今まで日本の方と交流してきて、平和なくして日本は語れないと思うようになりました。台湾も第二次大戦後中華民国に接収された歴史を持つため、私たちにとっても平和は同じく重要なものです。このプログラムを通し台湾という存在をより多くの人に知ってもらい、またアジア各国の歴史の認識も深めたいと思っています。

引率・通訳



李世暉
Li Shih-Hui
リ・セイキ



ベトナム ベトナム国家大学ハノイ人文社会科学大学



Duong Thi Minh Nguyet
ドゥオン・ティミン・グエ

戦争は時の流れの中で過ぎ去りますが、その教訓や経験、苦痛は必ずそこに残り続けます。また、情報があふれている現代社会の中ではその選別も重要視され、戦争に対し異なる各国の理解を共有し建設的な関係の構築を目指す場が必要だと思い、このプログラムに参加しました。



Nguyen Thi Mai
グエン・ティ・マイ

現在のベトナムは、1000年以上前から常に戦争と隣り合わせにあった英雄たちの勝利の上にあります。若者にその歴史を理解させ、継承することで国家としての自覚が生まれ、それを国家間で伝え合う相互理解から平和は生まれます。このプロセスの中で記憶の継承は重要な役割を果たすため、それについて考えるこのプログラムに参加しました。



Nguyen Minh Hien
グエン・ミン・ヒエン

私は物事の原因・背景が気になるタイプで、平和のために必要とされる相互理解はまさにこのような先入観のない好奇心の上に成り立つと考えています。私は文化や平和の架け橋になりたいという気持ちから、各国の代表が互いの国の歴史について学び不戦の意識を醸成し受け継ぐ方法を考えるこのプログラムに参加しました。



Nguyen Trong Tung
グエン・トロン・トン

私はベトナムの歴史や文化が好きで、国内をよく旅行をします。これまで見てきたベトナム国内にある戦争遺産の観光資源としての活用について知見を得たく、また、日本とベトナムの間での文化の違いについて興味があったので、参加しました。



Nguyen Viet Trinh
グエン・ベト・トリン

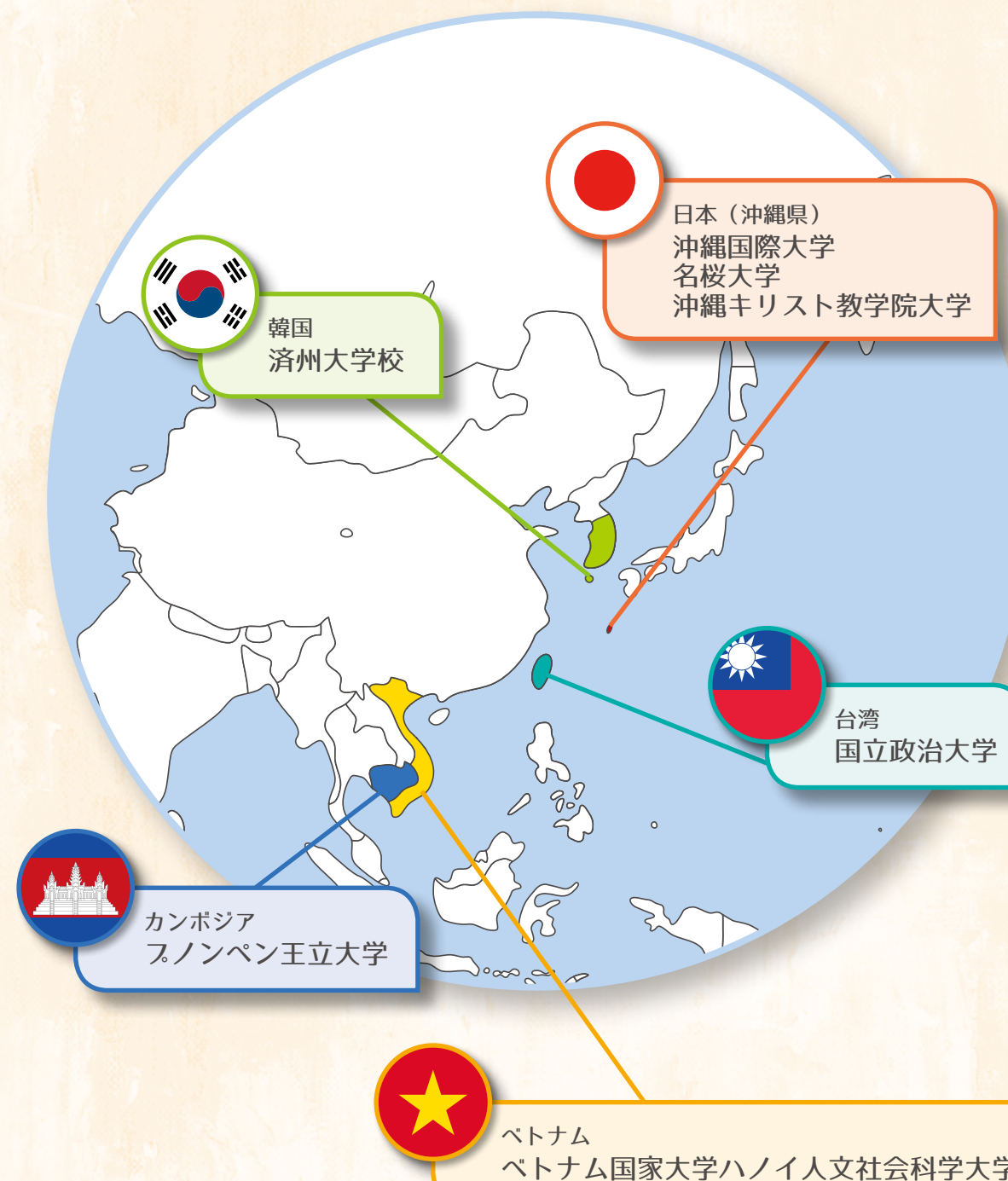
私は日本戦後発展の原動力はその人的資源にあると考え、以前から興味を持っていました。他方、観光学部の学生という立場から、沖縄を含むアジア諸国での戦争の歴史やそれがもたらした機会や課題を勉強し、それを基に帰国後はベトナムについても考え、取り組みたいと思いプログラムに参加しました。

引率・通訳



Pham Hong Long
ファム・ホン・ロン

2 研修参加国・地域の地図

日本
沖縄県

沖縄国際大学

新垣響己
Arakaki Hibiki
アラカキ・ヒビキ

自分は将来英語に関する職業に就きたいと考えており、英語を使う機会を増やしたいと思い、応募しました。また、沖縄に住んでいる以上、平和についてさらに理解を深めなければいけないと考え、参加を志望しました。様々な国の人と交流できることを楽しみにしています。

沖縄キリスト教学院大学

喜屋武彩花
Kyan Ayaka
キャン・アヤカ

沖縄は、戦後75年を迎える今日でも、いまだに基地問題という戦争の後遺症を負っています。沖縄県民の声が届かない国政や基地関連の事故事件など、戦争は終わっていないという人もいます。本当の平和とは何か、そしてどうすればそれを掴むことができるのか、私たちは考えるべきだという思いからこのプログラムに参加しました。

沖縄国際大学

平良真美
Taira Mami
タイラ・マミ

私は、大学の授業で米軍統治下（50-70年代）での沖縄の政治について勉強しましたが、あくまで単一的な視点しか得られませんでした。しかし、他国の人が平和についてどう考えているのかを知ることは大事だと思います。この研修を通して、同世代の若者の視点から平和や歴史を考えていけたらと思います。

名城大学

飛田ほのか
Tobita Honoka
トビタ・ホノカ

デザイン課に所属していた高校時代、悲しくてつらい出来事が画家たちの手によって描き出される戦争画に特に心を惹かれました。これからも「平和」と「芸術」の関わりについて学び、研究したいと思っています。日本で唯一地上戦が行われた沖縄で平和について学べることを楽しみにしています。

名城大学

堀之内裕一
Horinouchi Yuichi
ホリノウチ・ユウイチ

私は、将来国際協力の分野で仕事をするを目指し、現在も様々な活動に取り組みながら国際協力について学んでいます。その中でも、平和の分野についてアジア諸国の方々と共に考える機会は貴重なものです。この機会に太平洋戦争や沖縄戦について学び直し、戦争について国境を越えて共通認識を構築できることを期待しています。

第2部

「平和への思い（ウムイ）」
発信・交流・継承事業 成果報告

第2章

沖縄合同宿泊研修の実施

1 研修前半

10月12日(土)

講義

(1) 沖縄の歴史・文化

講師／琉球大学名誉教授 高良 倉吉

琉球王国は周辺の大国たちと積極的に交易を行い、その文化は交易圏のアジア各国の影響を取り入れて融合させた独自性の強いものだった。琉球王国はそれを武器に日本や中国に対し文化外交を繰り広げ、関係を保っていた。その後日本やアメリカの統治下に置かれ苦しい時代が続いたが、その文化・芸能は沖縄や海外に散らばった沖縄の人々とともに進化を続けた。琉球外交の要だった芸能は、今度は琉球アイデンティティの拠り所として、沖縄の人々の精神的支柱となった。

このように、無形文化は人々とともにあり続けたが、有形のものは戦火に失われたものが多かった。



日本軍司令部が置かれ沖縄戦で全壊した首里城もその一つで、沖縄返還後には復元が決まった。国費の使用反対に対しては、国内に似た構造の城がなく貴重だと説得し、ついに2019年初頭に復元が完成した。また、入場料などの財源から世界各地に散り、戦火を免れた琉球時代の品々や記録などを買い戻す活動も続けている。

沖縄県は、その歴史や文化を持って一つの県を超えた独自の役割を世界の中で果たそうとしている。『沖縄21世紀ビジョン』ではアジアと交流して沖縄の発展を目指し、平和の大切さと厳しい時代を生きた先人たちを支えたソフトパワーの重要性を再確認することが描かれている。

(質問) 沖縄の移民はなぜ数が多く、また文化の違いが大きいハワイや南米を目指したのか。

(回答) 資源に恵まれているが故に明治政府に注目され、インフラ整備を受けた台湾とは対照的に、沖縄ではそういった施策が遅れ、経済発展も弱かったので出稼ぎが多かった。また、明治政府の移民政策もあり、特にハワイでは、似た気候でのサトウキビ栽培を考え、農業従事者が多く渡った。彼らは、移住先へも三線を持っていき、現地でもその音は沖縄人の心を支えたという。

◇◇◇◇ 感想 ◇◇◇◇

このプログラムで、沖縄について勉強する前に大まかな沖縄の歴史をわかりやすく教えてもらえました。琉球の人々の寛容さに基づく歴史と彼らを襲った戦争について知ることができました。ここで得た知識を基礎に、プログラムを通して平和についての考えを築けました。

10月12日(土)

講義

(2) 沖縄戦について 沖縄県平和祈念資料館友の会の役割

講師／沖縄県平和祈念資料館 友の会 事務局長 仲村 真 同席者／会長 久保田 暁・副会長 上原 美智子

日本が第二次世界大戦に突入した原因の一つには、天然資源を目的とした植民地奪取戦略があった。しかし、米軍に押し戻され、沖縄戦では20万人の戦死者のうち9万人もの民間人が犠牲になった。また、米軍の上陸後、南方へ後退していった日本軍だが、島の南部に至る頃には戦力はほとんど残っておらず、米軍の掃討戦に住民が巻き込まれて、犠牲になっていた。

沖縄では、平和協力で真剣に取り組める環境づくりを進めている。特に県の平和学習では、各資料館で戦争体験者の講話を聴き、遺跡や慰霊塔をめぐり、最後に在沖米軍基地問題を考えるという柱がある。そして、友の会はその学習に協力し、沖縄戦の歴史的教訓を正しく次の世代に伝えるために活動している。育成プログラムを通してバランス感覚を持った平和

学習を実践できる人材を育成し、講演活動やガイド活動に取り組んでいる。

友の会は、平和学習のポイントとして「見る、知る、考える」の3つを掲げている。正しい認識を得るために実際に見て、そして考察を重ねて理解を深める。平和学習に限らず、勉強に対する意識として大事なものは、2019年ノーベル化学賞を受賞した吉野彰氏の言葉を借りると「歴史を自分でたどり近未来を予測する」姿勢だ。



(質問) 沖縄の人達が受けた苦しみを考える時、気持ちの矛先はアメリカ、日本、戦争そのもの、誰に向くのか。

(回答) (久保田氏) 私は生後三か月で沖縄戦を体験し、奇跡的に両親とも生還できた。日本軍や米軍を恨む気持ちより、戦争そのものを憎む気持ちが強い。

(上原氏) 沖縄戦の時私は小学生で、気付かぬうちに戦争に巻き込まれ青春を奪われたと感じた。私は戦争をする人、そして命を大事だと思わない人を恨む。

(質問) 生存者の方はどうやって自分の経験を語る勇気を奮うのか。自分の中に経験を閉じ込めてしまわないのか。

(回答) (仲村氏) 私の父は日本軍の兵士だった。当時の経験について自分から話すことはなかったが、若い人から真剣に熱意をもって請われると話した。悲惨な経験した人のこういった心情は世界共通なのではないか。

(久保田氏) 私の父も防衛隊長だった。父は死ぬまで話すことはなく、母は政治の流れを危惧し高齢になって初めて話し始めた。戦争を知らない世代が増えるにつれその実情を継承する必要はさらに強くなっている。政治に対して無関心でいることは危険だ。



久保田氏



上原氏

◇◇◇◇ 感想 ◇◇◇◇

古い映像で当時の様子を知ることができ、沖縄戦を感じるのにとっても役に立ちました。沖縄戦を経験した方々との出会いは意義深いものでした。もっとお話を伺い、対話してみたかったです。

10月13日(日)

講 義

(3) ひめゆり平和祈念資料館の継承活動

講師／ひめゆり平和祈念資料館 学芸課長 古賀 徳子

ひめゆり平和祈念資料館では、ひめゆり学徒隊が経験した悲劇を後世へ語り継ぎ、それが二度と起こることがないように発信し続けていく活動を行っている。展示をどう工夫すればより来館者の心に残るか、資料館のどんな活動をどうやって発信すれば県内外の人に知ってもらえるか、これらに対して全力で取り組んでいる。特に戦争を経験したことがない世代が増える今日、戦争を遠い世界のものと思われてしまうことを避けるために、いかに展示に親近感を持たせるかなど、様々な工夫をしている。

例えば、展示室では、学徒隊に参加した女生徒たちの顔写真を一人一人の性格などの紹介文付きで展示している。こういった日常を見せることにより、遠い昔の戦争の犠牲者ではなく、普通的女子生徒たちという面を強調し、戦争を身近なものとして演出して

いる。この展示方式は、その後、広島平和記念資料館でも取り入れられた。

戦争体験者の高齢化も進んでいる。ひめゆり資料館でも、代々学徒隊生存者の方が館長を務めていたが、2018年4月に初めて非戦争体験者の館長が就任した。高齢化で体験を語り継げる人が減少していることから、資料館では、生存者が元気なうちにお話をデジタル記録として集め、残す活動を積極的に進めている。



(質問) 生存者の中で、資料館の展示を作る際に当時のことを思い出してしまいトラウマが発現してしまった方はいなかったのか。

(回答) 展示を作り始めたとき、当時や亡くなった学友の夢を繰り返し見るということはあった。しかし、県や国からはそういった PTSD（心的外傷後ストレス障害）の症状に対する治療や対策はなかった。その後、自分たちが経験した悲劇を二度と起こさないという気持ちで作業を続けるにつれ、生き残った者としての役目を果たしていると考えられるようになった。その結果、自分もこの作業に救われているように感じ、夢の内容も次第に変わっていき、PTSD の症状を乗り越えて活動に参加する生存者の方が出てきた。

(質問) 平和教育に取り組む中で感じている課題はなにか。

(回答) 戦争を体験した方々は当時を思い起こすと当時の辛さがよみがえり、精神的な負担が大きい。しかし、それを乗り越えてでも戦争を二度と起こしてはいけないという気持ちから話をしてくださる。だが、戦争の恐ろしさや悲惨さだけに焦点を当てては生徒たちは消化しきれず、平和教育を倦厭するようになってしまう。悲惨な記憶を一方的に語り継ぐだけでなく、ワークショップなど様々な方法で「知りたい気持ち」を引き出すことが大事だ。

◇◇◇◇ 感 想 ◇◇◇◇

本プログラム内で特に胸を打たれた。展示の仕方が分かりやすかったので見学しやすく、当時の悲痛さを現代に伝えるため努力が感じられた。女学生たちの日用品や顔写真と性格の展示からは特に衝撃を受けた。また、アニメ「ひめゆり」が描写する戦前戦中の対比が鮮烈だった。質疑応答の内容が濃かった。入り口横に大きなガマがあり、戦争遺跡の現場性、場所性の重要さを身をもって感じられた。

10月13日(日)

視 察

09:30 ～ 10:00	アニメ「ひめゆり」鑑賞
10:00 ～ 11:15	展示 視察
11:15 ～ 12:30	講義・質疑応答



アニメ「ひめゆり」を見る沖縄の参加者



アニメ「ひめゆり」を見る台湾の参加者



沖縄戦前の学生生活についての展示を見るベトナムの参加者



ガマの様子を確認するカンボジアの参加者



引率の先生の解説とともに展示を見る韓国の参加者

10月13日(日)

視 察

(4) 沖縄県平和祈念資料館及び平和の礎



資料館職員の解説を聞くカンボジアの参加者



資料館職員の解説を聞く沖縄の参加者



戦争体験者たちが当時の様子を描いた絵を見るベトナムの参加者



「むすびのことば」を読む台湾・ベトナムの参加者



米軍基地の地図の展示を見る韓国の参加者



平和の礎に刻まれた韓国人犠牲者を悼む韓国の参加者

10月13日(日)

振り返り

(5) これまでの研修を通して感じたこと

講師／沖縄県平和祈念資料館 主査 金城 篤

講師／金城 2日間、講義を聞き、ひめゆり平和祈念資料館・沖縄県平和祈念資料館を見て、現時点での意見や感想を聞かせてもらえればと思います。



カンボジア

これまで2日間のプログラムで多くの知識を得ることができました。戦争のこともよく知ることができ、「知ることを通して戦争を起こさない」ということの大事さを改めて感じています。



台 湾

一番印象に残っているのは、とても若くして亡くなったひめゆりの女学生たちです。自分も祖父から戦争について聞かされましたが信じられないところもあり、今回いろんなことを見て、ただ話を聞くだけでなく、戦争を避ける意識を伝えていくことの重要性も感じました。



韓 国

昨日と今日で平和がなぜ重要なのか、ということを見たり感じたりできて、とてもいい時間を過ごせています。責任問題や補償問題など未解決な問題が多いと聞き、それはほかの国でも同様だと思います。次の世代へそれをどうやって受け継ぎ、解決できるように考えていくかについて残りの日程を通して考えたいと思います。

講師／金城 ありがとうございます。ひめゆり平和祈念資料館と沖縄県平和祈念資料館では民間・公的機関の違いがありますが、平和を訴える気持ちは共通しています。

また、戦争の事実をどう伝えていくかについての感想が多かったので、少しお話をさせてもらいます。沖縄県の人口は約145万人、その中で75歳以上の人口はその約10%、さらに沖縄戦を生き抜きその経験を覚えていらっしゃる方というのは本当に少なくなっています。また、親子三代で生活している家庭は3%ほどと、家庭内で戦争について伝える継承力が弱まっています。ですので、資料館や学校が平和教育で果たす役割というのは、とても重要なものになってきています。



沖 縄

沖縄県平和祈念資料館で若年層の人の少なさが気になりました。選挙権などを持ち始めた若い年代の人こそ、ここにきていろいろなことを学ばなければいけないと思いました。また、ひめゆり平和祈念資料館では亡くなった女学生たちの性格などが一人一人の顔写真とともに展示されていて、リアリティーというか、彼女たちをより身近に感じました。

講師／金城 ひめゆり平和祈念資料館の展示方法は、「今いる皆さんと同世代の人たちが戦争に巻き込まれて亡くなった」ということを自分事として捉えられるよう工夫されていると思います。広島原爆資料館でも最近のリニューアルで同様の展示方式を導入していることから、世代が変わるにつれ戦争を遠い昔のことと感じてしまう人たちが増えるので、それに対して戦争を身近なものとして紹介する工夫なんだと思います。

来館者については、県内からは沖縄戦の組織的戦闘が終わった6月23日前後、県外からは修学旅行生が来る10月前後が大きな山になります。特に県内では6月23日前後は平和学習で訪れる学校も増えてきますが、それを過ぎると少なくなります。本来、平和は常に考えなければいけないテーマですが、特定の時期に集中してしまっている面があります。



カンボジア

カンボジアのトゥール・スレン虐殺博物館では、来館者の大多数が国外からの訪問者でカンボジア人がほとんどいないという課題があります。これは海外観光客の観光ルートの固定化のほかに、カンボジア国内の問題もあります。虐殺についての教育が充実していなかったり、あとは戦争の記憶がたつすぎて思い出したくなく、また現在の生活だけで精一杯であることも考えられます。さらに、宗教上の理由から遺骸を見なかったり、もしくは親の許可が得られなかったりということもあります。



ベトナム

ベトナムの資料館は小さく数も少なく、そして展示の仕方も大雑把で、詳細でないので市民の間に資料館へ行くという意識はありません。また、映像などの技術もあまり使われず、見学しても分かりづらいということもあります。資料に関しても、海外から収集したものは少なく、ほとんどが国内から集められたものです。



台湾

台湾でも 2.28 事件の記念館があります。その活動の中でも特に大事だと思うのは、毎年開催されるシンポジウムです。過去の歴史やそこから得られる教訓については語り継がなければいけません。ですので、シンポジウムの開催を通して大学の先生や学生と高校生とのつながりを保っています。

講師／金城 台湾の 2.28 資料館の来館者数はどうですか？



台湾

資料館は台北駅前の公園の中にあり、人通りも多く立地はとていいと思いますが、来館者の話となると個人的な意見ですが、あまり多くないと思います。しかし、本の出版やシンポジウムの開催、館内外での抗議活動が積極的に行われ、事件の再発を防止する意識は台湾の若者の間では浸透していると思います。



韓国

ひめゆり平和祈念資料館と沖縄県平和祈念資料館は、済州島 4.3 事件記念館と比べて立地に強い歴史的なつながりを感じます。4.3 事件記念館の立地は事件そのものとはほとんど関係がありませんが、ひめゆり平和祈念資料館は洞窟のとなり、沖縄県平和祈念資料館も沖縄戦終結の地に建てられています。また、4.3 事件に関しては朝鮮半島で知っている人は少ないですが、沖縄戦に関しては日本国内でも広く知られていることは大きな違いだと思います。



沖縄

他国のお話を聞いて沖縄を振り返ってみると、資料館が整備され経験者の話を聞く機会なども用意され、平和について考える環境はある程度整っているにもかかわらず若者の興味関心が低いという現状があると思いました。

講師／金城 確かに、6 月 23 日が近づくとテレビやラジオ、新聞などでも関心はすごく高くなります。ですが、伝える私達からすると環境が整っているにもかかわらず関心が続かない、というのは大きな課題です。そして同世代で関心が低いという沖縄チームの皆さんの指摘は、まさに若者の視点から発見できた課題だと思います。平和学習が当たり前になってきて慣れてしまっているのでしょうか？



沖縄

当たり前になってきているというより、これまでの平和学習は平和の大切さより戦争のむごさに焦点を当てている気がします。毎年のように小学校や図書館で戦争の写真が展示されますが、それが毎年続くと「わかったからもういい」と思ってしまいます。

講師／金城 確かに鋭い指摘だと思います。沖縄戦に関する戦争や平和の話などを学校でしていますが、それらは体系的に整理されていません。小学校でやった内容を中学校でもやり、中学校で行った資料館へ高校でまた行くといったことがあります。先生方は平和教育が大事だと分かっているので取り組みますが、ややもすれば学校単位・先生個人の興味関心・問題意識に沿った内容になってしまう、いわば現場任せという現状もあります。それで、思いがなかなか伝わらない、という問題が発生しているのだと思います。

講師／金城 この事業の主たる目的の一つに人材育成があります。沖縄では沖縄戦についてはよく学びますが、他国での同様な悲劇についてはあまり学びません。しかし、平和は一国でできるものではありません。今はネットなどを使い、情報のやりとり・ネットワークの形成がとても簡単になりました。自分たちの国の実情だけでなく、関係国のことも互いに勉強しながら平和を考え、ネットワークを作っていける人材を増やしたいと思い、私たちはこの事業を実施しています。

10月14日(月)

講義

(6) 沖縄の基地問題を知る（嘉数高台から見る普天間飛行場）

講師／沖縄平和協力センター 主任研究員 大瀨 勤子



在沖米国海兵隊普天間飛行場は、沖縄の米軍基地問題のシンボルになっている。この嘉数高台公園からは、その普天間飛行場を一望でき、

その眺めから米軍基地が沖縄に与えている基地負担の現状を理解することができる。

第二次世界大戦後、日本には米軍基地が多数作られ、米軍の管理下に置き続けられた。その中で、普天間飛行場に関しては、基地機能の移転先を日本側が用意することを条件に、返還が合意された。しかし、その移転先が沖縄県名護市に決まると本土との間での基地負担の差が非難され、県内の移転が反対された。その間にも事故・事件も起きており、2004年には普天間飛行場に隣接する沖縄国際大学に米軍ヘリ

コフスターが墜落している(*)。

普天間飛行場は高台に建設されていることから、台風や波などの災害にも強く、その戦略的価値は大きい。また、近隣の嘉手納空軍基地には長大な滑走路があり、ベトナム戦争時の爆撃機の離着陸や東アジア地域での災害支援活動など、沖縄から東アジア地域に向けて、在沖米軍は様々な活動を展開している。米軍の拠点として機能する沖縄は、その活動によって東アジア地域との関わりがある。

(*) 沖縄チームの同大学在籍の参加者2名が、この事故について教員や先輩から聞いた当時の様子や事故の風化を防ぐための同大学の取り組みなどを紹介した。



(質問) 基地が建設された時から環境は大きく変化しているが、現在の沖縄の地政学的価値はどれくらいあるのか。

(回答) 中国の海洋進出や北朝鮮問題、ロシアなどの脅威を見据えると、米軍にとっての沖縄の地政学的な価値は変わらず高いと言われている。しかし、その一方的な位置づけに納得していない沖縄の人も多く、その代表的な例が、ベトナム戦争時に嘉手納基地から爆撃機が離着陸することに対する反対運動だ。

(質問) 沖縄は本土に比べて特に基地が多く、また米軍の統治下に置かれていた時間が長い。文化的な影響などは残っているか。

(回答) 第二次世界大戦の敗戦国という背景から基地が作られた。その結果、今でも沖縄本島の面積の10%は米軍基地が占めている。当然、文化的な影響は残っており、嘉手納空軍基地の一部が返還された土地には、そこに設置されていた Ryukyu Command(琉球司令部)からライカムという地名が付いている。また、現在の沖縄市の一部は、統合前はコザ市と呼ばれていたが、これも米軍が第二次世界大戦時にこの地域に建設した Camp Koza(キャンプ・コザ)から由来している。

◇◇◇◇ 感想 ◇◇◇◇

米軍基地が沖縄に与えてきた影響について知ることができて興味深かった。また、沖縄の人々と米軍、そして日本政府との距離や確執を感じられた。市街地からの至近距離を見て、そしてヘリコフスター事故の話を聞いて、安全がとても気がかりだった。「基地とともに生きること」を言葉や想像ではなく、実際に目で見て心で感じるのに役に立った。

10月14日(月)

講義

(7) ヌチドゥタカラの家（伊江島から発信する非暴力と反戦）

講師／ヌチドゥタカラの家 館長 謝花 悦子

「ヌチドゥタカラ」とは、沖縄の言葉で「命こそが宝物」という意味だ。伊江島は戦時中、沖縄戦のための前線基地が整備され、日本軍は民間人を徴用し、犠牲者も出しながら飛行場を建設した。しかし、戦況の悪化により、その基地はすぐに破棄され、戦後は米軍の土地収用により、現在も島の1/3は米海兵隊の演習場として管理されている。伊江島民は、その土地を返還してもらうために陳情やデモ行進を行ってきたが、その返還はまだ実現していない。ヌチドゥタカラの家は、それらの運動を率いた阿波根昌鴻(あはごん しょうこう)氏が設立し、戦争や反戦にまつわるものを「がらくたの山」のように並べている。

伊江島の基地もそうだが、沖縄本島でも基地問題は続いている。戦時中に打ち込まれた不発弾の処理も継続されており、すべてを除去し終わるのはさらに70年後だといわれている。戦いそのものは終わったとしても、こういった諸問題が残されている以上、沖縄の人達が抱えている大きな負担は、続けて存在している。戦争を終える時は責任を取るべき者は責任を取り、そしてその清算を責任をもって完遂しなけ

ればならない。それがなされていない以上、戦争が終わったとは到底思えない。それどころか、日本政府は再軍備に手を出している。「この世の命は宝である」という意識を持ち、「戦争は止めよう」というメッセージを発信する政治を行わなければいけない。これらが満たされて、初めて幸せな人生が送れる平和な世の中が生まれる。阿波根昌鴻が取り組んでいた土地闘争も、非暴力を徹底した陳情規定を定めて、平和な世界を平和的に求める姿勢を体現したものだ。

「ヌチドゥタカラの家」へ複数ヶ国の学生が訪れるのは初めてだ。平和を作る最大の武器は学習することだから、細かく事実を学び、幸せな人生が送れる平和な世の中が作れるよう勉強してほしい。



(質問) 展示されている資料の数々はどのようにって収集されて資料館で保存されているのか。

(回答) 「ヌチドゥタカラの家」に展示されている物は、米軍の基地や各地の戦場から集めてきた、戦争にまつわるものだ。銃弾や葉莖、模擬弾や落下傘、軍服、そして戦後の反戦運動で用いられていた旗や、全国からの応援メッセージなどが展示されている。これらの中には歴史的価値が高いものも多いが、劣化のリスクを冒してでも戦争を来館者により身近に感じてもらうために、ガラス仕切りや温湿度管理をしていない。



◇◇◇◇ 感想 ◇◇◇◇

「ヌチドゥタカラの家」は他の資料館と違い、住民の視点で展示されたものが多く、感じるものがまた違いました。平和のために闘った謝花氏の「純粋に戦争を憎む気持ち」と決意の固さがよく伝わり、沖縄の人々の本当の声を聴いたようでした。「命こそが宝」というコンセプトを高齢ながら懸命に訴える謝花氏の姿が忘れられません。

10月14日(月)

視 察

(7) ヌチドゥタカラの家

16:00～16:30	資料館 視察
16:30～17:00	講義・質疑応答



ベトナム



台湾



カンボジア



韓国



沖縄

2 研修後半

(1) ディスカッション 相互理解と若者の可能性

◇ 要 約 ◇

テーマ	ディスカッション 相互理解と若者の可能性
日 時	2019年10月17日(木)
講 師	沖縄キリスト教学院大学教授 新垣 誠
場 所	沖縄県平和祈念資料館

参加者25名を4つのグループに分けて、以下1～2のテーマに関するディスカッションを実施した。

1. 世界からなくなってほしい問題

- 貧困と戦争は多くの問題の根源となっているものなので、この2つをなくすべきである。
- テロリズム、人種差別、教育格差、貧富の格差などをなくすべきである。
- 核兵器、環境問題、人種差別、男女不平等の問題、政治的腐敗、人口問題も挙げられる。
- 環境汚染、気候変動、差別、汚職、戦争、人権侵害、争いなどをなくしたい。

2. 「1.」で上げられた問題の中で自分たちが解決できる問題

- 社会格差
- 環境汚染、欲望、憎悪
- 性差別、環境問題、貧困、犯罪、ごみ問題、欲望
- 性差別、貧困、

以上のディスカッションの後、講師より、「平和の実現の最大の妨げとなるのはHopeless（無力感）であること」、「全ての課題は人が生み出したものであり、人の力で解決できること」そして「問題の解決するために我々は個人としては無力であるが、力を合わせることで問題を解決していくことができる」と説明があった。

※ディスカッションに際しては、国籍によらない混成チームとした。

新垣



現在、世界では様々な課題が山積みとなっており、それら課題をどう解決すれば平和を作れるかを考えることが、本ディスカッションの趣旨である。まず、皆さんに聞きたいのは、「この世の中からなくなってほしい問題」は何かということである。

第1グループによる発表



紛争と貧困というものをこの世界からなくすべきと考えた。何故なら、衛生や差別、難民といった問題は紛争と貧困に起因しており、その両者をなくすことは、その他の課題解決につながるからである。貧困と聞くと、アフリカ等を思い浮かべるかもしれないが、沖縄県内にも貧困の問題は存在している。例えば、習い事に通うことができる子どもがいる一方で、経済的な格差によってそれがかなわない世帯も存在している。



第2グループによる発表



様々なものがあるが、まずはテロリズムが挙げられる。また悪事を働こうとする欲望や、人種差別、教育格差、資源の不平等な配布による貧富の格差などが存在しており、これにより富める人とそうでない人の間の紛争や、国家間の紛争が引き起こされていると考えている。



第3グループによる発表



様々な課題がある中で、紛争、核兵器の存在、環境問題、人種差別、男女不平等の問題、政府の腐敗、人口問題などがあげられる。



第4グループによる発表



過度な労働、環境汚染、気候変動、差別、汚職、戦争、人権侵害、思想の違いによる争い（テロリズム）などが、我々の意見として挙げられた。



新垣

個々のグループが提示した課題であるが、その中で、参加者の皆さんが生きている間に解決できると思えるものを斜線で消してほしい。なお、斜線で消す場合には、グループ内で合意を得たうえで消すこと。

*****グループ作業*****

新垣

各グループの作業をみたところ、多くの課題を消したグループもあれば、そうでないグループもある。恐らく、この作業を通じて皆さんが感じているのは、「多くのものは消すことができない」という感覚であり、つまり、課題をなくしたいと思ってもできないと感じているのではないか。平和を実現しようとする際の最大の課題は、Hopelessness（無力感、諦め）である。しかし、グループワークを通し、多くの参加者が共通した問題意識を持ち、かつ、それらを解決したいと考えていることが理解できたはずである。個々人の力は小さすぎるが、協力すれば力が合わさり、立ち向かうことができる。また、挙げられた課題は全て人が生み出したものであり、人の力で解決できるものである。

さて、これまでの人生で最も幸せと感じたのはどんな時か。沖縄に到着した日だったり、親が産んでくれた時だったり、共通しているのは他の人が関係していることである。他人とつながっていることで幸せだと感じることである。日本語で安心・安全の違いはなにか。安全はお金で買えるが、安心したという気持ち、つまり、そういった心の状態は買うことができない。例えば、お金持ちの人は失うものが多すぎると考えるため、必ず警備員を雇って自分の財産を守ろうとする。彼らは自分の財産を盗もうと思っている人たちと関わることがないがために、相手を信用していないし、シェアしようとしめない。ただの敵だと考え続ける。

安心を手に入れるためには他人のことを考えるしかない。自分が他人に信用され、かつ、自分が他人を信用すれば安心を得ることができる。安心はお金では買えないのである。人との交流、人への配慮があって初めて安心が手に入る。国の場合も同様であり、ミサイルが飛んでくるかもしれないと他国を信用しないために軍事費を用いて対抗装備を買い、安全を買う。他方で、隣国との間にはいつまでもたっても信頼・友好関係がないために、安心できない。政権や政府は変わることがあっても、友情や信頼に基づいた安心は引き続き必要となる。参加者の皆さんには、残りあと2日間のプログラムでお互いに心の中、友情、信頼について話し合ってもらい、それがいかにして自国と他国の平和につながるかを考えてもらいたい。

◇◇◇◇ 感想 ◇◇◇◇

講師のエネルギーと手法によって、積極的に意見を述べる事ができた。また、ディスカッションの中で図や発表を用いたことで、他の地域からの参加者と積極的に意見を交換することができた。このようなディスカッションを学校でも取り入れることができれば、若い人たちも平和という話題に興味を持つのではないかと感じた。

(2) ディスカッション「発信・継承」についての課題

◇ 要 約 ◇

テーマ	ディスカッション「発信・継承」についての課題
日 時	2019年10月17日（木）
講 師	沖縄平和協力センター（OPAC） 事務局長 樋口洋平
場 所	沖縄県平和祈念資料館

各地域を1つのグループとして、下記1～2のテーマに関するディスカッションを行った。その後、3については、各地域の参加者を混ぜて混成チームを形成してディスカッションを実施した。

1. 各国で行われている平和教育の実情を理解する

- （台湾）学校の教科書、NGOによる講演、親から子への口承が行われる一方で、近年は音楽や映画などでも情報発信が行われている。
- （ベトナム）資料館などが利用されている。
- （カンボジア）生存者から話を聞くという方法があるが、今後生存者が少なくなっていく。
- （沖縄）歴史の授業、遠足における戦跡の訪問、テレビ番組や漫画「はだしのゲン」などが利用されている。
- （韓国）報告書、記念碑の存在、4.3事件の概要を知るためのツアーなどがある。

2. 歴史の継承における課題

- （沖縄）教育現場における戸惑い、戦争体験者の減少、平和教育が体系化されていないこと等が挙げられる。
- （ベトナム）教科書中心の教授法や若者にとって教科書の記述が興味をもてるようなものではない。
- （台湾）体験者から話を聞く機会が少なかったことと、政敵を追い落とすための手段として過去の事件が用いられることがある。
- （韓国）4.3事件については引き続き研究が必要であり、また、1つの村の中における対立も存在したため、感情的な葛藤が残っている。
- （カンボジア）平和教育が学校カリキュラムに組み込まれていないことが課題。

3. 歴史を継承し、平和を発信する為の取り組み

- 今回の研修における経験の共有や他国の歴史を積極的に学ぶ。
- 教育カリキュラムに平和教育を取り入れることに賛同したり、他者との違いを理解する。
- 体験者と若者が交流できる機会をつくる、SNS等を利用して認知度を上げる
- 教育にゲームや映画を取り入れたり、資料館などでも映画などを利用したりする。
- コンサート等のイベント実施、凄惨な行為の現場をめぐるツアー（ダークツーリズム）を企画する。

****第1セッション****

目的：各地域の歴史継承の実情を理解する

樋口

まず、各々の国で行われている平和教育を絵で描いてほしい。そのうえで、のちほど発表を願いたい。

台湾



2.28事件は、教科書や学校におけるセミナーやNGOが学校で行う説明などによって、歴史の伝承が行われている。また、親の世代から口承によっても歴史の伝承が行われている。芸術の分野においては、音楽（ラップ）を通じて当時の出来事が取り上げられている。また、博物館や映画を通して情報発信が行われている。更に、YouTubeやテレビゲームでも発信が行われている。政治の分野にあっては、毎年2月28日に記念のイベントが行われており、2.28事件に関する法律も施行されているし、事件に関する報告書も作成されている。



ベトナム



この絵は、平和は、木のように頑丈な幹から生れるものであることを示している。ベトナムにおける平和教育の目的は、①市民の認識の向上、②知識の深化、③興味の喚起、④大学などにおける知識の向上、⑤知識を備えたうえで国内外の方々と相互理解や相互学習を進める、という5つから成り立っている。

ベトナムには多くの資料館があり、資料館では戦時中の写真、動画や遺品等が展示されており、来館者は歴史を勉強することが可能である。また、ベトナムの資料館は認知度が高く、学校でも利用されており、資料館で歴史を学ぶことも可能であり、かつ、教科書でも学ぶこともできる。



カンボジア



昔は学校が普及していなかったため、カンボジアの歴史教育は、寺で僧侶から話を聞いて勉強することが主流であった。また、生存者（体験者）から話を聞くことも一つの方法として実施されている。

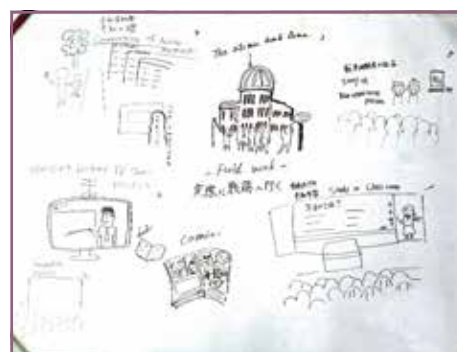
体験者が自ら話をするというのは非常にまれであり、また、今後生存者の数が減っていく中で直接話を聞くことは難しくなっていくのではないかと考えられる。



沖縄



まずは、日本の学校では歴史という教科において、過去の戦争について勉強をする。また、平和集会という学校のイベントにおいても、戦争について触れられることがある。遠足という学校行事もあり、広島であれば原爆ドーム等の戦跡を訪問し、沖縄であれば平和祈念資料館等を訪れたりする。沖縄では特に、毎年6月23日に平和の礎を訪れ、献花や歌を捧げたりする。その他には、戦争体験者から直接話を聞くこともある。しかし、6月23日へ向けて体験者から話を伺う機会は増えるが、それ以降はあまり話を聞く機会がないのが実情である。また、「はだしのゲン」という漫画が小中学校の図書館にあり、同漫画を利用して戦争について学ぶことが可能である。その他、戦争に関する映画やテレビ番組などもある。



韓国



4.3 事件については、生存者や遺族に話を聞いた上で文章化していくことがまずは必要となり、更に、事件の経過をきちんと整理することも必要なため、同事件に関して真相調査報告書というものが作られている。また遺骨の収集事業が進んでおり、同事業を通じて当時の様相を知ることが可能となる。次に、事件をいかに記憶していくのかという点においては、モニュメントを通じて記憶していこうという動きがあり、例えば済州島内に記念碑や記念館が設置されている。記念館には、犠牲者と認定された人の名前が平和の礎のように刻まれている。続いて、いかにして事件の記憶を継承していくのかという点だが、学校では、副読本を利用して事件に関する学習が行われている。芸術分野にあっては、映画、文学作品、Youtube を通して情報発信がなされている。また、赤く咲いたツバキの花が落ちる様子が事件の犠牲者と彷彿させるとして、ツバキのバッジが事件の象徴として利用されている。厳しい冬を耐えて花を咲かせるツバキを、厳しい事件を耐えて済州島の方々が力強く生きる様をツバキにたとえたとも言われている。その他の取り組みとして、4.3 事件を知るためのツアーや、事件によって日本に移り住まざるを得なかった人々に対して事件を紹介する取り組みもある。同事件の後に朝鮮戦争が始まった経緯があるため、済州島でとれるミカンを北朝鮮に送る交流事業なども行われている。



樋口

今回のセッションでは、個々の国ではどのような平和教育や事件・戦争を伝える取り組みが行われているのかを確認することで、皆さんが帰国後に歴史を発信していくうえで利用可能なリソースのリストを作成することを意図していた。次のセッションでは具体的にどのような取り組みを実施できるか考えてみたい。

****第2セッション****

目的：歴史の継承にどのような課題があるか理解する

樋口

このセッションでは、歴史・平和を伝える中で課題となっていることを挙げてもらいたい。

沖縄

教育者や親が持つ平和教育への戸惑いがあげられる。また、教える側も聞く側も戦争体験者ではないという点も挙げられる。更に、平和教育がマニュアル化されていないことも挙げられるほか、カリキュラムは学校任せとなっている。その他には、現在が平和であるために戦争を身近に感じず、危機感がない。

ベトナム

教科書に書かれている内容が若者にとって面白くなく、また、教科書を中心とした教授法になっており、資料館などの見学などが行われていない。

台湾

戒厳令が敷かれ、言論の自由が制限されていたために、体験者から話を聞く機会が少なかった。自由すぎて2.28 事件は歴史としてみなされないこともある。「自由すぎて」とは、歴史としての事件を伝える事が目的ではなく、事件が政治化されて政敵を追い落とすための手段として使われることがある、という意味である。

韓国

現在、朝鮮半島は分断状態にあるため、当時の米国の介入に関して研究がまだ始まったばかり。4.3 事件は政府対島民の構図だけでなく、村内での対立構図もあったため、感情的な葛藤をまだ抱えている生存者がいる。

カンボジア

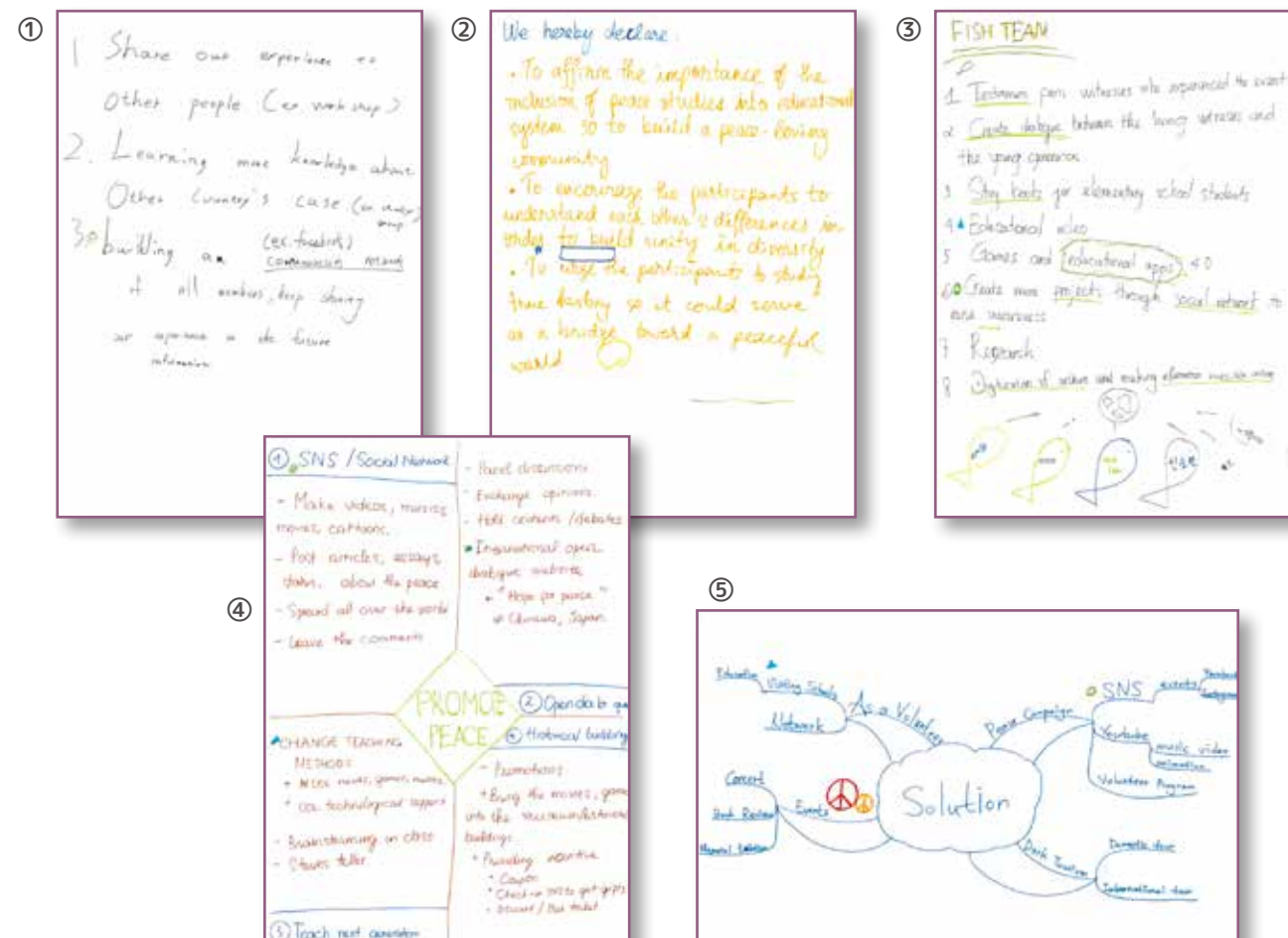
公立学校のカリキュラムの中に、平和教育が組み込まれていないことが課題である。

****第3セッション****

目的：歴史を継承し、平和を発信する為にどのような取り組みが考えられるか

樋口

戦争というイメージはとても伝えやすい反面、平和という概念は大きく具体化するのはとても難しい。しかし、今日は参加しているみんなで取り組めるアクションを考えてほしい。



※本セッション前半では台湾チームの2名が司会を担当した。

OPAC

今から、共同宣言を策定してもらうことになりますが、その材料は、昨日のディスカッションで出てきた、歴史を伝える上での課題や、実現可能な取り組みである。どのような取り組みがあり、どのような解決法があり、どのような学びがあるかなど、今までの学びを思い返しつつ、みんなで考えていきたい。

司会

これから共同宣言を作るうえで、皆さんのご意見を聞きたい。



ベトナム

ベトナムの共同宣言としては、「平和は持続的な発展につながる」というものにしたい。帰国後、我々は皆にこの共同宣言を伝えたいと思っている。

司会

ありがとうございます。他には何か意見はありますか？

台湾

まず、みんなで構成について考えてみるのはどうだろうか？

司会

この共同宣言を作る最初のステップとして、全体の構成を決めてはどうかというものだったが、どうだろうか？

韓国

今、構成について先に考えようという話があったが、まず、平和をどういう観点で考えるのか、ということ为先に考えたほうがいいと思う。例えば、今回の研修で平和の礎を見たが、そこでは国籍・敵・味方関係なく犠牲者の名前が全て書かれている礎を見て、平和を考える時に国家や民族とか国境というカテゴリーを超えて、もっと平和を普遍的に考えることができるのかなあということを考えていた。

司会

つまり、国籍問わず、個人的に平和ということ

定義するということだろうか？

韓国

個人的にというか、いままで平和ということはこの研修の中で考えてきたと思うが、平和を考える時に、まず国家別に分けられて民族別に分けられて、そのカテゴリーからしか平和を見ることができないような構造になっているのではないのか。そこで、一旦その国家や民族の枠組みから一歩抜け出して平和を考えよう、という意味である。

司会

なるほど。では、韓国のご意見を聞きたいのだが、韓国にとって平和とは何だろうか。

韓国

ここで私が考える平和とはこんなものである、と言ってしまうと、おそらく、それは私が考える平和の定義になってしまうし、多分この共同宣言の趣旨に合わない。私が言わんとしているのは、平和ってこうだよ、と言い切りたいわけではなく、平和を見る見方、どういう姿勢で考えるのかを伝えたかっただけである。

司会

ありがとうございます。他の方から平和について何か意見はありますか？

カンボジア

一国の平和だけでなく、周りの国も平和じゃなければ自分の国も平和になれないと考えている。

司会

ありがとうございます。

※ここで沖縄平和協力センターより、共同宣言策定にあたり、「いつ(When)」、「どこで(Where)」、「だれのために(Who)」、「なにを(What)」、「どうするのか(How)」のポイントをまずは考えてみてはどうかと提案をしたところ、だれのために、関しては「世界の人々」ということで参加者から合意を得た。

司会

では、平和を作るために、私たちが取り組めることは何だろうか？

台湾

昨日、新垣先生が言われたとおり、「安全で安心してそして自由な状態があること」こそが平和だと思う。私たちは、これが一番大事じゃないかなと思っている。だから、二度とそういう、人間の戦争という過ちを繰り返さないように、昔の過ちを繰り返さないようにすることが、平和の核心だと思う。

司会

つまり、世界中の人々に安心して安全な生活を送らせるために過去の過ちを改め、そして見直す、ということである。他のはいかがか？

沖縄

確認だが、Whoのところは「誰のために」ではなく宣言する側からの意見だと思うので「私たちが」になるのではないのか？

司会

私たちが宣言するから、ということか？

沖縄

私たちの宣言であるため、「私たちがこうします」、この5ヶ国の学生が集まった研修を通して出てきた宣言になるため、「誰のために」じゃなくて「誰が主体的に動くか」ということになるのではないかと、と思っている。

司会

ありがとうございました。日本からのご意見は、「誰のために」だけではなく、誰が共同宣言を作るということも重要だ、ということでした。「だれ(Who)」が「だれに対して(Whom)」何をするのかということである。つまり、平和の共同宣言を発信するのは私たちであり、世界中の人々に向けて発信する、ということである。ありがとうございます。韓国からはいかがでしょうか。

韓国

さきほど少しお話ししましたが、私たちが過去の歴史を学び、知る意味というのは、過去の歴史・戦争というのが今を生きる私たちの生活に密接な関係があるからだと感じている。ここで私が明確な言葉をもってお話しするのは少し難しいが、例えば、私が済

州島で住んでいるある村がある。その村では未だに70年以上前の話なのに、済州4.3事件の当時の葛藤というものが今の今までずっと続いており、例えば、村の人々同士が互いの顔を見るのが嫌であったり、当時の話がでえなかつたりする。それがその次の世代にも続いており、つまりそれが文化をもう作ってしまっている、もう話すことができない文化を作ってしまった、という状況がある。それは韓国の済州島だけではなくて、ここにきている全ての国でも当てはまる話ではないのかなと思う。私の話に皆さんが共感してくれたらうれしいと思っているが、みんながそういう心をもってホワイトボードに書かれている言葉とかを考えてもらえたらいいのかなと考えている。平和というのは、たぶん単純にきれいな、良い言葉だけで表されるものではないのかな、とも考えている。

司会

韓国は、過去のあまりよくないことを乗り越えることが大事だと言っている。

OPAC

恐らく、韓国チームが言いたいのは、平和もしくは歴史は過去にあったことだけではなくてそれが今の生活にも影響しており、なのでそういった視点で物事を考えることは、他の国でも大事なことなのではないか、ということだと思う。

カンボジア

そもそも共同宣言は何か。ここを理解してもらいたい。では、いま何に直面しているか、どんな方法で解決するか、そしてアイディアを出して賛成する方法をみんなで決め投票する、というのが共同宣言だと思っている。

司会

カンボジアからの意見は、すべての人が意見を出して投票してこれがいいというのを決め、それを私たちの共同宣言にする、ということか。

沖縄

皆さんの話を参考にしつつ、1つこんなものはどうかな、というものを思いついたので書かせてもらいたい。まず口頭で言うってから説明したいと思う。これまでの皆さんの意見を聞いてみると、まさに過去にあったことを知り、その過去で起こったことが私たちの今の生活にも密接にかかわっていることを知り、それを自分事として捉えると書いた。「私たちは、世界中の

人々が過去の過ちを繰り返さないために歴史を知り、自分事と捉え対話と理解を広げる」と考えてみたのだがどうだろうか。

OPAC

沖縄が共同宣言の案文を作成してくれた。案文を構成する要素の中で、好ましいものがあり、かつ、みなさんが合意すれば取り入れていいのかと思った。別の意見があれば替えてもいいと思う。あくまでも一例である。違う意見の人がいたらそれを聞いてみてもいいかと思う。

司会

日本が今回の討論の道筋を改めて示してくれたが、他はどうだろうか？

韓国

世界の強大な国が考えてきた平和という枠組みから抜け出した上で、もともと昔からある地域社会や国際社会の中において、もっと円滑でスムーズなコミュニケーションを通したイニシアチブが構築されるといいと思う。

司会

韓国から意見をいただいた。つまり、大きい国からの声だけでなく、各国からの意見を集めて円滑な

コミュニケーションができるように宣言を作る、ということである。

ベトナム

各国に様々な意見があるが、ベトナムとしてはこのように思う。ここで言われている定義としては、平和の事業をもっと構築して維持することで、各国の歴史は違うが、お互いに勉強して尊重・分かり合う機会となり、それが基になって信頼関係・友好関係を構築することができる。そして、それが人類の幸せな生活を作る基盤になると思う。

司会

つまり、世界中の人々が幸せな生活を送るために、平和を発信するイベントを継続することが宣言の要素として重要だということである。

OPAC

一度ここで休憩を取り、今出ている意見について我々でも整理をしたいと思う。

===== 休 憩 =====



司会

前半のディスカッションにて共同宣言に盛り込まれる「だれが」と「だれのために」については大まかに決まったと思う。なので、つぎの「なぜ」「なにを」、「どうする」という点を国ごとに考えても来たいと思っている。その後、みんなの意見をまとめて共同宣言を作るという形をとりたいと思う。

OPAC

どういう共同宣言を作るのか、何が共同宣言の要素として入っているべきなのか、という点は既に皆さんが挙げてくれた意見に入っていると思っている。例えば、実行する主体が私達、というのはたぶん当然であろう。それと、誰に対して、というのも日本人が日本人だけに対して、というよりは普遍的な国境・国籍を超えてみんなが平和を享受できるような、それが全世界なのか、別の言葉になるのかはお任せするが、普遍的な対象を含んでいるのではないかと、思っている。さて、今からの進め方だが、共同宣言の中には5W1Hの要素が入っているべきだと考えている。国同士で案文を作成してもらい、そして各国から出てきたものに対して、いくつか質疑応答をしつつ最後

===== 各国による共同宣言案作成作業 =====

司会

ただいま、各国から意見をいただいた。今から日本語に訳して一つの文章にまとめてそれが私たちの共同宣言になるという段階なので、少々待っていただきたい。沖縄チームに一つ一つ見てもらいたい。ちらっと見ただけでも共通した言葉はいくつかあり、それらをまとめて一つの文章にしてみたいと思っている。

※司会を台湾から沖縄に交代

司会

みなさん短い時間の中で意見をありがとうございます。それでは1つ1つ見ていきたいと思う。まずはカンボジアの案を見してみる。「平和を愛する共同体を作るため平和教育を教育に取り入れることを宣言する。」「他者の違いを理解することを参加者に促し、多様性の中に一体を作り出す。」「参加者へ歴史を学

に一つの文章にしたいと思う。また、最後の文言の調整は日本語で作ることになるため、日本人に調整はお願いしたいと思っているが、それで宜しいでしょうか。

沖縄県平和祈念資料館（金城）

これまでの話し合いで国とか国境とか出ているが、その通りである。確かに国籍で分けた5つのグループがあるが、10日間を通して1つのチームになったと思う。今、意見を出してくださいというのは、あくまで言語が同じグループでやっているが、最後はみんなの意見から「この意見良いね」「誰も気付かなかったけど、この国からいい言葉が出ているから採用しようか」という形でやっており、主語は「カンボジアの人はこう考えた」ではなくて「みんなで研修を通じてこう考えて共有してきた」という「私達」だということをぜひ考えてほしい。

司会

いまから10分間考える時間を取る。10分間考えてもらって共同宣言案、つまり、ドラフトを考えて下さい。

ふことを促し、平和な世界への架け橋となる」というものになる。

次、沖縄のものは、先ほどとほとんど同じものである。「私達は世界中の人々と過去の過ちを繰り返さないために歴史を知り、自分事として捉え対話と理解を広げる」という内容です。

台湾は文章というより、大事と思われる要素のようである。Whyは2つで、「過去の過ちを二度と繰り返さないため」「安心安全な社会を作り人々が自由につながるため」。Howは3つ、「情報を正確に拡散する」「自ら行動・アプローチを起こす」「新しい要素を導入する」。この新しい要素とは具体的にどんなものだろうか？

台湾

例えばメディアとかゲームとか、今の若者が好きな要素で平和の概念を共有することである。

司会

最後にWhatは「関連情報・知識を収集し続ける」ということ、「常に新技術と過去の歴史を組み合わせ

る可能性を考える」というものが挙げられている。

韓国

韓国チームは、まだきれいに整理ができておらず、キーワードを引き抜いていく形で書いた。まず初めに、誰がこの宣言をするのかという部分は「私達東アジアの青年たちは」という主語にしたいという話があった。この宣言を誰に伝えるのかというのは「全世界の人々」。次は、なぜこうして平和について考える共同宣言を作るのかについては、「悲劇的な過去に対する十分な論議と反省を通して平和な今日を願う」。どうやってその平和を考えるのかということに関しては、「国境・民族・理念・宗教を超えて考えよう」という話が出ている。ややHowとWhatがごちゃごちゃになっているが、ある物事を逆の視点から見ると、新しい視点や観点から見ることで、プラス注意して考えなければいけない点として頭に置いておかないといけない視点としては、「戦争などによるたくさんの人々による祈りを平和というたった二文字で簡単におおってしまうのはよくないんじゃないかな」という

===== 日本によるまとめ作業 =====

司会

おまたせしました。できるだけみなさんの出してくれた意見を集約する形で共同宣言を作成した。内容については今から中身を読ませていただく。

司会

「戦争はいつでも起こりうることです。だから、私たちは過去の悲劇を二度と繰り返さない為、歴史を学び、そこから得た教訓を次の世代へ継承し続けます。そして、国や民族、宗教の壁を越えて、多様性ある社会の中で互いに敬意を持ち、信頼と友情を育み、世界平和への架け橋となるよう努めます。」以上が皆さんの意見を集合した我々が考えた共同宣言になるが、何かご意見のある方はお願いします。

OPAC

特にご意見や追加説明が必要な部分があれば、伺えたいということですが、よろしいか？

韓国

その暫定の宣言文の中で一体誰がその宣言文の主体なのか、主語が見えない。

話と、もう一つは「平和というのは結果ではなくそこへ向かう過程のことを言っている」という話が出た。

司会

続いて、ベトナムを見ていく。Whyは「命は貴重だから」そして「戦争はいつでも起こりうるものだから」。Howは「平和に関するプログラムや活動を作り、維持し発展させていく」。Whatは「平和に関する意識を育てるプログラムや命と平和に対する愛の姿勢を通して平和に関するプログラムや活動を始め、発展させていく。各国の歴史の違いに関わらず私たちは互いへの敬意を通して相互の信頼・友情・個人と国家間双方でのレベルでの平和に向かっていく。これこそが人類の幸福の基礎である。」という風に書いてある。ここからそれぞれの共通点を見つけ出して一つの文にしようと思う。

OPAC

今から沖縄チーム、資料館職員、OPACにまとめてもらうため、その時間に入ります。

司会

主語は「私たちは」である。これはこの研修に参加した私達を指している。

韓国

「私たち」という言葉がすごく曖昧なので、私が言いたいことは、今この研修の場で5か国の人達が集まったことの意味だとか、もう一つはそれぞれの国が、例えば、日本とかアメリカという強国に対抗してきた歴史というのがこの集まった5ヶ国は共通していると思うため、そういった意味も含めて「東アジアの青年たちが」というようにもうちょっと具体的に主体を絞ったほうがいいのではないか、と思っている。

司会

一応、絞り切れていると思う。宣言の主体はあくまでこの研修に参加しているここにいるメンバーだと思いが、どう思うか。

OPAC

今は「私達」という風に書いてあるが、それを「東アジアの若者たちは」という風にもう少し明示的に

した方がいいのでは、というのが韓国の方からの提案であるが、それに対してなにか意見あるか。

台湾

平和に対する宣言であり、東アジアだけでなく世界中のことなので、私たちというのは世界中の人達のことではないのか。私個人的な考えではあるが。

OPAC

これは共同宣言なので、「全世界の人達が言った」ではなくて「私たちが言った」ということでさっき合意したと思う。誰に対して言うか、「私たちが」誰に対して言うのかという共同宣言であり、私たちが作り上げたもの、というのが我々の理解である。

司会

この宣言もこの10日間の成果物だと思う。一緒に過ごしてきたから最後にこういう共通する気持ちにたどり着いたのだ、ということで研修の成果物だと思っている。

OPAC

事前に「私たちは」というところは合意をしていたはずであり、その「私たち」が指すものに関しては、ここにいる「私達、参加者」ということでいいのかなと思う。元に戻ります。先ほどの韓国の質問は「東アジアの若者は」という風にもうちょっと明示的にした方がいいのではないか、という意見でした。

韓国

「私達」という言葉に関してだが、この研修の単位で「私達」と言った場合、それは当然みんなこの研修の場に来ているので、その言葉が指す範囲を私たちは理解できる。でも、19日のシンポジウムでこの共同宣言を発表するということは、この研修に参加せず全然知らなかった人たちがこの共同宣言を聞くわけであり、この共同宣言を作った人たちがどういった立場の人達なのかをはっきり示す必要があると思う。

OPAC

もう一度、韓国チームの意見を説明させてもらうと、今ここにいる参加者たちは「私達」という言葉を使うと参加者である私たちのことだと理解できるが、これを発表した際に、それを聞いた人たちが「私達」が誰を指すのかわからないかもしれないということで、もうちょっと明示的な方をした方がよいので

はないかということだ。

司会

おっしゃることはよく分かるが、シンポジウムで共有されるのはこの共同宣言だけじゃない。10日間過ごしてきた研修のプログラムもすべて共有される。まず、我々が得た成果物としてこれを最初にもってきて、では、こんな答えを出した人たちはどんな研修を経てきたのかを見てもらえれば、これが共同宣言が存在する意義なのかなと思う。

沖縄

もしそれが心配であれば、宣言文を読み上げる前に「私たちが考えました」と言えればいいと思います。そうしたら聞いている側も分かると思う。主語をわざわざ固有名詞にしなくてもいいと思う。

韓国

この研修で集まった国というのがカンボジア、ベトナム、韓国、台湾、日本であり、どうしてこの5ヶ国が集まったのかということが、この宣言文だけを見ると見えてこない。主体が誰なのかわからないから。だから「東アジアの青年たち」と少し加えるだけで、この5ヶ国が少しでも共通する歴史を持っていることが、この共同宣言文を見た人たちに伝わりやすいのかなということは思う。

カンボジア

いろいろ意見あるが、このままだとずっと平行線で終わると思うので、もしよかったら投票をしないか。

沖縄県平和祈念資料館（金城）

確かに、指摘として成果報告会で「私たちが作りました」と言って話すときに来ている人たちは理解できるという話であった。ただ、報告書にするとこの文章は確かに「誰が」というのが分かりづらいという指摘はあると思う。なので、例えば「カンボジア、韓国、台湾、ベトナム、沖縄の人々は悲惨な歴史を経験しました」というようにすれば、この宣言文をつらい歴史を共有する私たちが作った、ということになるがどうか。

参加者：（賛同）

司会

宣言文の冒頭に、そういった文を加えるということで、「私達」が明示的になるからいいのではないかと

ということで理解した。では、これにて共同宣言は完成ということにしたい。

※共同宣言の策定及び各国からの意見集約においては、沖縄県平和祈念資料館職員 4 名（上原、金城、

新垣、長島）が日本語に翻訳された案文における文言の確認や共同宣言の語彙の選定などにおいて助言を提供した。

共同宣言文

「私たち、カンボジア、韓国、台湾、ベトナム、沖縄の人々は過去に悲惨な体験をしました。戦争はいつでも起こりうることです。だから、私たちは過去の悲劇を二度と繰り返さない為、歴史を学び、そこから得た教訓を次の世代へ継承し続けます。そして、国や民族、宗教の壁を越えて、多様性ある社会の中で互いに敬意を持ち、信頼と友情を育み、世界平和への架け橋となるよう努めます。」



※研修の様子を動画でご覧になれます。

第 2 部

「平和への思い（ウムイ）」

発信・交流・継承事業 成果報告

第 3 章

シンポジウム

1 はじめに

(1) 目的

本事業では、沖縄での合同宿泊研修の前に、それぞれの国・地域であらかじめ設定された自国・地域における過去の紛争、戦争、内戦などについて学習してもらい、その成果を沖縄に持ち寄った。沖縄での合同宿泊研修で各国参加者がその成果を発表し、各参加者はそれぞれの負の歴史を知ることができた。

10日間の合同宿泊研修で沖縄戦や各国・地域の歴史や平和について学び合い、「平和への思いを伝えるためにどのような事が出来るか」などについて考えをまとめた。本シンポジウムで、研修開始前に作成したそれぞれの国・地域の負の歴史に関する発表資料に沖縄での学びを加えて再度構成し、来場者に向けて発表した。

更に、沖縄キリスト教学院大学の新垣誠教授をコーディネーターに迎え、各国・地域の平和教育の現状や課題、また沖縄研修での学びについて参加者とパネルディスカッションを実施した。

最後に、本事業を通して得た相互理解と平和への発信の誓いである「共同宣言」を発表した。

(2) フログラム

令和元年度 「平和への思い」発信・交流・継承事業 成果発表会

「平和への思い（ウムイ）」

～ For a bridge to peace across the ocean ～（平和の架け橋となるために）

日時：2019年10月19日（土）14:00～16:30（13:30 開場）

場所：沖縄県立博物館・美術館 講堂

次 第

14:00 開会

14:00～14:05 主催者挨拶 沖縄県平和祈念資料館 館長 外間 裕朋

14:10～15:20 第1部 成果発表

カンボジア：カンボジア大虐殺（ポル・ポト時代の大虐殺）

大韓民国：済州島4.3事件 済州島からの平和への思い in 沖縄

台 湾：台湾2.28事件 未来への平和への思い

ベトナム：ベトナム戦争 平和への思い

沖 縄：沖縄戦の継承・発信

15:30～16:20 第2部 意見交換・質疑応答

ディスカッションテーマ：【戦争など悲惨な経験から得た普遍的な教訓とは何か。

我々は教訓の次代への継承・平和の発信のため、何ができるのか。】

コ ー デ ィ ネ ー タ ー：沖縄キリスト教学院大学 教授 新垣 誠

パ ネ リ ス ト：各国参加者全員

16:20～16:25 共同宣言発表

16:30 閉会



カンボジア



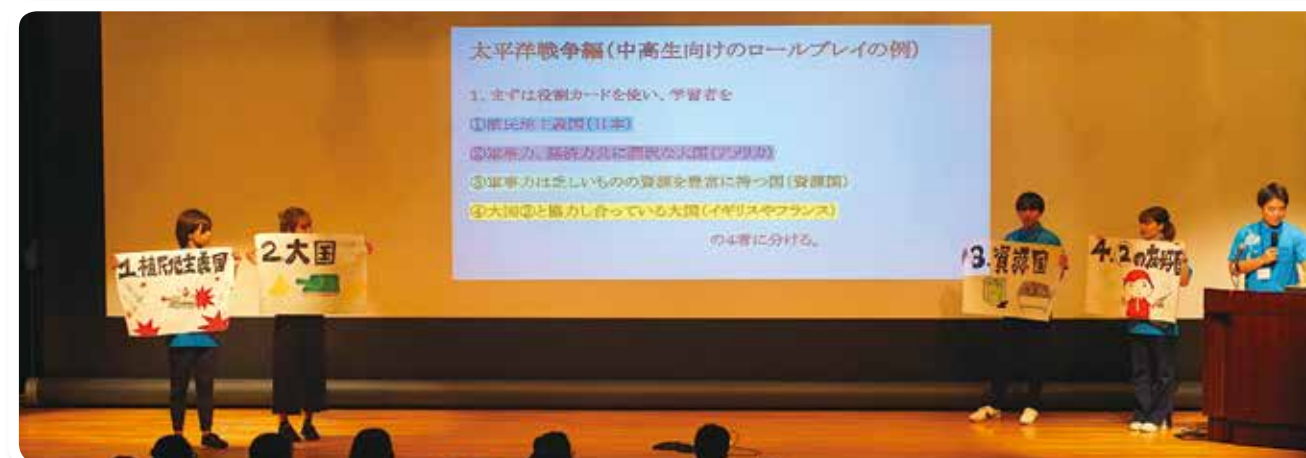
台 湾



ベトナム



韓 国



沖 縄

2 成果発表



カンボジアチーム

「カンボジアの大虐殺（ポル・ポト政権による虐殺）」

CAMBODIA'S GENOCIDE (1975-1979)

皆さんこんにちは。カンボジアから来ました、フノ
ンペン大学の3年生です。私たちの今回のシンポジ
ウムのテーマは、カンボジアの大虐殺です

Introduction

*Khmer Rouge is neither a civil war nor an interstate war.
It is a regime where leaders abuse their power and
massacre the people. Everyone felt victim under this regime.*

この事件は、1975年から79年の間で起こったも
のです。皆様にご紹介する前に、一つ注意点を ご紹
介します。それぞれの国々の歴史を理解するのは非
常に難しく、ここでは簡単で分かりやすいものをご
紹介いたします。もう一つの点は、カンボジア大虐
殺は外部勢力との戦争を通して人々が犠牲になった
のではなく、この当時の政権によって国民が殺害さ
れるという事件だったということです。

Cambodia's geographical location in East Asia



カンボジアは、アジアの中の一つの国です。

1. Timeline of Cambodian History



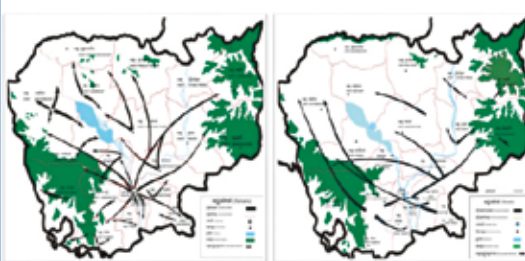
カンボジアは、1953年にフランスから独立しまし
た。今日まで、カンボジアでは多くの政権が成立し
ました。その中で、1975年から79年の民主カンボ
ジアによる大虐殺のことをご紹介いたします。ポル・
ポト政権の誕生です。

The Rise of Khmer Rouge



1975年4月17日、ポル・ポト政権の軍隊がフノ
ンペン（カンボジアの首都）に進攻している写真で
す。

Evacuation of Phnom Penh



その日から、ポル・ポト政権によりフノンペンの住
民は即時に強制的に地方へ移動させられました。例
えば、仕事の会議中の方々でもそのまま地方に出
ていきなさい、という風に強制的に移動させられま
した。病院に入院中の重症患者も全て対象になりま
す。最初、出て行くのは3日間だけと言われていたの
ですが、実際のところ、それは強制移動でした。同時
に、貨幣制度などは全部廃止されました。

*The sudden evacuation of more than
2 million people in Phnom Penh
spanned across 3 days (from school,
hospital, residence, etc.)*

*Currency system was abolished and
Cambodia became a closed economy.*

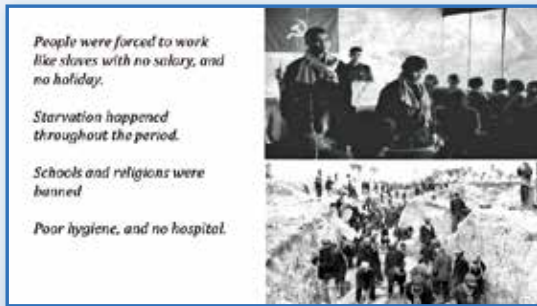


地方に行くと、まず共同生活させられました。共同
生活というのは、一緒に泊まったり、一緒に生活し
て一緒に働いて、一緒に食べることを指しています。

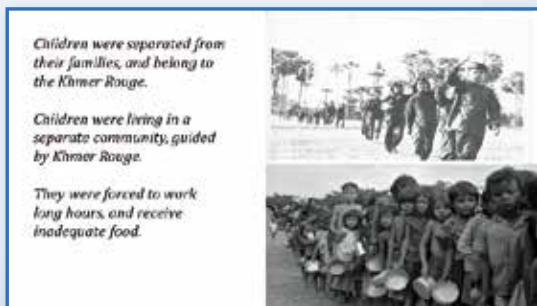
Life under the Khmer Rouge



住民たちは、朝から晩まで強制的に働かされました。
休みの日もなく給料もありません。ポルポト政権は、
毎日の食事制限しました。毎日、住民に十分な食
事を与えることはできませんでした。学校、病院、
宗教、貨幣制度なども全部廃止されました。



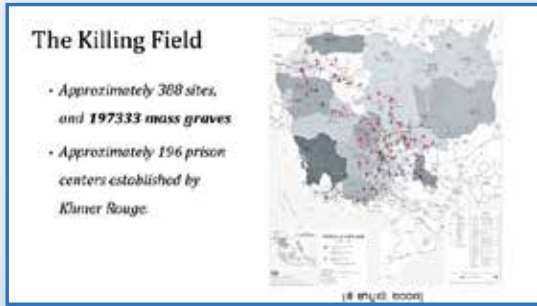
もう一つご紹介するのは、ポル・ポト政権の特徴である強制結婚です。強制結婚というのは、リストから男女の名前を読み上げ、握手をして夫婦になるというものでした。既に結婚している人がいたとしても、勝手に別の人と結婚させるということもありました。



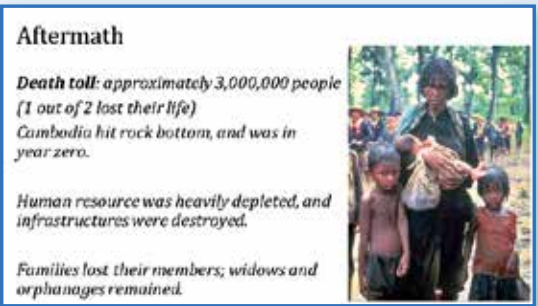
子供たちは少年団のように集められ、集団で仕事しました。子供たちも「ポル・ポト政権の子供」とみなされ、本当の親に育てられませんでした。大人と同じく朝から晩まで強制的に働かれ、十分な食事を与えられることはありませんでした。



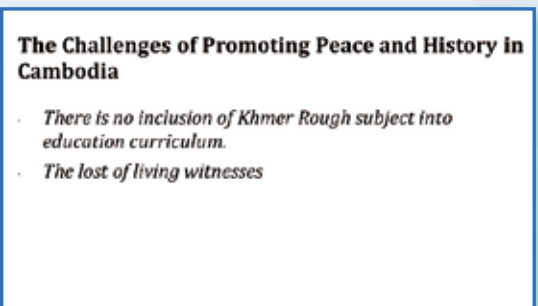
ポル・ポト政権の第一の殺害対象者は知識人で、すべての知識人が殺害対象になりました。それだけでなく、当時海外に留学中の学生たちもわざわざカンボジアに呼び戻し、帰国後に殺害しました。知識人を殺害したのは、将来的にポル・ポトの反対勢力になるかもしれないという理由からでした。



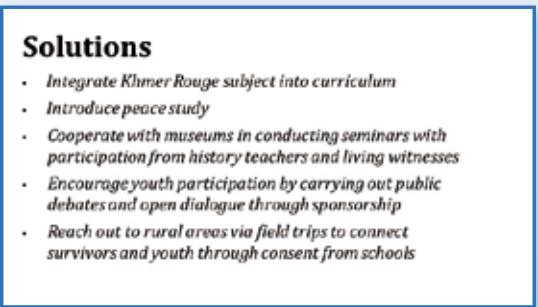
ポル・ポト政権時、カンボジアは全土が殺害の場になりました。



ポル・ポト政権約3年8か月間の中で、住民約300万人が殺害されました。その数は、総人口の二人に一人が殺されたことになります。カンボジアは当時、内戦が終わった直後、人材もインフラもすべて破壊されていました。カンボジア人は、どの地方でも犠牲者があり、被害を受けています。一家全滅の家族もいますし、お父さんお母さんが亡くなって、子供だけ生き残るということもありました。



ポル・ポト政権はこのような悲惨な虐殺を行ってしまったのですが、今のカンボジアの社会では、前政権のことをあまり教えていません。今の教育でもこのことをあまり教えていません。40年たって証言者も少なくなっており、このような現状のままの状態では、カンボジアのクメールの物語のようになってしまいます。



私たちは、今のカンボジア政府は、子供たちに平和とはどんなものかを伝える平和講話などを、教育カリキュラムに入れるべきであると考えています。あとは、カンボジアにあるトゥール・スレン虐殺博物館と連携して、平和講話を行ったり、あるいは生存者の平和講話や自分の体験などを話してもらうという企画も必要です。クメール政権によって、そういう討論会も実施するカリキュラムも必要です。また、

全国に虐殺が行われた場があるので、そこを現地視察をする企画も必要だと思います。



今後のビジョンについて、二つのポイントをご紹介します。平和についてはいろいろな話がありますが、真実の平和は何か、という点はあまり知られていません。カンボジア人自身も平和大好きなどと言っていますが、平和や過去について学ぶ機会を増やすべきです。二番目は、真実をカンボジア全土でカンボジア人に知ってほしいと思います。クメールの歴史に関する本の著者やメディアは偏った見方ではなく、きちんと事実を伝えなければいけません。そういったことを通じて、平和となることを期待します。ありがとうございました。



韓国チーム

「済州島 4.3 事件 済州島からの平和への思い in 沖縄」



こんにちは。私たちは、大韓民国の済州島の済州大学から参りました。11日に済州島から沖縄県にやってきました。お手元にある、「済州島 4.3 事件とは何か」という A4 一枚のプリントをご覧になりながら、発表を聞いていただけたらと思います。



沖縄県には、いまだに私たちが詳しく知らない、戦争の歴史がありました。その中で、朝鮮人たちの歴史もありました。



1945 年 8 月 20 日沖縄の久米島で虐殺されたク・ジュフェ氏一家。戦争に巻き込まれて殺された無名の死者たちです。



1944 年に沖縄の渡嘉敷島に連行され、1972 年に不法在留者として分類されてしまい、日本での特別在留許可を得るため初めて性奴隷あったことを証言したベ・ホンギ氏。彼女は戦争に巻き込まれ、何とか命だけは助かりましたが、生涯死ぬことだけを待ち続けた呪われた人生でした。



植民地、戦争、朝鮮、日本、そしてアメリカを取り巻いた歴史があり、私たちが暮らしている済州島で起きた済州島 4.3 事件もまた、この歴史の流れの中に存在しています。1910 年に始まった日本による朝鮮の植民地支配は、1945 年になってやっと終わりました。



終戦後、新しい国家を建設するための葛藤が始まり、ソ連とアメリカの代理戦争として朝鮮半島は二つの国家に分断される悲劇を経験しました。南朝鮮のリー・スンマン政権は、南朝鮮のみの単独政府の樹立のため、南側だけでの単独選挙を行おうとしました。



しかし、この分断を拒んだ済州島民は、単独選挙反対運動を決行しました。



単独政府の樹立に対する済州島民の反対運動を社会主義運動と規定したリー・スンマン政権とアメリカは、大々的な虐殺により済州島をレッドアイランド、それから死の島に追いやりました。済州島 4.3 事件は、非常に多くの無名の死者を生み出しました。

1947. 3. ~ 1954. 9.

7年7ヶ月

71年目を迎えた現在

1947年3月から1954年9月まで、7年7か月の間に3万名にのぼる、当時の済州島の人口の10分の1が犠牲になりました。そして、済州島4.3事件が起きてから、今年で71年になります。



平和の礎 in 沖縄県平和祈念資料館

これから、今回の研修で学んだこと、感じたことについて報告したいと思います。今回の研修は、沖縄の平和祈念公園で始まりました。



平和の礎には、大韓民国と朝鮮人民民主主義共和国、台湾、そしていまだに名前が刻まれてない人まで、沖縄戦で命を落とした犠牲者たちが一緒に祀られています。私たちは、済州島から持ってきた焼酎でそこに祀られている人々の名前と未だに刻まれていない人も含めて一緒に洗いました。

実地見学
Field Trip



また、私たちはたくさんの現場を訪れました。1945年の沖縄戦の記憶をとどめている辛く、悲しい空間。



ひめゆりの塔&平和祈念資料館

ひめゆり平和祈念資料館では日常が戦場へとっていく過程を見ることができました。



伊江島

ニヤティヤガマ

伊江島で私たちは、74年前から占領され、その状況が今でも続いている日常を目にしました。



反戦平和資料館 ヌチドゥタカラの家 in 伊江島



高敷高台

普天間基地

普天間基地では、米軍基地によって日常の中で戦場が続いていることを確認し、実感することができました。



もっと沖縄について深く知りたいと思い、オスショナルツアーを通してたくさんの場所へ行きました。沖縄戦当時、ガマに隠れていた140名のうち、83名が集団的に殺された歴史があるチビチリガマ、沖縄戦当時の朝鮮人たちを追悼する恨之碑（ハンのひ）、サトウキビ畑の唄の碑、沖縄戦を目に見える形で表現した、丸木夫妻の「沖縄戦の図」の連作画展示会、台湾展「黒潮でつながる隣（トゥナイ）島」特別展、アメリカ軍政の文化が残っているAサインバー、そして、東洋最大規模の嘉手納米軍基地を見ることができました。



この10日間の研修に参加した他の国々の歴史にも触れることができました。列強国同士の葛藤により、理由もなく殺された東アジアの人々の歴史があります。カンボジア、台湾、沖縄、ベトナム、そして済州島、韓国はみなこのような歴史をお互いに共有しています。

記憶の継承

1945年 沖縄戦と米軍基地
1947年 台湾2・28事件
1948年 済州島4・3事件
1955-1975年 ベトナム戦争
1975年-1979年 カンボジア大虐殺

長いものでは70年、短いものでは40年の月日が流れる中で、みんなが記憶の継承という問題を抱えています。事件の真相が完全に明らかになっておらず、それぞれの国家の中でも記憶を共有することができないという問題があります。

記憶の発信



私たちは平和に対しての考え、その考えを交流し広げるために集まりました。参加国皆がつらい経験を持つ記憶の継承、というものをどのように作り上げていくのかについての方法も模索しました。体験者と生存者の証言を記録し継承すること、犠牲者の遺骨を収集し心がこもった儀礼の方法を構築すること、次の世代に継承される平和教育の多角化などについて、それぞれの国での経験を共有しました。

平和へと向かう“道”

平和の境界

国境、民族、国家などの壁を乗り越えて
人間の尊厳を守っていく平和の道

平和の言葉

新しい目線から考え、実践することで、
再構築される言葉を広げる道

そして私たちは、平和のためにもう少し根本的なことについて振り返ることを提案します。まずは、平和の境界。済州島4.3事件は、大韓民国の中央政府による済州島民に対する虐殺事件でした。沖縄戦当時、日米両軍による沖縄人の犠牲は非常に大きなものでした。ベトナム戦争当時、国軍による民間人虐殺が起きましたが、いまだに真実はまだ明らかになっていません。私たちが言わんとしている平和は、国境

を前提としたものではありません。国境、民族、国家などの壁を乗り越えて人間の尊厳を守っていく平和の道を模索したいと思っています。次は、平和の言葉。誰の目線で平和を考え、願うのかについての苦悩と同時に平和の言葉についても言及しないといけないと思います。支配者、加害者の目線ではない、被支配者、被害者の目線で過去の歴史を新しい角度で見ること、このように再構築された言葉を用いて支配者、加害者の領域まで広げていける平和の言葉を私たちは自分たちの物として作っていかねばなりません。



国家と宗教、そして理念を超え、人間の尊厳を回復する道、平和は結果ではなく、この道を行く過程、プロセスにあります。平和が道、そのものなのです。



沖縄の歴史、沖縄の苦悩、沖縄の実践からたくさんのことを学ばせていただきました。



以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

補足資料 ※韓国チームが作成し会場で配布した資料

2019.10.19.14 時～@沖縄県立博物館 2019 年度「平和への思い」発信・交流継承事業成果報告会

済州島 4・3 事件とは？

韓国（済州島）チーム

アジア太平洋の多くの地域と同様に、朝鮮半島もまた 1945 年 8 月に日本による植民地支配からの解放を迎えたが、その直後より南半部には米軍が駐屯し、軍政が敷かれることになる。その中でも、1950 年以前の朝鮮解放の過程で、済州島ほど政治対立による被害を被った場所はなかった（Cumings1997＝2003）。急激な人口流入に伴う生活困窮の深刻化、コレラなど伝染病の蔓延、米国による占領軍政の失政と腐敗、さらには、分断の固定につながる南半部のみの単独政府樹立をめぐる左右対立の激化などもあり、済州島では民心が極度に不安定となっていた。

そのような中であって、1947 年 3 月にはデモ行進する群衆への米軍政庁警察による発砲によって、12 名の住民が死傷する事態が発生する（「3・1 節発砲事件」）。そして、その処理をめぐって、軍政と結託した右翼勢力、それと対立する左翼勢力、両者の軋轢がさらに激化することになる。こうして、左翼系列の南朝鮮労働党済州道委員会を中心とする「武装隊」は「（分断政府の樹立を問う）南朝鮮のみの単独選挙に反対」、「弾圧に対しては抗争だ」などのスローガンを掲げて、1948 年 4 月 3 日早朝に武装蜂起を決行した。

これに対して米軍政と新生韓国政府は「大量虐殺計画（program of mass slaughter）」に沿った組織的な「焦土化作戦」を断行した。米軍政と樹立直後の韓国政府にとって済州島民による武装蜂起と対政府闘争は、朝鮮半島における分断体制への異議申立てに他ならず、単なる地域レベルの問題を超えて、新たに生まれた反共政権の正統性を脅かし、ひいては米国が構想していた東アジアの冷戦秩序を攪乱させかねない問題であった。そのため、主に「陸地」から派遣された政府軍と警察、右翼団体などの「討伐隊」によって強硬鎮圧作戦が実行され、その結果、島各地で非人道的な残虐行為が発生することとなった。「死の島」から脱出して日本に密航する人びとも多数いた。結局、済州島 4・3 事件は、3 万名あまりという甚大な人命被害をもたらした末に、7 年後の 1954 年 9 月になって一応の終結をみた。

一方、「武装隊」によって「住民」が殺害されたという事実もなくはなかった。とくに、「討伐隊」への抵抗が長期化することによって「武装隊」が民家に侵入し、食糧や衣服、家畜などを略奪する事態も頻繁に発生した。圧倒的な物理力に基づく「討伐隊」の鎮圧作戦が長期間にわたって住民たちを圧迫する状況が続く中で、当初は「武装隊」の抵抗運動に対して友好的だった住民たちも、これ以上彼らを支持することができなくなった。

済州 4・3 委員会（2003：369-372）によれば、事件によって当時の島人口の 1 割が殺害され、そのうち 10～30 代が約 7 割、男性が約 8 割を占める。虐殺が最も激化した 1949 年には、「15 歳から 49 歳までの年齢層の人口が著しく減少した」（李昌基 1999：80）ため、「島の人口地図は

完全に変わってしまった」（Morris-Suzuki2010：75）とされる。「焦土化作戦」の主なターゲットになった若い男性たちの集団的な死や行方不明は、済州島の人びとにとっては家系の存続を担うべき後継者の喪失に他ならなかった。だからこそ、生き残った母や妻、嫁、また子どもたちは、うわさであろうともあらゆる情報を頼りに、殺害された近親者の遺体が隠匿・廃棄された場所を探し出し、手厚く埋葬する必要があった。加えて、葬送儀礼や戸ノ除籍の処理、死霊結婚や養子縁組などを通じた成員の補充・再構成にいたるまで、家族・親族集団消滅の危機を乗り越えるための様々な対処が模索された。

しかし、それは困難を極めた。この事件は、韓国社会において北朝鮮の指令による共産暴動、あるいは南労党中央党によって扇動された反乱や騒擾事態とみなされており、虐殺から生き残った人びとは「極端な反共イデオロギーの時代」（金鍾旻 1999：373）のなかで自ら生き延びる道を探りながら、殺害された近親者の死後処理をせざるを得なかったからである。イデオロギー的締め付けばかりか生存の危機にまでさらされながら、生き残った人びとは所与の親族概念を構成する知識を改編し、虐殺以後を生き抜くための工夫を駆使することを余儀なくされたのである。

7 年 7 ヶ月にわたる事件期間の間、おびただしい人命の損失と人権蹂躪、共同体破壊が発生したといわれる済州島 4・3 事件は、韓国社会の民主化が進められた 1980 年代後半まで、とりわけ軍事独裁体制下においては、その議論自体が社会的にタブー視されざるを得なかった。しかし、そうした抑圧的な状況の中でも、済州島をはじめ、ソウルや東京、大阪など各地でこの事件の解決を要求する運動（真相究明運動）が活発に繰り広げられた。

済州島 4・3 事件について韓国政府による公式的な取り組みが始まったのは、2000 年 1 月、国会で与野党の合意により済州 4・3 特別法が制定・公布されてからのことである。そして、同法の理念を実現し、「過去清算」を総括的に推進する組織として、同年 8 月、政府内に済州 4・3 委員会が発足された。こうして、この事件に対する韓国政府の「過去清算」を本格化するための法的、制度的な体裁が整えられることとなった。

＜参考文献＞

- Cumings, Bruce, 1997, Korea's place in the sun: a modern history, New York: Norton.
- 済州島 4・3 事件真相究明および犠牲者名誉回復委員会、2003、『済州島 4・3 事件真相調査報告書』、pp.369-372。（韓国語）
- 李昌基、1999、『済州島の人口と家族』、嶺南大学校出版部、p.80。（韓国語）
- Morris Suzuki, Tessa, 2010, Borderline Japan: foreigners and frontier controls in the postwar era, Cambridge: Cambridge University Press, p.75.
- 金鍾旻、1999、「4・3 以後 50 年」『済州 4・3 研究』、歴史批評社、p.373。（韓国語）

出典：高誠晩、2017、『犠牲者』のポリティクス：済州 4・3 / 沖縄 / 台湾 2・28 歴史清算をめぐる苦悩』、京都大学学術出版会、pp.37-40



「台湾 2.28 事件 未来への平和への思い」



沖縄の皆さんこんにちは。私たち台湾チームは、政治大学日本研究プログラム修士課程から参加しています。本日は台湾の 2.28 事件を中心に、皆様にお話をしたいと思います。



自己紹介

私たちは、今月の 11 日から今日まで沖縄にある様々な平和資料館を巡って研修を受けてきました。いろんなところを回中、私たちが見てきたこと・考えてきたことを、台湾人ならではの経験と合わせて、皆様にシェアしたいと思っています。



本日の発表は主に三つに分けます。まず 2.28 事件とはなにかを簡単に説明し、2.28 事件の経緯やここで学んできた沖縄戦のことを踏まえて、今、我々はより多くの人に平和の重要性を伝えるにはどういった課題を抱えているのかについて説明します。最後に、これらの課題に対して私たちはどういうソリューションを考えたのか、また、私たちにできることは何かを整理し、皆様と共有します。さて、本

番に入る前に一つ質問があります。現在、台湾の政治体制に対してどのようなイメージを持っていますか？ほとんどの方は、台湾は自由かつ民主主義的な政治体制を持っていると思いますが、実は、台湾の民主主義化の歴史は 1996 年から始まり、まだ 23 年間しか経っていないんです。では、なぜ台湾でこんな現象があったのでしょうか。それは 72 年前、つまり、1947 年に一つの事件が起きたからです。



1945 年、日本の敗戦により、台湾は蒋介石がリードする国民政府に接収され、台湾の人々は敗戦国民から一夜にして戦勝国民へと変身しました。つまり、日本統治時代の終わりは、台湾の人々にとって、自らが台湾の主人公となるチャンスとしてとらえられました。



しかし、当時台湾に上陸した軍隊の軍人は、だらしない軍人ばかりでした。当時、中国において国民政府と中国共産党の国境内戦が激しくなる中、軍隊の環境は決して整っているわけではありませんでした。



また、台湾を接収するために国民政府が設置した台湾省行政長官公署は、日本資産を不正に接収するほか、煙草、お酒、砂糖などの専売権を占有し、生活必需品の値段の決定権を握っていました。このように、台湾の人々の気持ちは、歓迎や期待から失望、そして怒りへと変わりました。



そんな中、1947 年 2 月 27 日、台北市内の天馬茶房という喫茶店の付近で闇煙草を売っていた中年女性とそれを取り締まる専売局の人の間で、衝突が起きました。その専売局の人が威嚇するために銃を撃ったところ、誤って人を殺してしまいました。それがのちに直接の発端となり、翌日に暴動が始まり、そして早いスピードで暴動が全島規模に拡大しました。もちろん、軍隊による鎮圧があり、5 月 15 日には暴動は収まりました。



このような背景があり、台湾は戒厳に入りました。戒厳というのは戦争や自然災害などの緊急事態の時に、国民から一部の権利、そして政府の行政権の一部ないし全部を軍に移行することを言います。台湾は、第二次世界大戦終結後、まもなくこのような戒厳に突入し、38年間もの長期にわたって施行されました。20世紀を通じて世界最長の戒厳といわれています。しかし、台湾の人々の恐怖はそれだけに

とどまらず、国共内戦の敗戦により、台湾に撤収する軍人が増えることによってさらに高まりました。それは台湾において、白色テロといわれた一種の国家テロに起因します。中国共産党のスパイの侵入を当時のトップたちが恐れた結果、取り締まりが極端になり、社会全体を恐怖に陥れることになってしまいました。左上の絵は当時の雰囲気が分かります。疑わしき人物はこのように吊り上げられ、拷問を受けました。このような38年間を終えて、1996年に台湾で初めて国民が選挙で大統領を選ぶことができました。このような台湾の民主化も2.28事件の影響を受けています。



白色テロにおける逮捕者の95%以上が冤罪だったという集計もあります。また、諸説ありますが、海外の犠牲者も含めて1万8千人から2万8千人が被害にあったといわれています。その中には沖縄出身の犠牲者もあり、2.28事件によって、その後保障を受けるケースもありました。本日は、その方の御家族にご来場いただいています。また、2.28事件については、中国から来た人と元々台湾に住んでいた

人との間に発生した衝突だと耳にされるかと思いますが、犠牲者の中には、中国から来た人も多数含まれています。今、政府は2.28事件に関して、台湾で多くのアクションを起こしています。例えば、2月28日を平和記念日に設定するほか、2.28事件の責任についての調査報告も発表しています。また、先ほど申し上げたように、犠牲者の子孫に対し保障を行うなどの法律も作っております。



では、これから平和を伝えるにあたって、直面している課題を説明します。ここでは、直面している課題をまず三つ挙げます。まずは、「情報なし」、そして「関心なし」、そして最後は「行動なし」。つまり、情報が取得しにくいから関心がない、関心がないから行動もない、つまり、我々は伊江島の資料館で見た「平和の最大の敵は無関心である」ということを伝えたいのです。



では、一度、このような重い話は置いておいて、ピーマンの話をしましょう。ピーマンは、その独特なおいや苦みのため食べられなくて、困っている方も多いと思います。では、どうやってピーマンが嫌いな人にピーマンを食べさせますか。ここでは、3つの方法を挙げます。まずは一番簡単な方法はアピールする、つまり説得することです。つまり、ピーマンの栄養価値を教えます。しかし、これでは不十分。

では、次は好きではない部分、あるいは不味い部分を工夫し、おいしく料理します。例えば、皆さんが好きな中華料理、チンジャオロースは、まさにこのやり方です。最後は、ピーマンが料理に入っていると感じさせない。例えば、ピーマンを野菜ジュースに入れることは、その例の一つです。実は、歴史も同じです。多くの人々は歴史はつまらない、重い、あるいは無関心です。しかし、こういう無関心がまさに戦争の原因です。



では、無関心な人々に平和を受け入れてもらう方法は何でしょう。だいたい、ピーマンの対策と同じです。まずはアピールする、つまり、「平和は私達にとって重要です」と説得する。でもやっぱり足りない。だから二つ目は、無関心な人の関心を惹くことです。例えば、歴史の固い部分を工夫して面白く紹介します。今の沖縄では、沖縄平和賞があると思います。これをきっかけに、受賞者の方たち、

参加者、住民、観光客の人達に平和の理念を教えます。最後は、歴史や平和の理念を再パッケージします。つまり、平和や歴史に無関心な人が受け入れやすいよう紹介します。



例えば、台湾の場合では、漫画、映画、ゲームあるいはユーチューバーなど、マルチメディアを通じて若者や無関心な人に平和と歴史を教えています。例えば、最近台湾で流行している映画はこのDetention（返校）という映画です。そして、台湾人は白色テロの要素をゲームや映画に入れることで、台湾の若者たちにいろんな歴史のことを発信しています。そして、SNSで映画の情報や感想などを拡散して、関心を高めることができました。では、Detention（返校）の予告を見てみましょう。

* 予告編を上映 *



映画はいかがでしたか？当時の台湾人は、このような恐怖の中で生きていました。したがって、私達は、今日の平和の大切さを感じることができます。私たちは若者ができる二つの発信がとても重要だと思います。最初は、自分から発信します。私たちは、SNSで発信することができます。例えば、FacebookやLINE、Instagram等を使って、自ら平和のことを発信できます。自ら何かを発信することは、行動を起こすエネルギーにもなりうるため、このエネルギーを拡散してより多くの人々のエネルギーを喚起します。私たちにとって、戦争は単なる記憶の学問ではありません。過去から現在へ至るその流れを読み取ることで、未来が見えてくると思います。



そして今回沖縄で学んだ平和の理念、戦争の痛みなどの知識を生かして、帰国してからより多くの人に伝えていきたいと思っています。以上が台湾組のご報告です。ご清聴ありがとうございました。

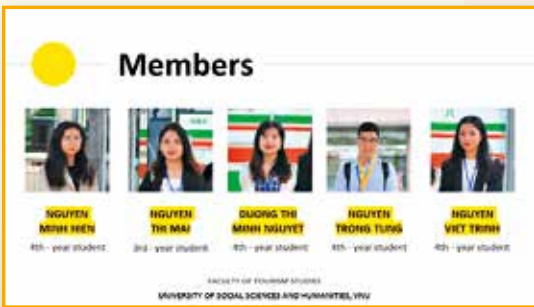


ベトナムチーム

「ベトナム戦争 平和への思い」



みなさん、ハイサイ。私たちはベトナム国家大学ハノイ人文社会科学大学観光学部の学生です。



まずは、メンバーを紹介いたします。



私たちのプレゼンテーションは、三つに分かれています。ベトナム戦争の簡単な説明、ベトナムの歴史の継承と発信の課題、そして、私たちの平和な世界への希望と、それを目指す具体的な行動の説明となります。



ベトナムは、侵略してくる外国と戦う長い歴史を持つ国です。1000年にわたり中国の植民地であり、100年以上フランスの植民地であり、そしてアメリカに対する21年の戦いがありました。本日は、現在のベトナムの統一をもたらしたアメリカとの戦いを中心に説明いたします。



ベトナム戦争は、1954年から1975年まで、ベトナム軍とアメリカ軍との間で行われた戦いです。

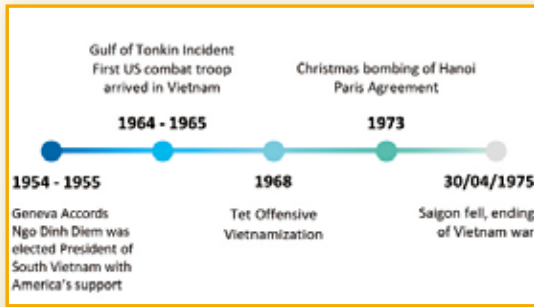
Background

- After World War II, the world was divided in 2 sides: Capitalism – America, Socialist – Soviet Union
- America ambitioned to fight against Communism and lead the world
- Vietnam prepared for the General Election to unite the country

背景としては、第二次世界大戦のあと世界はヤルタ協定による2つに分離されました。アメリカ主導の資本主義とソビエト連邦主導の社会主義です。



社会主義の拡大を防ぐのと、全世界を支配するのがアメリカの野望です。
ジュネーヴの協定の後、ベトナムは国を統一するために総選挙の準備をしました。それで戦争が起きました。



このスライドは、ベトナム戦争の歴史を簡単な時系列に示したものです。主な出来事や転換点を示します。



1954年7月、ジュネーヴ協定の後、ベトナムは南北2つの地域に分離され、アメリカはベトナム共和政府を設立して間接的に関与しました。



1964年のトンキン湾事件で、ベトナム海軍が国際水域でアメリカの船を攻撃したことがきっかけで、アメリカは1965年3月8日にベトナムに正式に軍隊を派遣しました。



1968年のテト（ベトナム旧正月）攻勢により、アメリカ大使館が一時占拠されました。この出来事がベトナム戦争最大の転機となりました。



その事件以降、アメリカは少しずつ戦いの役割を南ベトナム政府に任せました。



1972 年『ハノイ上空ディエン・ビエン・フー作戦』でベトナムが勝利しました。アメリカがパリ協定に署名して、戦争は終了しました。1975 年 4 月 30 日、アメリカ軍が完全に撤退して、ベトナムは統一されました。



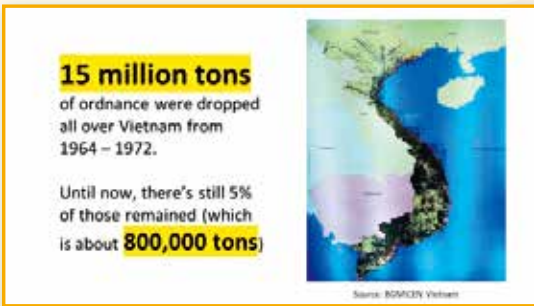
この戦争では、住民の生活は非常に悲惨でした。戦争の被害と苦しみを表すいくつかの画像を準備しました。こちらは避難している住民と休憩しているベトナム兵です。



これはナパーム爆撃を受けた子供、戦争で拷問を受けた人です。結果、ベトナムは勝って戦争は終了し、アメリカは敗戦の後、ベトナムから完全に撤退しました。



しかし、戦争の結果は非常に残酷です。ベトナム兵・住民合わせて約 300 万人が犠牲になりました。この戦争では、37 万人のアメリカ兵が死亡または負傷しました。



こちらは、地雷地図の写真です。黒い点はベトナムで導入された爆弾と地雷の密度を表したものです。推定 1500 万トンの爆弾が 1964 年から 72 年の間に投下されました。これまでのところ、約 5% が残ったままとなっています。



戦争の苦しみは現在も続いています。無名の死者、インフラ設備の破壊です。



ダイオキシンによる人身被害が最も深刻です。



ベトナムは多くの戦争を経験しており、多くのトラウマ的損害と苦しみを受けました。だからこそ、私たちは平和を尊重し幸せな時間を大切にしています。なぜなら戦争はいつでも起こる可能性があるからです。

Challenges

Lack of war materials



Traditional history teaching methods



ベトナム戦争は、ベトナムが体験した多くの戦争の一つです。歴史が複雑なため、ベトナムの歴史を継承、発信するために、次の課題に直面しました。まず外国からのデータの不足です。現在は主にベトナム国内からの資料しかないので、偏った評価が避けられません。教育方法は、あまり効果的ではありません。主に教科書のとおり覚えて、長い時間堅苦しい説明を受けるため、戦争経験者と話す機会が少ないです。

Challenges

Unpublicized historical truths



Lack of interest in history among younger generation



また、情報公開の制限があります。一部の歴史的事実は、外交関係上公開されていません。また、ベトナムの人々、特に若者は歴史の学習にあまり興味がありません。そういう時代なので、歴史と平和の重要性については、まだ認識していません。

3 OUR PLANS

To promoting and conveying history in Vietnam

次に平和な世界に向けた私たちの具体的な行動を説明します。

Volunteer in Tourism: peace ambassadors for Vietnam



観光専攻の大学生として、観光のボランティア活動に参加するつもりです。平和の大使になり、文化・歴史・平和の価値を国内外の観光客に伝えるつもりです。

Workshop



Source: <https://www.iphg.com.vn>

Students' workshop about peace in Vietnam

Source: <http://thoaiquocte.vn>

IPYG Youth Empowerment Peace Workshop

同時に、平和教育事業を計画しています。この事業は、ワークショップや絵画コンテスト、手紙や写真見学旅行を行う予定です。対象者は、中学生及び高校生、いわゆるベトナムの歴史について直接学んでいる人々です。

Contest



Source: <http://thoaiquocte.vn>

Drawing contest

Source: <http://thoaiquocte.vn>

Letter writing contest

Field Trip



Source: <http://thoaiquocte.vn>

Visit museum

Source: <http://thoaiquocte.vn>

Visit historical monuments

Our Plan



期間は2020年1月、または6月の休み期間で、生徒が課外活動に参加する十分な時間を取れる時を考えています。

Peace is the way for
sustainable development

14

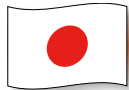
本日のシンポジウムに参加して、平和の理念を広げていこうと考えています。平和は持続可能な発展への道だと信じています。

Thank you
for listening

Any question?

最後までご清聴ありがとうございました。

Mentor: Pham Hong Long, PhD; Members: Nguyen Minh Hien, Nguyen Thi Mai, Duong Thi Minh Nguyen, Nguyen Trung Tung, Nguyen Van Thinh, Faculty of Tourism Studies, USST, VN



沖縄チーム

「沖縄戦の継承・発信」

沖縄戦の継承・発信 ～若者の沖縄戦に対する認知と課題～

新屋智己 喜城武彩花 平良真美 桑田ほのか 堀之内裕一

沖縄チームの発表を始めたいと思います。本日は、この5人で発表を進めていきたいと思っています。

～目次～

1. 沖縄戦の背景
2. 沖縄戦の歴史・実相
3. 継承・発信への課題と解決
4. これからの平和教育へのアイデア

私たちのプレゼンテーションは、最初に沖縄戦の背景を話します。その次に、沖縄戦の歴史や実相、次に平和の継承発信への課題と解決、最後に、これからの平和教育に対するアイデアを発表したいと思います。まず初めに、沖縄戦が起こった背景について説明したいと思います。

沖縄戦の背景

琉球処分
1872年 琉球王国→琉球藩設置
1879年 琉球藩から沖縄県に
同化政策 琉球文化の抑制
沖縄の人々に「日本国民」としての自覚を促した
「教育勅語」が学校に配布される

危急の事態が起こったならば
身を捧げて皇室国家に尽くせ。

1872年、明治政府は琉球を日本領とするために琉球処分というものを断行しました。72年には琉球藩を設置し、79年には武力を背景に琉球藩を廃止して沖縄県としました。明治政府は沖縄の人々に日本国民としての自覚を促すために同化政策というものを実施しました。その中で、1891年に教育勅語という、道德教育の根幹となった文書が各学校に配布されました。その内容は、危急の事態が起こったならば、身をささげて皇室国家のために尽くしなさい、というものでした。この教えが、のちの沖縄戦における数々の悲劇につながるようになります。

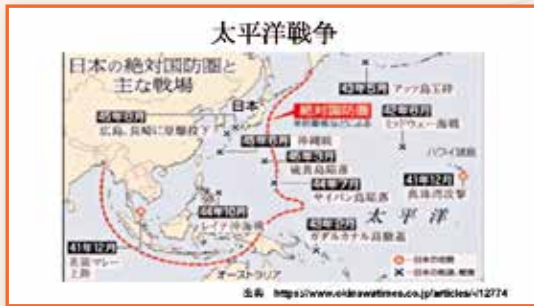
軍国主義と皇民化政策

軍国主義の高まり
↓
皇民化政策（皇国臣民である事を証明する政策）
・神社建設
・改姓改名
・方言札の導入

沖縄戦が進むに連れ、方言で話す事が
スパイ視されるようになり、深山の死者が出た。



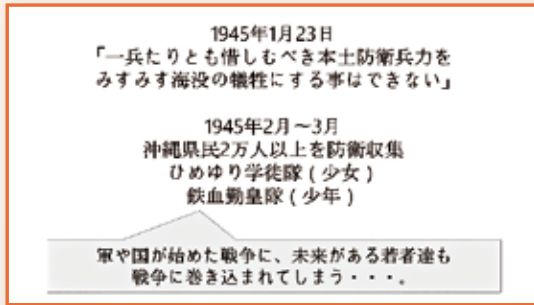
次に、軍国主義と皇民化政策について説明します。日本における軍国主義の高まりとともに、沖縄では、標準語の奨励や神社の建立といった皇民化政策というものが実施されました。方言を話すと方言札という札が首にかけられたり、沖縄戦がはじまると、方言を話すことによって同じ日本人でもスパイ視されて、日本軍に殺されるという事態も発生しました。こういった文化的な教育や政策も、沖縄県が戦争に突入していった理由の一つと言えます。



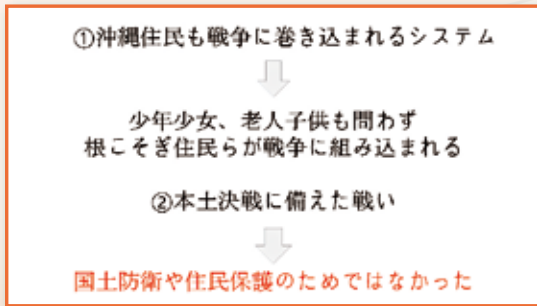
太平洋戦争時に、日本は絶対国防圏というのを決定して、それを守るために沖縄・台湾・上海にそれぞれ飛行場を建設します。しかし、日本国軍はサイパン島の戦いで大敗を喫してしまい、絶対的国防圏が崩れることになります。この時点で日本軍は防戦一方となり、日本の敗戦は時間の問題となることが確定してきました。次に、アメリカ軍は台湾、それから沖縄を占領することを目標とします。では、なぜ沖縄が選ばれたかという、台湾に対して沖縄は島の面積が小さいため、占領しやすく時間もかからないというのが主な理由です。



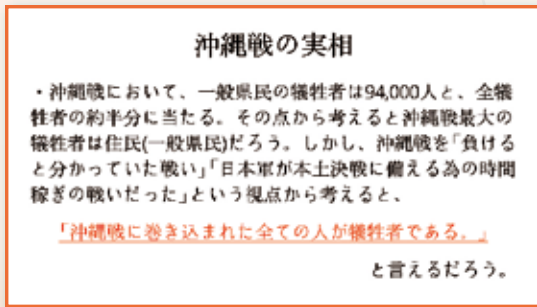
日米の動員数が示すものを考えていきます。アメリカは、当時の総兵力は沖縄の人口約45万人を上回る約55万人でした。艦船は、1500もありました。一方、日本はというと、総兵力は約10万人で、艦船は300から400しかありませんでした。総戦力を比べてみると、アメリカ10に対し日本は1で、約10倍以上の差がありました。実は、皆さんがよく目にする戦時中の写真ですが、主にアメリカ軍側から撮ったものが多くを占めています。当時、アメリカ軍は、沖縄上陸前には沖縄の地形や基地の場所をすでに把握していました。これらのことから、沖縄戦前には、すでに圧倒的な兵力の差ができていた、と言えます。ではなぜここまで兵力に差ができていたのかを見ていきます。



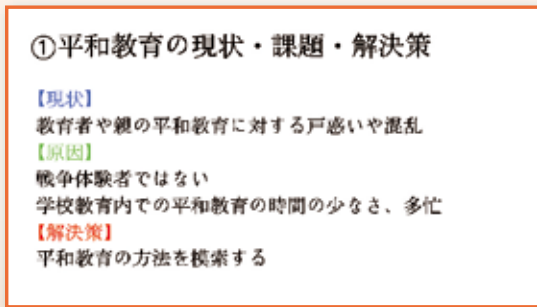
1945年1月23日、大本営が沖縄への陸軍第八十四師団派遣を中止します。宮崎周一中将はこう発言しています。「一兵たりとも惜しむべき本土防衛兵力をみすみす海没の犠牲にすることはできない。」このように、沖縄戦は本土決戦に備えることを前提としていました。次に、2月から3月にかけてですが、沖縄県民2万人以上を防衛招集します。訓練もほとんど受けず、身を守る武器も十分に支給されないまま素人同然の住民は戦場へ駆り出されてしまいます。こちらの戦死率ですが、約6割になっています。また、私たちのような学生も戦争に巻き込まれてしまいます。地元住民の少女少女も集められて、少女たちは専門的な知識があったわけでもなく、看護隊などとして過酷な戦場に送り込まれてしまいます。少年たちは、鉄血勤皇隊として戦車の切り込み攻撃などをさせられました。これらの学徒隊の戦死率ですが、約5割になっています。これらのことから二つのことが分かります。



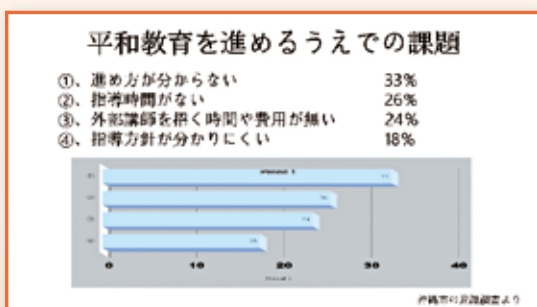
まず一つ目には、沖縄住民も戦争に巻き込まれるシステムがあったということです。飛行場や陣地づくりなどにも協力させられ、十分な訓練や武器もないまま戦場へ駆り出されました。このように少年少女、老人子供を問わず根こそぎ住民らが戦争に参加させられた結果、軍人よりも私たち住民の一般戦死者のほうが多くなりました。二つ目は、国土防衛や住民保護のためではなく、本土決戦に備えるための戦いだったということです。圧倒的な戦力の差がある中、できるだけ沖縄ではなく日本本土を守るための捨て石作戦による戦争でした。



これまでの内容を一度まとめます。沖縄戦において一般県民の犠牲者数は9万4千人、全犠牲者数の約半数にあたります。その点から考えると、沖縄戦最大の犠牲者は沖縄住民、一般県民であるというふうに言えると思います。しかし、これまでの内容を踏まえ、沖縄戦を負けるとわかっている戦い、日本軍が本土決戦に備えるための戦いという観点で考えると、日本軍、アメリカ軍、住民、巻き込まれたすべての人が犠牲者である、といえるのではないのでしょうか。



次に、私たち大学生が考える現在の平和教育に対する課題と解決策を五つほど挙げます。まず初めに、教育者や親の平和教育に対する混乱が挙げられます。原因としては、戦争体験者ではないことや学校教育内での平和教育の時間が少ないこと、多忙なことが挙げられます。私たちが考える解決策としては、改めて平和教育の方法を模索するという案が挙がりました。



こちらは沖縄市が教職員に対して行ったアンケートの結果です。この表を見て分かるように、やはり教職員は、平和教育に対する戸惑いや混乱があり、平和教育の在り方を改めて考える必要があることが分かります。

②平和教育の現状・課題・解決策

【現状】
若者の戦争への知識、興味関心の薄さ

【原因】
今の生活に対する不満や危機感があまり無い
戦争勃発の危機感が無く他人事のような扱い（平和ボケ）

【解決策】
二度と戦争を繰り返さない為に戦争が起こる仕組みについて知る
座学だけでなくゲームやロールプレイを使い、興味関心を持たず教育を取り入れる

二つ目に、若者の戦争への知識、興味関心の薄さが挙げられます。今の生活に対する不安や危機感があまりないという点と、戦争勃発の危機感がなく、他人事のような扱いが原因とされています。私たちが考える解決策としては、二度と戦争を繰り返さないために戦争の起こる仕組みについて知るという点と、座学だけではなく、ゲームやロールプレイを使い、興味関心を持たせる教育を取り入れるという案が挙げられました。

③平和教育の現状・課題・解決策

【現状】
戦争体験者の高齢化（沖縄戦体験者は沖縄県人口の1割程）

【原因】
戦争が起こって70年以上経っている

【解決策】
今のうちに戦争体験者から話を聞いたりする、聞くだけでなく質問する
彼らの証言は重要、貴重なので記録として残す（書籍やDVD化し、後世に残す取り組みをする）

三つ目に、戦争体験者の高齢化が挙げられます。実際に、現在では沖縄戦体験者は沖縄県人口の1割程度だといわれています。原因としては、やはり戦争が起こって70年以上経っているという点があります。私たちが考える解決策としましては、いまのうちに戦争体験者から話を聞いたり、聞くだけではなく質問もする、彼らの証言は重要貴重なので記録して残す、という案が挙げられました。

④平和教育の現状・課題・解決策

【現状】
座学中心の平和教育、イベント化、環境、資料は整っているのに活用できていない

【原因】
マニュアルのままの従来の平和教育方法

【解決策】
課外授業やロールプレイ、参加型学習を通して学ぶ

四つ目としては、座学中心の平和教育のイベント化、環境・資料が整っているのに活用できていないという現状があります。やはりマニュアルのままの従来の平和教育が原因だと考えられます。私たちが考える解決策としては、課外授業やロールプレイ、参加型を通して学ぶという案が挙げられました。

⑤平和教育の現状・課題・解決策

【現状】
平和の大切さよりも戦争の悲惨さを重視した教育方法

【原因】
マニュアルに囚われた教育方法

【解決策】
戦争の脅威を知るだけでなく平和とは何か？戦前や戦争の背景を教える、考える
戦争の全体像を見るために戦争被害だけではなく戦争加害について教える、考える
東アジアや南洋諸島などにおいて現地の住民に日本軍が行った「加害」の歴史にもフォーカスした歴史教育を行う、学ぶ

最後に、平和の大切さよりも戦争の悲惨さを重視した平和教育方法が現状としてあります。こちらの原因としては、マニュアルにとらわれた教育方法だと考えています。私たちが考える解決策としては、戦争の脅威を知るだけではなく、平和とは何か、戦前や戦争の背景を教える・考える、戦争の全体像を見るために戦争被害だけではなく、戦争加害について教える・考える、東アジアや南洋諸島などにおいて現地の住民に日本軍が行った加害の歴史にもフォーカスした歴史教育を行い学ぶという案が挙げられました。

①～⑤の課題を踏まえて、
現在の平和教育と平行して他人事に捉える事が無く、
戦争という存在を自分事として捉えるための
『新しく興味関心が湧くような参加型学習方法』
を用いる事を提案します。

次に、私たち学生が考えるこれからの平和教育への提案をさせていただきます。
これまでの平和教育というのは、戦争の悲惨さなどにフォーカスしたものであるがゆえに、戦争というものに少し遠いものを感じてしまう、という現状があるというふうに認識しています。
戦争というものがどのように起こるのかという戦争が起こる仕組みを知るということが興味関心を持たせることの根源になると思います、このようなものを考えてみました。参加型学習方法と呼びます。

太平洋戦争編（中高生向けのロールプレイの例）

1、まずは役割カードを使い、学習者を

①植民地主義国（日本）
②軍事力、経済力共に潤沢な大国（アメリカ）
③軍事力は乏しいものの資源を豊富に持つ国（資源国）
④大国②と協力し合っている大国（イギリスやフランス）
の4者に分ける。

我々は太平洋戦争沖縄戦について扱っておりますので、今回は太平洋戦争を例にしてご紹介したいと思っております。
まず、学習者を4人1組のグループに分けて、植民地主義国という役割の人間を一人、配置します。こちらが太平洋戦争時における日本の立ち位置になります。

2番目の役割が資源、経済力、軍事力ともに潤沢な大国、こちらが太平洋戦争時におけるアメリカです。
3つめが軍事力は乏しいものの資源をいっぱい持っている国、これが太平洋戦争時における南洋諸島や先ほど絶対国防圏の圏内にあった国々のことになります。
4つめが二つ目の大国アメリカと友好的な関係を持ち、協力しあっている国になります。こちらが太平洋戦争時における連合国側です。イギリスやフランス、そういった国になります。このように4人1組に分かれて、役割をそれぞれ理解してもらいます。

太平洋戦争編（中高生向けのロールプレイの例）

2. ①に資源が枯渇している事を伝え、次の行動を考えさせる。

→①は資源が欲しいため②を攻める。

3. ①の行動を元に②と③にどう行動するか考えさせる。

→②は①の行動をやめるよう働きかける、もしくは制圧する。

④は②と協力し合っている③に加盟する。

～太平洋戦争勃発～ という流れの元

戦争の起こる仕組みを身をもって知ってもらう。

まず1番の国役の人に、「どうですか、あなたの国は今資源が枯渇していますよ」と伝えて次の行動を考えてもらいます。おそらく、植民地主義国は、軍事力は持っていないけど資源はいっぱい持っている3の国を攻撃するでしょう。そうすると、その様子を隣で見ている大国に、「どうする、1の国は3の国にこんなことをしているよ、どうですか」というふうに行動を考えさせます。すると、3の国に

対して攻撃をしている1の国の行動を止めさせる、もしくは攻撃をする、という選択をすると思われ

最後に、2の友好国である4に対しては「どうする、あなたと仲がいい2の国が1の国に対してこんなことをしているよ」というふうに伝えて、こちらの行動を考えさせます。すると協力関係にありますので、おそらく4の国は2の国と協力して1の国のやっていることを止めさせると思います。このように、主体的に考えてもらい、行動を学習者に決めてもらいます。非常にシンスルにしたのでわかりにくかったかもしれませんが、今の流れが太平洋戦争の流れになります。

こう伝えと、身をもって自分の役割を演じたのですから、それぞれの役者が考えて行動した結果が戦争に繋がった、ということを疑似的に体験できます。そして、今現在平和に見える日本でもいつ戦争が起きてもおかしくない、といういい危機感を学習者に持たせることができると考えております。

結びにかえて

只今のはあくまで例になります。

しかし「戦争の仕組み」を身をもって体験し、

自らが主体的に考え行動した結果が戦争に繋がるということを

疑似的に経験する事で、

「平和に見える日本においてもいつ戦争が起こるか分からない」

という危機感を学習者に持たせられると我々を感じます。

こちらのロールフレイは、あくまで研修期間中に考えた例なので、だいふ至らない点があるというのは私たちも理解しています。ただ、こういった役割を持って戦争が起こる仕組みっていうものを考えるという学習方法は、学校機関だけでなく、ご家庭や友人同士でもできることではないかな、と思っていますので、是非、私達の提案を活用していただけたらな、と考えております。

ご静聴ありがとうございました。

Thank you for your listening.

③ パネルディスカッション

コーディネーター	沖縄キリスト教学院大学 教授 新垣 誠
テーマ	戦争などの悲惨な体験から得た普遍的な教訓とは何か。我々は教訓の次代への継承・平和のため何ができるか。
パネリスト	各国参加者



新垣先生

ハイサイ、グスーヨー、チューウガナビラ。沖縄の言葉であいさつさせていただきましたが、これだけ色々な地域から人が来られますと、つい沖縄の言葉でしゃべりたくなってしまいます。実は一昨日、皆さんと一緒にワークショップをさせていただきました。今日は国別のプレゼンテーションでしたが、二日前はみんないろいろな国が入り混じったチームになって、和気あいあいと非常に楽しいディスカッションをし、楽しい時間を持たせていただきました。今回、この沖縄から平和の発信、そしていろいろなアジアの地域とも交流ができて、自分もそれに参加できて非常に楽しかったなあと思います。今日も皆さんのプレゼンテーションを聞かせていただきましたが、そのことに関してもいろいろお話を聴いて見たいと思います。

最初に、カンボジアの皆さん。私もカンボジアには何度も足を運びましたが、現地の NGO 関連の友達にツール・スレン虐殺博



物館に行きたいと言ったら、「なにそれ？」と言われました。キリングフィールドも知らなかったようで、実際一緒に行ってみると、そこでまたショックを受けていました。先ほどにもあったように、なかなか現地の若い世代の中で歴史が共有されていないというのがわかりました。沖縄も歴史の継承というのは非常に苦労していますが、カンボジアでも大変なんだなというのを身をもって感じたことがありました。

今回、皆さんクメールルージュの歴史、大虐殺の歴史のプレゼンテーションをされましたが、こういう歴史を、みなさん自体どういう教訓を得たかというか、この先何をしていけばいいというか、この内戦から感じさせられて、そうしてこう報道しないといけないと思うことはありますでしょうか。先ほど皆さんがおっしゃったとおり、これはカンボジア国内の話ですよ。ほかの国との戦争ではない。自分たちの国の政府によって行われた虐殺という歴史の事実を見る場合、ここから皆さんが得る教訓っていったいなんですか？

カンボジア

クメールルージュの歴史をきちんと勉強して知る



ことによって悪い歴史を捨てます。いい歴史があれば、私たちはそれを習得することができます。ポル・ポト政権は凄惨な大虐殺をやってしまいましたので、これをしっかり勉強して、次の世代、あるいはこれを教訓にして二度と繰り返さないようにして、私たち若者として宣言したいと思っています。

新垣先生

ありがとうございます。これは、隣の済州島からいらっしゃったチームの皆さんもある意味ちょっと似ているというか、国内で起きた4.3事件ですよね。これは相手というか韓国政府によって行われた、ということですが、この件に関していかがですか。そこから得られる教訓というのは、どのようなものがあると思いますか？

韓国

たしかに、国内で起きた事件ではあると思いますが、カンボジアのポル・ポト政権による大虐殺にしても済州島における4.3事件に関しても、国内で起きた虐殺事件であるということに間違いはないんです。ただ、国内問題だけで考えてしまうと、その事件の全容が見えてこないのかな、ということを考えています。済州島4.3事件においては、アメリカとソ連が介入してきたということもあります。

新垣先生

すごく複雑な歴史的背景がありますよね。でも同じ民族のなかで起きた事件として、外国との、もちろん対日本とか、そのいろんな戦争・紛争という歴史を抱えながらの話ですけれども、太平洋戦争時から考えると、この4.3事件というのを韓国政府といわゆる済州島の人々という構図が、カンボジアの政府と一般の人々とちょっと似通っている気がするんですが、その件に関して済州島の人達はそこから教訓を学んだりとか、その事件に関して、どういう風にそれが国内で起きた同じ民族の中で起きたってことで感じていますか？

韓国

ハイサイ。おっしゃったとおり、韓国政府と済州島民の間で起きた事件ですけれども、大きな東アジアの

冷戦構造の中で行われた事件、という面も考えたいと思います。それで今日まで依然として、米国そして李承晩政権からの謝罪は、済州島民たちにはまだ行われていない状態です。もちろん、最近民主政権で選ばれた大統領が済州島民に対してお詫びをしましたが、その当時どんな事件が行われたのか、具体的な真相真実はまだ明らかにされていない状況です。さきほどパワーポイントで私達がこの研修期間中に平和の礎に行って、平和の礎に刻まれた名前、あるいはまだ名前が刻印されていない部分を洗う動画がありましたが、済州島も国家の論理あるいは歴史の解釈によって、まだ表面化されていない人物や事実が存在しております。イデオロギーの対立、また解釈をめぐる葛藤が依然として行われているので、こういう対立構造をどういう風に私たちの世代が乗り越えるのか悩んでおります。

新垣先生

なるほど、ありがとうございます。まだそういう歴史に対して恨（ハン）の気持ちを持たれている島民の方も結構いるのかなと、お話を伺って感じました。済州島の中で、やはりその済州島民としてその気持ちが強い、アイデンティティが強い人たちというのはいらっしゃいますか？ 歴史の中でまだ明らかにされていないとか解決されていないことがある中で、済州島にいてユニークな歴史があったからこそ、そのいわゆる済州島の人としてアイデンティティを持っているという側面もありますか？

韓国

済州島は今大韓民国に編入、所属していますが、沖縄の琉球と同様にもっと昔の話ですがタンラ王国、という独自の国だった歴史があります。独自性、さっきおっしゃったユニークな面は朝鮮半島より逆に琉球やほかのアジアの国々との共通点を探して、そこからまた新たな済州のユニークな面、済州の独特な面があるのではないかと取り組んでいる最中です。



新垣先生

ありがとうございます。隣の台湾チームにも伺いますが、2.28事件ですが、もう台湾と中国は違う国ですが、やはりあの時代のいろんな動乱の中で今の台湾があり、その台湾の中では自分は台湾人だという気持ちを持っている人たちも、強いわけですね。いわゆる2.28事件とどういう風に今の台湾の人々の気持ちは関係していますか。

台湾

個人的な意見ですが、私はこの2.28事件を勉強する際に感じたのは、やはりその当時の時代において人はそれぞれの思いを持っていて、それで自分の思っていることは正しい、としか思っていなかったと思いました。その正しい思いと色んな正しい思いがあって、それがぶつかってこういう2.28事件が起きたのではないかなと思いました。そのような流れで今台湾において様々なアイデンティティがあります。例えば、私は台湾人です。で、もう一つは私は台湾人でもあり中国人でもあります。もう一つは私は中国人です、と大きく分けるとこういう三つのアイデンティティがありますが、私たちはこういうアイデンティティをどのように受け入れていくのかという点は、とても大事じゃないかなと思っており、2.28事件を基にこのような重要性を感じました。



新垣先生

なるほど、ありがとうございます。皆さんのフレゼンテーションの中で映画のフレビューがありました、Detentionは非常にホラーで、しかもゲームを基に作られたというもので、おそらく若い世代の人達にも非常に興味を引くものだと思います。皆さんがフレゼンテーションのなかでおっしゃった「過去から見ることで現在、そして未来が見えてくる」という言葉がありますが、あの2.28事件の映画から見えてくる台湾の未来って何ですか？ 非常に難しい質問を投げてしまいました。

台湾

そうですね、自分の勉強不足もありますが、やはり先ほど申し上げたアイデンティティの問題が、これから台湾の行方に関連しているのではないかと思います。例えば、台湾人のアイデンティティは、常に選挙につながって変わったりします。例えば前政権、馬英九政権においては台湾人という意識、つまり台湾として国を盛り上げる、という意識が政権後期においてとても急速に盛り上がったという現象がありました。今の蔡英文政権においては、その傾向は少しずつおさまりつつあります。しかるに、どうやってこれらのアイデンティティを一つにまとめてこの国際社会に示すのかは重要じゃないかな、と思いました。

新垣先生

そうですね、その中でも平和を作っていくかといけないという課題があるということですね。ありがとうございます。

ベトナムの皆さんの話をお伺いしました。一つはですね、ベトナム戦争というのは本当に世界が知っている通りに、人類史上300万人の方が亡くなったという話をされていましたが、まあ悲惨な戦争だったわけですが、ここでも皆さんの言葉の中に「戦争はいつでも起きる可能性がある」ということをおっしゃっていました。皆さんはベトナム戦争のことを調べ、そして勉強し、そしてそれを見たうえであの戦争、あの悲惨な戦争がもう一度起こるかもしれないという危機感を今持っていますか？

ベトナム

今日の平和のために、非常に悲惨な戦争の真相を聴いて見て勉強しました。今の平和のために犠牲になった人々のことを思うと、悲しい思いをするのは確かです。先生からの質問は、そのような戦争がもう一度起こる心配があるかどうかというものでしたが、もちろん、もう一度起きるかもと恐れており、いまでも怖いんです。ですので、今の平和をととても大切にしています。どうやってその怖い思いを乗り越えるのかも大切だと思います。よりもっと勉強を頑張って、自分の国を守るのと世界と交流して自分の国を守りたいと思います。

新垣先生

ありがとうございます。歴史と平和の重要性を若い人たちに伝えていく、という話をされていましたが、どうやればその無関心を克服できると思いますか？

ベトナム

若者の歴史に対しての無関心についての対策の方法としては、まず先ほど沖縄チームが上げたゲームとか、台湾チームが上げた映画など、教科書だけではなく、そういう方法で若者に伝えれば一番いいと思います。もう一つは、若者自体も変わらないといけないと思います。もっとこういうプログラムに参加して、身をもって自分の勉強したことを周りに伝えていくことが大事なかなと思います。



新垣先生

プレゼンテーションの中でいろいろな、これから先のお話がありましたが、今おっしゃったように、沖縄に来て感じたことや、いわゆる平和を伝えていくうえで、この地に來たからこそ感じたことはありますか？ ベトナムチームの皆さんに伺います。

ベトナム

まず沖縄に来て感じたのは、沖縄の方々は人の命をととても大事にしています。辛い戦争の経験をしたからこそ生命の大切さをよく分かるのだと思います。あとは、皆さんの歴史の伝え方はとても平和的で、恨みなどは一切なくて戦争で亡くなった、被害にあったすべての命を大事にしていることも感じました。個人的に、皆様がお互いに平和を伝えることで、お互いに大事にされていることに敬意を表します。

新垣先生

ありがとうございます。同じ質問をもう一度カンボジアチームの皆さんにお伺いします。ポル・ポト政権の大虐殺という、いわゆるベトナムチームのように、非常に大きなトラウマになるような歴史的事件を経験したわけですが、そういう経験を持って沖縄の地に来て、そしてこの沖縄の地でこの10日間を通して感じたことはありますか？

カンボジア

カンボジアも同じ悲惨な被害を受けました。私が

沖縄に来て感じるのはみんな平和のことを非常に大事にしているということです。どこに行っても見ても「平和、平和、平和大好き。」そういう風に感じます。平和が好きだけじゃなくて、これからも平和について発信していこうとする役割も感じます。私たちも沖縄のようになりたいです。ベトナムの方もさっき述べたように、誰も恨まない、それはカンボジア人もそうです。というのは、カンボジア国内では加害者も被害者もみんな全部被害を受けています。だからもう和解するためには恨まない、そして平和を大事にします。

新垣先生

ありがとうございます。韓国の皆さんにちょっとお伺いしたいです。非常に感動的というかとても、こう、心に来る言葉でプレゼンテーションを締めくくられていました。「平和は道である」という。非常に素晴らしいと感じました。その中で、様々な国境・境界線を超えていくという話をされていました。国境だとか民族だとか、さまざまなものを超えていく、と。ここで伺いたいのは、超える方法です。この道をどうやって歩いていかれようこれから考えているのか。様々な民族の壁、国境があります。今の東アジアの情勢を見ても、例えば日本と韓国の外交関係を見ても、非常にその壁が高いと感じさせられるようなニュースが飛び交う中で、皆さんはそれをどうやれば超えていけるとお考えですか？

韓国

研修に参加して、いろんな国、地域、また民族、私たちと背景が異なる友達と一緒に研修を受けながら言葉の壁、言葉ももちろん通じないし、考え方も違う、ということを理解しました。でも、共通しているのは、みんな聞く様子、姿勢を感じました。済州の悲惨な歴史を聴くために朝鮮半島、済州の人は陸地と言っていますが、陸地から多くの人々が済州に来て、聞く機会を現在でもたくさん設けています。これと同様に私たちも、さっきの壁を乗り越える方法ですが、直接他者の世界に行き訪ねて聞く、そういう行動をとる必要があるのではないかと考えております。例えば、台湾で2.28事件や、ベトナム、カンボジア、沖縄を訪れることもそうです。過去に人口がアジア全体で再編された歴史があります。そして、その人口や人の移動の歴史を研究しながらもう一度たどっていく。この行為自体が、壁を乗り越える一つの方法ではないかと考えております。

新垣先生

ありがとうございます、素晴らしいお答えでした。非常に希望を感じさせる答えでした。ありがとうございます。沖縄チームを含めながら考えたいと思います。非常によかったのは何かというと、太平洋戦争、アジアへの加害の話が出てきたということで、それはすごいなぁと思いました。ただ一つだけちょっと気になったことが、沖縄戦に関して日本軍・米軍・住民すべて全員犠牲者であるという表現が出てきました。ここでちょっと爆弾的な質問をしますが、韓国の皆さんどう感じましたか教えてください。

韓国

戦争という状況の中で誰もが戦争したくないものだと思うし、行きたくないものだとは思いますが、その中でどうしようもない状況の中で、例えば、日本軍の場合は、軍国主義的な教育を受け続けて結局追い詰められたときに自ら命を落としてしまうのだとか、そういう面では、犠牲だと思ってしまうこともあると思います。ただ、日本軍・アメリカ軍・沖縄住民全部が犠牲者だとひとくくりにしてしまうと、実際の戦争の中であった殺しあったり殺されたり、あとは住民の中で殺しあったりとか、そういった様子を横で見ていた人だとか、告発した人だとか、そういう戦争の中で起きる様々な様相というのが一面化されてしまうのは注意しなければいけない点だと感じました。

新垣先生

自分も全く同じことを感じました。韓国チームの中に恨（ハン）の碑の話だとか韓国人軍夫の話、従軍慰安婦の話というのが出てきました。この沖縄戦の地上戦の中で、そういう人たちの話というのはやはりその中に一緒に同時に語られないといけないという問題意識からおそらく韓国チームのプレゼンはあったと思います。おっしゃるように、戦争というものの、である意味すべては犠牲者なのかもしれないけど、その中のまたいろんな関係性というものを丁寧に見ていく見方が必要だなというのを、今のお話を聞いて、全くその通りだと思いました。自分は思いますが、そういう中に埋もれさせるのではなくて、その中にあった様々な暴力の関係性、これは別に犯人探しとか誰が一番悪いとかそういう話ではなくて、

いかにその関係性の中でどういう暴力が振るわれたかをちゃんと考えないといけない。それはなぜかというと、よくある話で「二度と繰り返しません過ちは」という表現があります。自分がいつも感じるのは「誰の過ちですか？」ということです。誰が犯した過ちかということを追及しなければ、二度と繰り返しませんとは言えないのではないかなと思うんですよね。そういう意味でもう一度沖縄チームにお伺いします。加害者という部分の意識で、やはり、自分たちが被害者でもあり加害者でもあると言われました。先ほど最後に見せてくれた参加型のワークショップがありましたが、どういう風に加害というのを考えていくのかな、というのを伺いたいです。

沖縄

私たちの発表のスライドにございました、沖縄戦に巻き込まれたすべての人が犠牲者である、という言葉に関することですが、こちらはいろんな捉え方、この言葉に対して、いろんな捉え方があると思います。私の考える犠牲者は、軍国教育の犠牲者だと思っています。日本の軍国教育の犠牲者が、米軍・日本軍・住民、そういった沖縄戦に関わったすべての人達だよ、ということが言いたかったです。何故か申しますと、軍国教育、国のために死ななければならぬ、というそういう教育がなかったら死ななくてもよかった人はたくさんいたと思います。先ほどのご質問の意図と申しますか、沖縄戦で米軍・日本軍・住民以外にも朝鮮半島から強制的に連れてこられた方々がいた、そういった方々のことは考えていらっしゃいますか、という質問ですよ。

一応、しっかり認識もしているつもりではあります。発表が言葉足らずだったのかなぁという風にも思っております。また、反省点といたしましては、プレゼンテーションの中にそういった方もいらっしまったというスライドを加えとくべきであったのかなぁ、という風にも感じております。



新垣先生

ここで謝罪会見をさせるつもりはなかったのですが、責めているわけではありません。でもその通りだと思います。自分が聞きたいのは何かというと、軍国主義・軍国教育のせいだということですが、問題はその軍国教育がなぜ起きたか、なんですよ。つまり、その軍国教育をやったのが日本政府だと、あの頃の日本帝国主義の間違った。自分たちは犠牲者と言ってしまった時に、今後の日本を考える時に皆さん日本を背負っていく若者として、「あれは軍国主義・軍国教育のせいだ」と言いきってしまうっていうことが、ということなのかということを考えてほしいということです。つまり、それを国が施すのを許してしまったのはいったい誰なのか。

沖縄

たぶんこの加害を知るということを私たちも言っていますが、正直、私たちが受けてきた教育の中で入ってなかった。今まで平和教育を受けてきた中で、被害という部分しか教えてもらっておらず、スライドにも書いた通り、加害を知ると書いているけど、分からないのが現状です。なので、この日本政府から自分たちもされたっていうこと、日本という国がやったことですけど、それを被害として捉えていることに対して、ちょっと違うのかなって思います。なので、やっぱり若者がそう勘違いしている部分もあるので、先ほど提案した通り、教育という面で加害という面をしっかりフォーカスして入れていかないと、再度戦争が起きると思います。文字にはしていますが、正直、自分たちも分かっていないのが現状です。

新垣先生

おそらくまた、誰かのせいにしてしまうということですよ。それで最後に、すみません、謝ります。これは私たち世代の過失です。みなさんに、その辺のところをちゃんと教育を通して施さなかった私たち大人の世代の責任、ということをお話を聞いて、その通りだと思います。こういう風にして、自分たちの責任というものをしっかりと感じていくということ、いろんな地域から集まって、その中で話をする、先ほどもありましたけど、人の話を聞くという話がありました。それは非常に重要な機会ですよ。いろんなバックグラウンドや事情を抱えてここにいると思いますが、今後、若い人たちに期待して、この友情がこの先もずっと続いてほしいです。皆さんの中でともに平和というものが築かれるよう

願いつつ、自分もこうやって責めている場合じゃないと、襟を正してしっかりと教育しよう、と思いました。

それでは、フロアの方々いかがですか、今回参加なさっている方に何かご質問などありますでしょうか。

フロア

私は、沖縄県平和祈念資料館友の会の会員であります。私もちょうど戦争時に生まれて幼いころに戦争体験をして、今各学校いろんな方々に沖縄戦の語り部として活動しております。先ほどから、沖縄では平和教育というか、みんな平和だ平和だ、と非常に取り組みがいいという話を聞きまして、それはうれしいことではありますが、しかし私たちから言いますと、体験者もほとんど高齢化しまして、皆さんに語る人たちも少なくなりました。それで、学校の先生方も戦争を知りません。そういう中でも、やっぱり沖縄は6月23日の慰霊の日、それを中心としまして、平和教育の取り組みを各学校でやってはいます。しかし、実際に学校のカリキュラムの中で取り組んで計画的にやれるかとなると難しい面もありますね。そういうところで、これからやはりこの皆さんよりもっと幼い子供たちに語りを継承していくためには、やはりそのあたりをもっと強化しながらやっていかんといかんかな、という思いがありますね。今5ヶ国そろっていますけれども、非常にいい感じで皆さんが交流できているなと思います。皆さんのところでの平和教育というのを各学校でどういう取り組みをやっているかをお伺いしたいのです。

**新垣先生**

ありがとうございます。カンボジアチームの方からお伺いしたいと思いますがいかがですか。今現在のカンボジア国内で行われている平和教育の取り組み、どういうものがありますか？

カンボジア

カンボジアでは、学校の中に平和教育はありません。カンボジア政府による「みんな平和は大事にしましょう」という言葉くらいはありますが、教育の中には、カリキュラムの中には入れていません。

新垣先生

では、これから頑張っていかなければいけない、ということですね。是非、ここにいらっしゃる皆さんが中心となって、カンボジアに平和教育をもたらしてほしいと思います。韓国はいかがですか。

韓国

済州の場合は、4月3日の前後に「4.3の週間」という期間というのを設定して、学校の教育現場の中にコンテストや記念公園に行って、平和教育を実施します。このような活動を4月3日を中心に実施しています。

新垣先生

ありがとうございます。では台湾チーム、いかがですか。

台湾

小学校で歴史を学んでいます。やっぱり、平和教育は学生だけではなく、ほかの年齢の方々も受けるほうがいいと思います。だからここでは、さっきも私たちが言った通り、マルチメディアを使ってもっと発信します。例えば、現在台湾では映画とか小説、特にこの中に台湾人が書いた小説やドラマ、さらにその時中国から来た中国人も書いてある小説あるいはドラマを様々な視点から見る。例えば、2.28事件は、現在私たちもこういう平和教育を受けています。

新垣先生

ありがとうございます。ではベトナムチームの皆さんお伺いします。

ベトナム

ベトナムでは年齢によって平和の伝え方が異なり、あまり平和について認識していない若者には、まず平和とは何かという質問を投げかけます。そして、いろんな活動を通して、絵をかいったり手紙や詩を書いたり、そして平和に関する歌もたくさんあります。学校で勉強したこと以外に、資料館とか戦争が起きた現場を見学するようなツアーにも参加できます。

先ほど発表の中も話しましたが、実は学校で行われた現場への見学とか資料館とかの見学はあるんですが、伝えることは主に歴史だけであって、平和の気持ちについてはまだ不十分です。今回沖縄で勉強したものに基づいて、今後自分たちの事業を通してそういう経験を生かして、「歴史+平和」の大切さも教えたいと思います。

新垣先生

ありがとうございます。最後に沖縄チームの方から今までの平和教育を見直して、これからどういう平和教育にしたいか、一言をお願いします。

沖縄

今まで沖縄で受けてきた平和教育は、やはり6月23日が中心になっています。戦争の残酷な写真を見て、戦争体験者のお話を聞くというのが中心で、それで毎年毎年そこまでのステップしか行かないというか、ただ「戦争って悲惨だよ、起したくないよね」という話までしか溜まっていなかった気がします。意見としては、起きたこと以外にも、加害者側の視点とか、もっといろんな方向から考えられるようにしていけばいいのではないかと思います。でも、ただ、すごく小さな小学生が考えるには大変な部分もあると思うので、方法としては、もうちょっと簡単な取り組みやすい方法があればいいと思っています。

新垣先生

ありがとうございます。この10日間この重い、重いテーマをずーっと考え続けて皆さんは疲労困憊だと思います。10日間頑張ってきたこの若い皆さんに大きな拍手を送って、これからのエールとしてどうか応援してください。ありがとうございます。みなさんお疲れさまでした。

4 共同宣言

この事業で、各国・地域の学生は平和への発信や歴史の継承について沖縄で共に語り、学びあった。平和な社会を創るためには、自分たちの国、場所の事だけでなく、広くネットワークを広げ、平和を発信する必要があると考えた。そのことを参加者全員の共同宣言として発表した。



私達、カンボジア、韓国、台湾、ベトナム、沖縄の人は過去に悲惨な体験をしました。戦争はいつでも起こりうることです。だから私達は過去の悲劇を二度と繰り返さない為、歴史を学び、そこから得た教訓を次の世代へ継承し続けます。

そして、国や民族、宗教の壁を越えて、多様性のある社会の中で互いに敬意を持ち、信頼と友情を育み、世界平和への架け橋となるよう努めます。

参加者代表お礼の挨拶（新垣響己）

まず、この事業に参加させていただき本当にありがとうございます。自分自身にとってもとてもいい経験になったと思います。今日でもう事業は終わりですけれども、ここで得た経験を基に、これからもっと平和になるためにはどうするべきか、というのをずっとずっと考えてこれから生きて行きたいと思います。そしてご来場いただいた会場の皆さん、本当にありがとうございました。



第2部

「平和への思い（ウムイ）」 発信・交流・継承事業 成果報告

第4章

研修後の平和発信活動 への取り組み

1 韓国



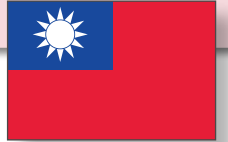
済州大学校 「平和への思い」発信・交流・継承事業 帰国後研修報告会

令和元年度「平和への思い」発信・交流・継承事業に参加した学生によって、合同宿泊研修の帰国後報告会が行われた。この報告会では、この研修を通して学んだことについて引率教授と参加学生による成果報告があり、その後「平和への思い」についてのディスカッションが行われた。

この報告会は、2019年10月31日の18:30から21:00まで済州大学校で行われ、約10人の出席者が集まった。



2 台湾



国立政治大学 日本研究プログラム

「平和への思い」発信・交流・継承事業 帰国後発表会に関する報告書

I ワークショップについて

令和元年10月に実施された「平和への思い」発信・交流・継承事業について、沖縄県での合同宿泊研修を通して学んだことを、研修参加者の孫雷が発表した。特に、沖縄の歴史、沖縄戦、そしてひめゆり学徒隊についての内容を中心に発表した。

さらに、こういった歴史をきちんと踏まえたいと、これからも平和の重要性をアピールしていく必要について語った。その中で、合同宿泊研修に参加した学生たちが現地で発表した。インターネットを駆使したネットワーク構築など、若者ならではの新しい宣伝方法についても述べた。

この帰国後発表は、2019年10月30日の11:00から12:00まで、台湾国立政治大学総合院館北棟271111教室で行われた。

II コメント

発表の後、発表会の進行役を務めていただいた国立政治大学日本研究プログラムの石原先生からコメントをいただいた。

先生は、今の台湾人の若者世代は戦争のない社会で生まれ育ち、戦争への恐怖心が戦争経験者より遥かに少ないと思われる、と語った。台湾史における2.28事件であれ、日本史における第二次世界大戦・沖縄戦であれ、このような歴史の再発を防ぐためにどのように努力すればよいか、というのが今回の研修を通して参加者たちにまさに考えてほしかったことだった、とも話された。



台湾チームは帰国後すぐに、所属大学のホームページに沖縄での研修の様子を掲載した。

日付：2019年10月22日 部門：日学博

【日本研究学位プログラムニュース】

先日、本校日本研究学位プログラムの李世暉教授は、沖縄平和協力センター(OPAC)の招待を受け、日本研究学位プログラムの学生5名を引き連れて沖縄を訪れ、同センターが主催する令和元年海外合同宿泊研修「平和への思い」に参加した。参加者は、10日間にわたるカリキュラムを通し、日本・韓国・ベトナム・カンボジア等、5か国の青年たちと共に平和について学び、話し合いを重ねた。本校教授および学生は、研修中の優れた成果が評価され、NHKや琉球新報といった日本メディアからのインタビューを受け、海外における本校の知名度向上にも貢献した。

今回の研修イベントは、「沖縄各地の戦跡を辿る」、「各国における悲しい歴史の紹介と省察」、「平和の大切さを若い世代へと伝承する上での問題と考察」という3つのテーマが主軸であった。政治大学日本研究学位プログラムの学生からなる台湾代表団は、「2.28事件」をテーマに現在の台湾の平和教育と歴史的記憶の伝承における努力について説明するとともに、今台湾で話題の映画「返校」を現代マルチメディアにおける歴史的記憶の伝承推進の一例として紹介し、各国代表および主催者側から高い評価を得た。

10月16日には各国の学生が沖縄県副知事謝花喜一郎氏に謁見し、台湾代表団からは本校の林奕辰君が代表であいさつを述べ、台湾における経験に基づき、平和の伝承は政府や政府関係者のみに頼るのではなく、民衆の一人一人が力を合わせ努力する必要があると説明した。また、台湾代表団は同日、台北駐日経済文化代表処那覇分処も訪問し、現在の台湾と沖縄の関係や外交業務に関して 振国処長と交流する時間を持ち、双方ともに将来、台湾と沖縄が学術上のさらなる協力の機会が得られることへの期待を示した。

10月19日に開催された研修成果発表会では、今回の研修に参加した教授や各国の学生のほか、沖縄県の一般の人たちとも意見交換を行った。台湾代表団は伊江島の反戦平和資料館のスローガンである「戦争の最大の友は無関心、平和の最大の敵は無関心」を引用し、テクノロジーとメディアを応用しながら、時代に合わせて表現方法を進歩させていくことで、これまであまり人々の共感を呼ぶことができなかった歴史問題に、より多くの人々の関心を引き付けることができることを強調した。そして各国の青年代表団は最後に、自国に戻ってからも、平和の尊さと平和教育の重要性を発信し続けていくことを共に宣言した。



3 ベトナム



ベトナム国家大学
ハノイ人文社会科学大学
観光学部

ワークショップ開催の報告

令和元年度10月「平和への思い」事業（沖縄県、日本）合同宿泊研修を終えて

I ワークショップについて

「平和への思い」ワークショップは、沖縄県で行われた令和元年度「平和への思い」事業で当学部生が取り組む決意を表明した「平和のための行動」の一環である。ワークショップを通して平和の理念を発信し、宣言文を用いて歴史や平和について継承していく重要性を学生たちに喚起することを目指す。

このワークショップは、2019年11月11日の18:30から20:30まで、ベトナム国立大学ハノイ校人文社会科学大学観光学部の実習室で行われた。

参加者は観光学部のEnglish for Tourism (E4T) 部、Youth Tourism 部の部員を集めて行った。

II ワークショップの成果

ワークショップを通して参加者は積極的にディスカッションに参加し、「現在世界平和を脅かしている課題」や「今日のベトナムで歴史や平和についての継承実態と直面している課題」について意見を交換した。今日までの歴史・平和継承のやりかたの欠点について率直に話し合い、「歴史教育の方法をより興味深いものにする」、「教育にテクノロジーを導入する」、「資料館の展示を刷新する」など改善策も多く提案された。

ワークショップでは、平和についての教訓や思いが伝えられただけでなく、セッションの終盤では日本での事業に参加した学生たちに選考から宿泊研修までについて質問する機会がワークショップ参加者たちに与えられた。

このプログラムを通して参加者の平和に対する意識が改善され、「平和こそが持続可能な発展への道である」という本プログラムのメッセージがより広く浸透していくことを期待する。



第2部
「平和への思い（ウムイ）」
発信・交流・継承事業 成果報告

第5章
まとめ



第5章 まとめ

今回は、国内外からそれぞれ明確な目的意識を持つ意欲的な 25 名の学生が参加した。参加者全員が必ずしも平和学を専攻していないうえに、それぞれの参加国・地域の状況も、国内で同じ民族によって虐殺が行われる、冷戦時代から続く分断国家である、日本による統治経験を有するなど、その経験や歴史的背景は大きく異なっている。

沖縄合同宿泊研修に参加した学生達は、こうした諸事情の違いを乗り越えて、それぞれの参加国・地域で起こった戦争や虐殺の実相を学び、こうした悲劇を二度と繰り返さないために自らの世代ができることを議論した。

研修最終日のシンポジウムでは、9 泊 10 日に及ぶ沖縄県での合同宿泊研修を踏まえた意見交換を行った。その中で、「虐殺を教訓として、若者が二度とそれを繰り返さないと宣言したい。」「多様な自国のアイデンティティをまとめる重要性がある。」「世界と交流して自分の国を守っていきたい。」「自分が学んだことを周りの人達に伝えていくことが大事。」といった発言があった。その他、「言葉や考え方の違いを実感したが、こうした壁を乗り越えるため直接他の世界を訪ねて聞くことの必要性を感じた。」との意見もあった。

また、若い世代に対する教育現場での平和学習の在り方に関する課題や改善すべき点を述べたほか、映画や SNS の利用、ロールプレイング形式で戦争を学ぶといった提案など、若い世代の興味・関心を高める新しい歴史・平和教育の在り方についても意見を交わした。

最後に、研修を通して学んだことや感じたこと、平和に対する思い（ウムイ）を共同宣言文としてまとめた。その中で、同じ過ちを繰り返すことなく、平和な社会を創造するために活動することや、国、言葉、民族、宗教といった違いを乗り越えて、世界平和の架け橋となるという決意を表明している。

こうした参加者からの率直な感想や意見からは、ある程度事業目的が達成されたと言える。今後は、参加学生のさらなる活躍に期待するとともに、近隣諸国との交流を深め、戦争から得た教訓と戦争体験者の平和への思いをアジア地域全体で次世代へ継承していくため、人材の育成と人的ネットワークの構築を目指し、継続的な活動を続けていきたいと考える。

資料編

1 副知事表敬

事業参加者は10月16日（水）9:30～9:45に、沖縄県庁にて謝花喜一郎副知事を表敬訪問し、各国代表者から事業にける意気込みや研修参加へのお礼を述べた。

謝花副知事から歓迎と激励の言葉をいただいた。

この副知事表敬の様子は、県内のテレビ局、新聞社の取材もあり、同日のニュースで放送された。

【謝花副知事による歓迎の言葉】

- 皆さんを歓迎する。10日間お互いに交流できるのは素晴らしい機会だ。
- 琉球王国時代、沖縄は「万国津梁」の考えのもと、遠く中国・韓国・ベトナム・カンボジアとも交易していた。その中でチムグクル（人を思いやり、相手の痛みを自分のことのように思う心）が築かれ、今も大事にされている。是非この心を大事に本国へ持ち帰ってほしい。
- 伊江島では命の大切さを学んだと思う。歴史を直視して、犯した過ちを二度と繰り返さないよう教訓を学ぶ「歴史」というものが極めて大事だ。戦争は絶対に二度と起こしてはいけないという思いを持ち帰ってほしい。
- 戦争に打ち勝つのは友情・交流だ。互いに信頼しあい、意見がぶつかっても分かり合い交流できるということを学んでほしい。皆さんは本国に戻ったらリーダーになると思うので、頑張ってもらいたい。
- 沖縄県はこういった事業を続けていきたい。今はアジアの参加者だけだが、これから輪が広がっていけば世界が本当に平和になると思う。共に頑張ろう。
- 皆さんの国で一人一人が幸せになることが大事だ。そして周りの国の人達もだんだん受け入れその輪を広げていく、互いに交流し、心を許しあえる仲になってほしい。



参加者挨拶



カンボジア

スノンペン王立大学3年生5名、歓迎していただき心から感謝する。この数日で沖縄の文化や歴史、そしてそれがいかに教育に組み込まれているかなど多くを学んでいる。帰国したら、ここで学んだことを周りの友達に伝えたい。



韓国

済州大学校から招待していただき大変光栄に思っている。中学生の時に一度平和学習で沖縄を訪れたことがあるが、大学生として各国の学生たちと交流しながら平和学習をすると感じ方や考え方の変化に気づかされ、得るものが多い。沖縄に限らず、韓国や他国でも同様の事業があれば参加したいと思う。



台湾

台湾国立政治大学日本研究プログラムから参加している。今回、このような貴重な経験をさせていただき感謝する。この事業では沖縄の歴史だけでなく、その戦争の痛みも深く感じた。我々も入隊経験があるからこそ、誰よりも強く平和を願っている。今回の経験を活かし、帰国後には反戦、そして平和の理念を広めていきたい。



ベトナム

ベトナム国家大学ハノイ人文社会科学大学から参加している。この度、沖縄の歴史・文化を体験学習する機会をいただき感謝する。沖縄の平和な生活が続き、そしてさらに発展することを祈る。



沖縄

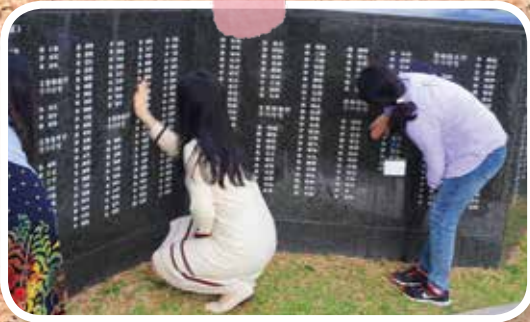
近隣アジア諸国との対話を通し交流を深め、これからの平和発信の在り方について若者目線で考えていきたい。今回の事業を通して沖縄戦で犠牲になった人、そしてその事実を伝えようと努力している人の思いにたくさん触れた。その思いにこたえるためにも真摯に取り組み、良い成果を発表したい。



2 研修の様子



平和の礎



シンポジウム

お別れセレモニー



2019年(令和元年) 10月23日 水曜日

沖縄タイムス

平和の尊さ 次代へ継承

アジアの大学生が宣言

沖縄を含むアジア5カ国・地域の大学生らによる合同宿泊研修「平和への思い」発信・交流・継承事業」の成果報告会が19日、那覇市の県立博物館・美術館であった。戦争などそれぞれの悲惨な歴史を学んだ25人が登壇し、平和の尊さを未来へつなぐアイデアも提起。

「過去の悲劇を二度と繰り返さないため、次世代へ継承する」と共同宣言をまとめ、恒久平和への誓いを新たにしました。

県平和記念資料館の主催で、1日から9泊10日の日程で実施。戦争や虐殺を経験した韓国、台湾、ベトナム、カンボジアと沖縄の学生が互いの歴史を学び、命と平和の尊さを次世代へ継ぐ方法について考えた。

成果発表で、韓国の5人は「若人余が犠牲となった平和を学ぶ宿泊研修の報告会で、共同宣言文を掲げる沖縄やアジアの学生19日午後、那覇市」

沖縄戦の記憶をよめる空間で感じた率直な思いや、米軍基地の存在に「日常で戦争が続いていると実感した」と語った。

支配者や加害者の目線ではなく、被支配者や被害者の目線で、過去の歴史から紡ぐ「平和の言葉」の必要性を指摘。平和は結果ではなく、この道を歩く過程、プロセス。平和が道、そのものだ」と述べた。

県内からは5人が登壇。今の平和教育の課題を挙げ、ロールプレイを通じて戦争に至るプロセスを学ぶ手法を提案した。名桜大学3年の堀之内裕一さん(21)が「自ら主体的に考え、行動した結果が戦争につながることを疑いの体験するもの」と紹介。「平和に見えるもの、いつ戦争が起る

沖縄タイムス社 提供

か分からないという危機感を持たせられる」とした。台湾メンバーは、国民党による大屠殺の記憶継承に向けた教育カリキュラムの必要性を訴えた。ベトナムの学生は「平和は持続可能なサイト(SNS)などを活用した平和発信の「拡散」と述べた。

カンボジアのメンバーは旧ボル・ポト政権による大屠殺の記憶継承に向けた教育カリキュラムの必要性を訴えた。ベトナムの学生は「平和は持続可能なサイト(SNS)などを活用した平和発信の「拡散」と述べた。

2019年(令和元年) 10月20日

日曜日

王京

王求

章斤

幸段

世界平和の架け橋に

5カ国大学生ら研修報告



県平和記念資料館などが主催する「平和への思い」発信・交流・継承事業」で、1日から研修をしていた県と東南アジア地域の学生らによる報告会が19日、那覇市の県立博物館・美術館で開かれた。学生らはそれぞれの国の悲惨な歴史を振り返りつつも、未来に平和への思いをつなげていくことを誓った。発表会の最後には「互いに敬意を持ち、信頼と友情を育み、世界平和への架け橋となるよう努める」との共同宣言を発表した。

共同宣言で「平和の架け橋」となることを誓ったカンボジア、韓国、台湾、ベトナム、沖縄の学生ら19日、那覇市おもろまちの県立博物館・美術館

研修はアジア全体の平和を目指すために、互いの国の歴史を認識して友好関係を築く目的で開催。沖縄のほか、悲惨な戦争や虐殺などを経験したカンボジアや韓国、台湾、ベトナムの学生25人が参加した。

琉球新報社 提供